

一般国道  
210号 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第14集

# 仁右衛門畑遺跡Ⅱ

福岡県浮羽郡吉井町大字新治所在遺跡の調査

下巻

— 弥生時代編 —

2001

福岡県教育委員会

一般国道  
210号 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第14集

# 仁右衛門畑遺跡Ⅱ

福岡県浮羽郡吉井町大字新治所在遺跡の調査

下巻

— 弥生時代編 —

## 序

福岡県教育委員会では建設省九州地方建設局の委託を受けて、昭和55年度から一般国道210号浮羽バイパスの建設に伴う、埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。調査は現在も継続中ですが、浮羽町・吉井町におきましては、部分的な一般供用もおこなわれています。

本書は、平成7年度から9年度にかけて発掘調査を実施した、浮羽郡吉井町所在の仁右衛門畑遺跡の調査記録です。今回の調査では、弥生時代の集落をはじめ、古墳時代の集落、奈良時代の掘立柱建物群を中心とする集落、さらに中世の居館といった数多くの発見があり、先人の足跡を知る貴重な成果を得ることができました。

本書が地域の歴史研究や教育、文化財愛護思想の普及の一助となれば幸いです。

発掘調査および整理作業、報告書の作成にあたりまして、ご協力いただいた多くの方々に対し、深甚の謝意を表します。

平成13年3月30日

福岡県教育委員会

教育長 光安 常喜

## 例 言

1. この報告書は、平成7(1995)年度から平成9(1997)年度にかけて福岡県教育委員会が建設省九州地方建設局(現国土交通省九州地方整備局)の委託を受けて実施した一般国道210号浮羽バイパスの建設に先立つ埋蔵文化財の発掘調査記録で、一般国道210号浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告の第14集である。
2. 本書に掲載した仁右衛門畑遺跡は、一般国道210号浮羽バイパスの埋蔵文化財発掘調査第5地点にあたり、浮羽郡吉井町大字新治字仁右衛門畑、今屋敷、灰高に所在する。
3. 仁右衛門畑遺跡の報告は、平成11・12(1999・2000)年度の2ヶ年に分けて実施する。平成11年度は古墳時代以降編、平成12年度は弥生時代編からなる。
4. 本書に掲載した遺構写真は調査担当者が、遺物写真は北岡伸一が撮影し、空中写真はフォト大塚ならびに空中写真企画に委託した。
5. 本書に掲載した遺構図は調査担当者の他、飯田澄枝・石橋丸子・丸山喜代子・本石セツ子・星野恵美・山口由美子らの協力を得た。
6. 出土遺物の整理・復元作業は岩瀬正信の指導のもと九州歴史資料館で行った。
7. 出土土器の実測は吉田の他、宮地聡一郎、野口未幾、平尾和久、平田春美、棚町陽子、久富美智子、田中典子、坂田順子、堀江圭子、藤原さとみ、江口幸子、堀之内久美子、若松三枝子、栗林明美、寺岡和子、荒川妙、小西藍の協力を得た。また石器、鉄器等の実測は吉田が行った。
8. 鉄斧の分析については東北芸術工科大学芸術学科助手 松井敏也氏に、土器の胎土分析については(株)九州環境管理協会に依頼した。短期間の中で快く受諾していただいた各位に感謝申し上げたい。
9. 遺構・遺物の製図は豊福弥生・原カヨ子・江上佳子が行った。
10. 本書の執筆はIV-2を平尾和久、V-1を松井敏也氏、V-2を(株)九州環境管理協会が行い、他を吉田が行った。編集は吉田が行った。

# 本文目次

## <上巻>

I	はじめに	1
	1. 調査の経過	1
	2. 調査の組織	3
II	位置と環境	5
	1. 地理的環境	5
	2. 歴史的環境	6
III	発掘調査の記録	9
	1. 遺跡の概要	9
	2. 基本層序	9
	3. 検出遺構と遺物（弥生時代）	11
	竪穴住居跡	11
	土坑	46
	甕棺墓	212
	溝	213
	ピット出土土器	224
	包含層その他出土土器・磁器	236
	縄文土器	240
	その他の遺物	242

## <下巻>

IV	おわりに	263
	1. 仁右衛門畑遺跡出土の弥生時代中期土器について	263
	2. 浮羽郡内における弥生時代後期の土器について	272
	3. 弥生時代の遺構について	278
V	自然科学系の分析	281
	1. 仁右衛門畑遺跡出土の弥生時代鉄器	281
	2. 仁右衛門畑遺跡出土土器の胎土分析	286

## 図 版 目 次

- 巻頭図版 仁右衛門畑遺跡周辺航空写真
- 図版 1 1. 調査区中央全景（空中写真 南東から）  
2. 調査区中央北側全景（空中写真 南東から）
- 図版 2 1. 調査区南東全景（空中写真 上空から）  
2. 調査区南東端 第二遺構面全景（東から）
- 図版 3 1. 5 号堅穴住居跡（東から）  
2. 5・6・10号堅穴住居跡（東から）  
3. 6号堅穴住居跡（南から）
- 図版 4 1. 11号堅穴住居跡（南から）  
2. 11号堅穴住居跡 遺物出土状態（北から）  
3. 18号堅穴住居跡（東から）
- 図版 5 1. 20号堅穴住居跡（西から）  
2. 26号堅穴住居跡（北から）  
3. 27号堅穴住居跡（北から）
- 図版 6 1. 53・54号堅穴住居跡（北から）  
2. 55・56号堅穴住居跡（東から）  
3. 56号堅穴住居跡（東から）
- 図版 7 1. 60号堅穴住居跡（南から）  
2. 調査区中央北側 遺構確認状態（東から）  
3. 同 完掘状態（東から）
- 図版 8 1. 61号堅穴住居跡（南から）  
2. 62・63号堅穴住居跡（西から）  
3. 64号堅穴住居跡（西から）
- 図版 9 1. 66号堅穴住居跡（南から）  
2. 67号堅穴住居跡（南から）  
3. 68号堅穴住居跡（南から）
- 図版10 1. 1号土坑（北から）  
2. 2号土坑（東から）  
3. 11号土坑（北から）
- 図版11 1. 12号土坑（西から）  
2. 13号土坑（北から）  
3. 17号土坑（東から）
- 図版12 1. 18・19号土坑（東から）  
2. 20号土坑遺物出土状態（西から）  
3. 20号土坑（西から）
- 図版13 1. 21号土坑（東から）

2. 22号土坑（南から）
  3. 23号土坑（西から）
- 図版14
1. 24号土坑（南から）
  2. 26号土坑（南から）
  3. 27号土坑（東から）
- 図版15
1. 28号土坑（北から）
  2. 29号土坑（西から）
  3. 30号土坑（南から）
- 図版16
1. 31・34・46号土坑（西から）
  2. 31・46号土坑（北から）
  3. 34号土坑（北から）
- 図版17
1. 35号土坑（東から）
  2. 37号土坑（北から）
  3. 38号土坑（東から）
- 図版18
1. 41号土坑（南から）
  2. 43号土坑遺物出土状態（南から）
  3. 43号土坑（南から）
- 図版19
1. 44号土坑（南から）
  2. 45号土坑（北から）
  3. 51号土坑（西から）
- 図版20
1. 52号土坑（東から）
  2. 53号土坑（南から）
  3. 55号土坑（南から）
- 図版21
1. 56号土坑遺物出土状態（南から）
  2. 56号土坑（南から）
  3. 58号土坑（南から）
- 図版22
1. 60号土坑（北から）
  2. 61号土坑（北から）
  3. 62号土坑（北から）
- 図版23
1. 64号土坑（北から）
  2. 65号土坑（北から）
  3. 66号土坑（北から）
- 図版24
1. 68号土坑（南から）
  2. 69・70号土坑（西から）
  3. 72号土坑（西から）
- 図版25
1. 74号土坑（北から）
  2. 76・77号土坑（西から）
  3. 78号土坑（東から）

- 図版26 1. 79号土坑（東から）  
2. 80号土坑（東から）  
3. 80号土坑（西から）
- 図版27 1. 81号土坑（北から）  
2. 82号土坑（東から）  
3. 85号土坑（南から）
- 図版28 1. 86号土坑（東から）  
2. 87号土坑（南から）  
3. 88号土坑（東から）
- 図版29 1. 92号土坑（南から）  
2. 93号土坑（南から）  
3. 96号土坑（北から）
- 図版30 1. 97号土坑（東から）  
2. 99号土坑（北から）  
3. 100号土坑（南から）
- 図版31 1. 102号土坑（東から）  
2. 103号土坑土層（西から）  
3. 103号土坑（北から）
- 図版32 1. 104号土坑（北から）  
2. 105号土坑（西から）  
3. 106号土坑（南から）
- 図版33 1. 107号土坑（東から）  
2. 108号土坑（南から）  
3. 109号土坑（東から）
- 図版34 1. 110号土坑（西から）  
2. 67・68号竪穴住居跡、111・112号土坑（南西から）  
3. 112号土坑（北から）
- 図版35 1. 113号土坑（西から）  
2. 116号土坑（東から）  
3. 117・118・124号土坑（北から）
- 図版36 1. 119号土坑（東から）  
2. 121号土坑（東から）  
3. 73号竪穴住居跡、122号土坑（南から）
- 図版37 1. 123号土坑（西から）  
2. 125号土坑（西から）  
3. 126号土坑（南から）
- 図版38 1. 128号土坑（北から）  
2. 129号土坑（西から）



3. 130号土坑（北から）
- 図版39
  1. 132号土坑（南から）
  2. 133号土坑（南から）
  3. 134号土坑（西から）
- 図版40
  1. 1号甕棺墓（東から）
  2. 25号溝断面土層（北から）
  3. P-169（西から）
- 図版41 11号竪穴住居跡出土土器
- 図版42 18・20・26号竪穴住居跡出土土器
- 図版43 26・27号竪穴住居跡出土土器
- 図版44 27・56・60号竪穴住居跡出土土器
- 図版45 1・2・8・11・19・20号土坑出土土器
- 図版46 20・30号土坑出土土器
- 図版47 30・31号土坑出土土器
- 図版48 34号土坑出土土器①
- 図版49 34号土坑出土土器②
- 図版50 34・35・42・43号土坑出土土器
- 図版51 43号土坑出土土器
- 図版52 43～45号土坑出土土器
- 図版53 45・52・53・55・56号土坑出土土器
- 図版54 56～58号土坑出土土器
- 図版55 58・59・61・68号土坑出土土器
- 図版56 68～70・72号土坑出土土器
- 図版57 74・76・78～80号土坑出土土器
- 図版58 80～82・85～87号土坑出土土器
- 図版59 87・88・92号土坑出土土器
- 図版60 92・93・96・97・100号土坑出土土器
- 図版61 100号土坑出土土器
- 図版62 100・102・103号土坑出土土器
- 図版63 103・105・107・109・110・121号土坑出土土器
- 図版64 125～127号土坑出土土器
- 図版65 128～130・133号土坑出土土器
- 図版66 12号溝出土土器
- 図版67 12・25・42号溝出土土器
- 図版68 42号溝、1号甕棺墓出土土器
- 図版69 ピット出土土器①
- 図版70 ピット出土土器②
- 図版71 ピット、その他出土土器

- 図版72 1. 縄文土器①  
2. 縄文土器②
- 図版73 1. 土錘①  
2. 土錘②  
3. 投弾、土製紡錘車
- 図版74 1. 石製紡錘車、浮子、円盤状石製品  
2. 砥石①
- 図版75 1. 砥石②  
2. 砥石③  
3. 砥石④
- 図版76 1. 砥石⑤  
2. 砥石⑥
- 図版77 1. 凹石、敲石  
2. 石皿
- 図版78 1. 石錘、不明石製品  
2. 滑石製品  
3. 初期須恵器
- 図版79 1. 打製石鏃①  
2. 打製石鏃②  
3. 打製石鏃③
- 図版80 1. スクレイパー①  
2. スクレイパー②
- 図版81 1. メノウ製スクレイパー、石核  
2. 使用痕ある剥片  
3. 打製石斧①
- 図版82 1. 打製石斧②  
2. 磨製石鏃、磨製石剣  
3. 磨製石剣
- 図版83 1. 片刃石斧①  
2. 片刃石斧②  
3. 磨製石斧①
- 図版84 1. 磨製石斧②  
2. 石包丁①  
3. 石包丁②
- 図版85 1. 石包丁③  
2. 石包丁未製品
- 図版86 1. 鉄斧①  
2. 鉄斧②

- 3. 鉄斧③
- 図版87 1. 鉄器①
- 2. 鉄器②
- 3. 鉄滓
- 図版88 1. 銅製品、ガラス製小玉
- 2. 古銭

## 挿 図 目 次

第1図	吉井町位置図	5
第2図	周辺遺跡分布図 (1/25,000)	7
第3図	調査区位置図 (1/2,000)	10
第4図	基本土層図 (1/40)	11
第5図	5・9号竪穴住居跡実測図 (1/60)	12
第6図	5・6号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	13
第7図	6・7号竪穴住居跡実測図 (1/60)	14
第8図	11号竪穴住居跡実測図 (1/60)	16
第9図	11号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	17
第10図	18・20号竪穴住居跡実測図 (1/60)	19
第11図	18・20号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	20
第12図	26・27号竪穴住居跡実測図 (1/60)	22
第13図	26号竪穴住居跡出土土器実測図① (1/4)	23
第14図	26号竪穴住居跡出土土器実測図② (1/4)	24
第15図	27号竪穴住居跡出土土器実測図① (1/4)	26
第16図	27号竪穴住居跡出土土器実測図② (1/4)	28
第17図	27号竪穴住居跡出土土器実測図③ (1/4)	29
第18図	53・54号竪穴住居跡実測図 (1/60)	31
第19図	53～56号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	32
第20図	55号竪穴住居跡実測図 (1/60)	34
第21図	56号竪穴住居跡実測図 (1/60)	35
第22図	60・61号竪穴住居跡実測図 (1/60)	37
第23図	60～62号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	38
第24図	62～64号竪穴住居跡実測図 (1/60)	39
第25図	66号竪穴住居跡実測図 (1/60)	41
第26図	64・66～68・79号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	42
第27図	67号竪穴住居跡実測図 (1/60)	43
第28図	68号竪穴住居跡実測図 (1/60)	44
第29図	73号竪穴住居跡実測図 (1/60)	45
第30図	79号竪穴住居跡実測図 (1/60)	46

第31图	1·2·8·11号土坑实测图(1/30、1/40)	47
第32图	1·2·8号土坑出土土器实测图(1/4)	48
第33图	11号土坑出土土器实测图(1/4)	51
第34图	12·13·17~19·21号土坑实测图(1/30)	53
第35图	12·13·17号土坑出土土器实测图(1/4)	54
第36图	18·19号土坑出土土器实测图(1/4)	57
第37图	20·22·23号土坑实测图(1/40)	59
第38图	20号土坑出土土器实测图①(1/4)	60
第39图	20号土坑出土土器实测图②(1/4)	61
第40图	21~23·24·26·27号土坑出土土器实测图(1/4)	63
第41图	24·26~29号土坑实测图(1/40)	64
第42图	28·29号土坑出土土器实测图(1/4)	66
第43图	30·31·46号土坑实测图(1/40)	68
第44图	30号土坑出土土器实测图①(1/4)	69
第45图	30号土坑出土土器实测图②(1/4)	70
第46图	31号土坑出土土器实测图①(1/4)	72
第47图	31号土坑出土土器实测图②(1/4)	73
第48图	32号土坑出土土器实测图(1/4)	75
第49图	32·34号土坑实测图(1/30、1/40)	76
第50图	34号土坑出土土器实测图①(1/4)	78
第51图	34号土坑出土土器实测图②(1/4)	79
第52图	34号土坑出土土器实测图③(1/4)	81
第53图	34号土坑出土土器实测图④(1/4)	82
第54图	34号土坑出土土器实测图⑤(1/6、1/4)	84
第55图	34号土坑出土土器实测图⑥(1/4)	86
第56图	35·40·41号土坑实测图(1/40)	87
第57图	35·40·41号土坑出土土器实测图(1/4)	88
第58图	42~44号土坑实测图(1/40)	91
第59图	42号土坑出土土器实测图(1/4)	92
第60图	43号土坑出土土器实测图①(1/4)	94
第61图	43号土坑出土土器实测图②(1/4)	96
第62图	43号土坑出土土器实测图③(1/4)	98
第63图	43号土坑出土土器实测图④(1/4)	99
第64图	43号土坑出土土器实测图⑤(1/6、1/4)	100
第65图	44号土坑出土土器实测图(1/4)	102
第66图	45·47号土坑实测图(1/40)	105
第67图	45~48号土坑出土土器实测图(1/4)	106
第68图	48·51~53·55号土坑实测图(1/40)	108

第69图	51号土坑出土土器实测图 (1/4) .....	109
第70图	52·53号土坑出土土器实测图 (1/4) .....	111
第71图	55号土坑出土土器实测图① (1/4) .....	113
第72图	55号土坑出土土器实测图② (1/4) .....	114
第73图	56~58号土坑实测图 (1/40) .....	115
第74图	56号土坑出土土器实测图① (1/4) .....	117
第75图	56号土坑出土土器实测图② (1/4) .....	118
第76图	57号土坑出土土器实测图 (1/4) .....	119
第77图	58号土坑出土土器实测图 (1/4) .....	120
第78图	59~62号土坑实测图 (1/40) .....	122
第79图	59·60号土坑出土土器实测图 (1/4) .....	123
第80图	61号土坑出土土器实测图① (1/4) .....	125
第81图	61号土坑出土土器实测图② (1/4) .....	126
第82图	64~66号土坑实测图 (1/40) .....	128
第83图	64·65号土坑出土土器实测图 (1/4) .....	129
第84图	68·69号土坑实测图 (1/40) .....	130
第85图	68号土坑出土土器实测图① (1/4) .....	132
第86图	68号土坑出土土器实测图② (1/4) .....	133
第87图	68号土坑出土土器实测图③ (1/4) .....	135
第88图	69·70号土坑出土土器实测图 (1/4) .....	136
第89图	70·72·74·76号土坑实测图 (1/40) .....	138
第90图	72号土坑出土土器实测图① (1/4) .....	140
第91图	72号土坑出土土器实测图② (1/4) .....	141
第92图	74·76·77号土坑出土土器实测图 (1/4) .....	142
第93图	77·78号土坑实测图 (1/40) .....	144
第94图	78号土坑出土土器实测图 (1/4) .....	145
第95图	79~81号土坑实测图 (1/40) .....	147
第96图	79·80号土坑出土土器实测图 (1/4) .....	148
第97图	81号土坑出土土器实测图 (1/4) .....	151
第98图	82·85号土坑实测图 (1/40) .....	152
第99图	82号土坑出土土器实测图 (1/4) .....	153
第100图	85号土坑出土土器实测图 (1/4) .....	154
第101图	86~88号土坑实测图 (1/40) .....	156
第102图	86号土坑出土土器实测图 (1/4) .....	157
第103图	87号土坑出土土器实测图① (1/4) .....	158
第104图	87号土坑出土土器实测图② (1/4) .....	159
第105图	88号土坑出土土器实测图 (1/4) .....	161
第106图	92·93号土坑实测图 (1/40) .....	163

第107图	92号土坑出土土器实测图① (1/4)	164
第108图	92号土坑出土土器实测图② (1/4)	165
第109图	93·94号土坑出土土器实测图 (1/4)	167
第110图	94~96号土坑实测图 (1/40)	168
第111图	95·96号土坑出土土器实测图 (1/4)	169
第112图	97·99·100号土坑实测图 (1/40)	171
第113图	97号土坑出土土器实测图① (1/4)	172
第114图	97号土坑出土土器实测图② (1/4)	173
第115图	100号土坑出土土器实测图① (1/4)	176
第116图	100号土坑出土土器实测图② (1/4)	177
第117图	101·102号土坑实测图 (1/40)	180
第118图	102号土坑出土土器实测图 (1/4)	181
第119图	103·104号土坑实测图 (1/40)	183
第120图	103号土坑出土土器实测图 (1/4)	184
第121图	104~106号土坑出土土器实测图 (1/4)	186
第122图	105~107号土坑实测图 (1/40)	187
第123图	107·109·110号土坑出土土器实测图 (1/4)	189
第124图	108~110号土坑实测图 (1/40)	190
第125图	112·113号土坑实测图 (1/40)	192
第126图	112·113·116·118~122号土坑出土土器实测图 (1/4)	194
第127图	114~118号土坑实测图 (1/40)	195
第128图	119~121号土坑实测图 (1/40)	197
第129图	122~124号土坑实测图 (1/40)	199
第130图	123·125号土坑出土土器实测图 (1/4)	200
第131图	125~127号土坑实测图 (1/40)	202
第132图	126·127号土坑出土土器实测图 (1/4)	203
第133图	128·129号土坑实测图 (1/40)	206
第134图	128号土坑出土土器实测图① (1/4)	207
第135图	128号土坑出土土器实测图② (1/4)	208
第136图	129·130·132~134号土坑出土土器实测图 (1/4)	209
第137图	132~134号土坑实测图 (1/40)	210
第138图	1号甕棺墓实测图 (1/10)	212
第139图	1号甕棺实测图 (1/4)	213
第140图	沟断面实测图 (1/20、1/30)	214
第141图	9·12号沟出土土器实测图 (1/4)	215
第142图	12号沟出土土器实测图 (1/4)	216
第143图	20·21号沟出土土器实测图 (1/4)	218
第144图	25·26号沟出土土器实测图 (1/4)	221

第145図	42号溝出土土器実測図(1/4)	223
第146図	ピット出土土器実測図①(1/4)	225
第147図	ピット出土土器実測図②(1/4)	226
第148図	ピット出土土器実測図③(1/4)	227
第149図	ピット出土土器実測図④(1/3)	228
第150図	ピット出土土器実測図⑤(1/3)	230
第151図	ピット出土土器実測図⑥(1/3)	233
第152図	ピット出土陶磁器実測図(1/3)	235
第153図	包含層その他出土土器実測図(1/4、1/3)	237
第154図	包含層その他出土土器・磁器実測図(1/3)	238
第155図	縄文土器実測図(1/3)	241
第156図	土製品・石製品実測図(1/2)	243
第157図	石製品実測図①(1/3)	244
第158図	石製品実測図②(1/3、1/4)	245
第159図	石製品実測図③(1/3、1/4)	246
第160図	石製品実測図④(1/3)	247
第161図	石器実測図①(2/3)	249
第162図	石器実測図②(1/2)	250
第163図	石器実測図③(1/3)	251
第164図	石器実測図④(1/2)	253
第165図	石器実測図⑤(1/2)	254
第166図	石器実測図⑥(1/3)	255
第167図	石器実測図⑦(1/2)	256
第168図	石器実測図⑧(1/2)	257
第169図	金属器等実測図(1/2、1/1)	258
第170図	仁右衛門畑遺跡出土弥生時代中期土器編年図(1/10)	265
第171図	浮羽郡の弥生時代後期土器編年図①(1/8)	274
第172図	浮羽郡の弥生時代後期土器編年図②(1/8・1/16)	275
第173図	仁右衛門畑遺跡弥生時代主要遺構変遷図(1/600)	279
付 図	仁右衛門畑遺跡遺構配置図(1/200)	

## 表 目 次

第1表	浮羽バイパス各調査地点一覧	2
第2表	土製品・石製品・金属製品一覧表①	260
第3表	土製品・石製品・金属製品一覧表②	261
第4表	土製品・石製品・金属製品一覧表③	262
第5表	仁右衛門畑遺跡出土甕分類表①	268
第6表	仁右衛門畑遺跡出土甕分類表②	269

## IV おわりに

### 1. 仁右衛門畑遺跡出土の弥生時代中期土器について

これまで浮羽郡内においては、弥生時代中期初頭～前半の良好な出土遺物が皆無に等しく、その様相に不明な点を多く抱えたままであった。今回仁右衛門畑遺跡で当該期の良好な一括出土土器に恵まれ、遺跡内での編年序列の組み立て、或いは他集落の出土土器との比較検討が可能となったので、以下でこれを行うこととしたい。

土器編年を行うにあたっては、良好な一括資料である土坑出土土器群を取り扱い、基本的に共存資料での抽出を行った。土坑出土資料には複数回の廃棄行為を行っている場合も認められるが、土坑の埋没過程においてそれほど長年に及んだとは思えず、極めて短い期間内での廃棄行為が想定され、時間差はないものと考えている。ゆえに明らかな混入品を除いて一括資料に複数型式を含んでいる場合もその一括性を尊重している。

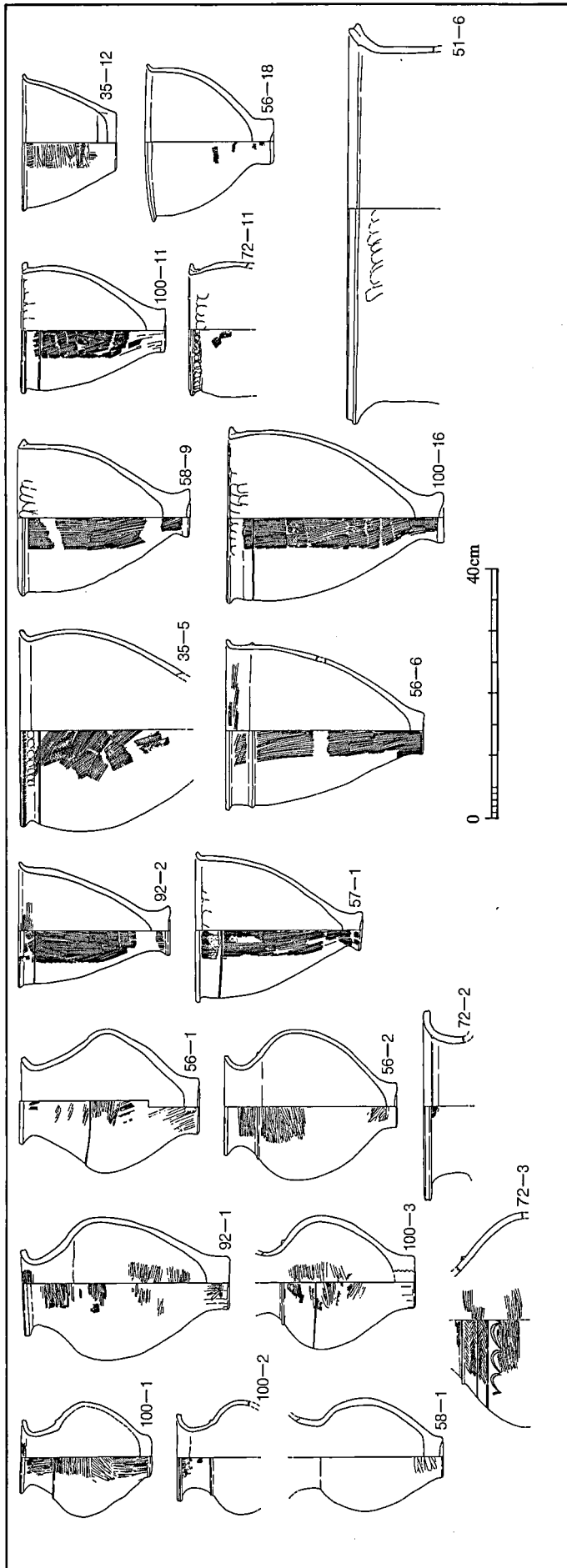
**I a期** この時期の一括資料には、35号・51号・56号～58号・72号・92号・100号土坑出土土器がある。次のI b期とともに大きく中期初頭に位置付けられる一群だが、一括資料の中に前段階である前期末的な特徴が認められるものであり、時期的に若干先行すると思われる事からI b期と分離したものである。従ってI b期と共通する器形が多く含まれ、明確に分離できた訳ではない。

壺は頸肩境に明瞭な段を有し、頸部が直線的に内傾する100号土坑の1（以下100-1と呼ぶ）、長胴でやはり直線的に内傾する頸部を持つ92-1、頸肩境に沈線を巡らせ、頸部が直線的に内傾する56-1がある。これらは単体では前期に位置付けられるものの、例えば100-1の共伴資料を見れば100-2や100-3の壺のように頸肩境に三角突帯を巡らせるものや、100-16の三角口縁の甕のように次のI b期と全く変わらないものである。しかし出土状態からは混入を想定することは出来ない。従って中期初頭の段階にまで前期的様相が残ったものと解釈すべきであろう。100-3は長胴で底部が厚く、92-1と良く似ているが先述の三角突帯を巡らせる点で92-1よりも形式的に後出する。また58-1もやはり底部が厚く長胴気味だが底部が柱状にならない点や外反する頸部に形式的に後出する要素を見出せる。72-3は肩部に文様帯を巡らせており前期末的だが他の共伴遺物は全て中期初頭としてよいものである。この共伴遺物には72-2のように内面に蓋受けの突帯を巡らせる大型壺や72-11の異形の甕がある。この土器に関しては朝鮮系無文土器の影響を考えても良いかもしれない。

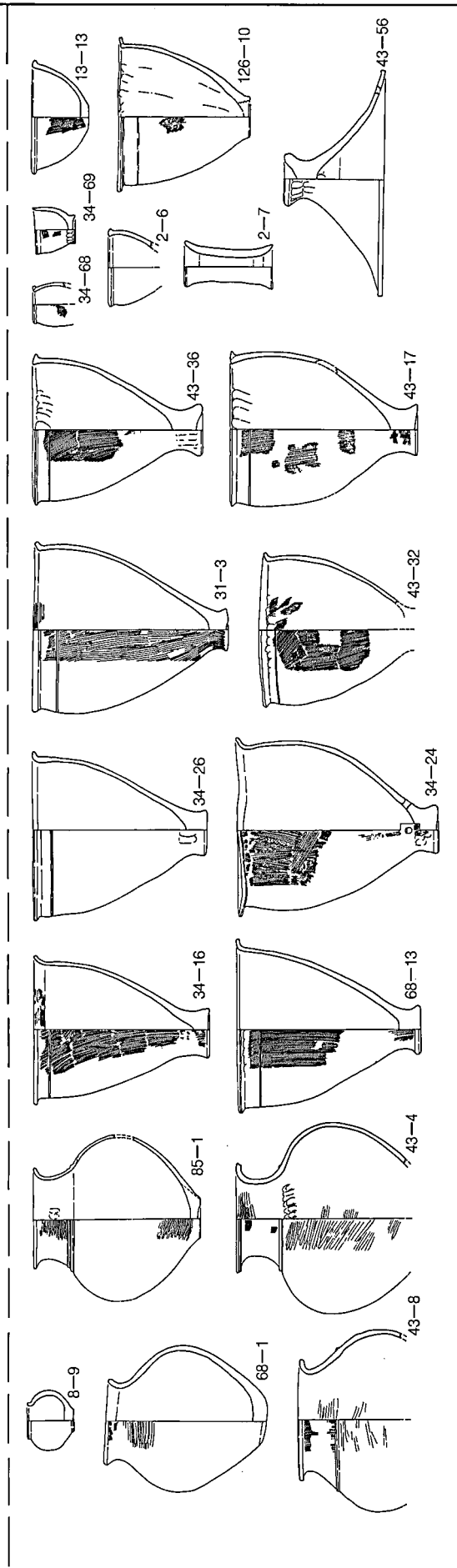
甕は92-1と共伴した92-2の如意形口縁の甕がある。胴部はあまり開かず直線的に伸び、口縁部の外反が緩く、古式の特徴を示している。他に35-5の甕のように口縁部下端に刻目を施したものもあるが、これは胴部が丸く張っており後出の要素をも合わせ持つ。甕は如意形口縁・三角口縁の甕ともに胴部上方が直立する傾向にあるようである。56-6は底部があまり厚くならず、古式の特徴を留めている。

その他の遺物に鉢、大型甕がある。35-12は厚くならない平底で胴部はあまり湾曲せずに開き、口縁部は短く外反している。56-18は底部が非常に厚く甕の底部と似る。51-6は通常甕棺に使用される器形である。

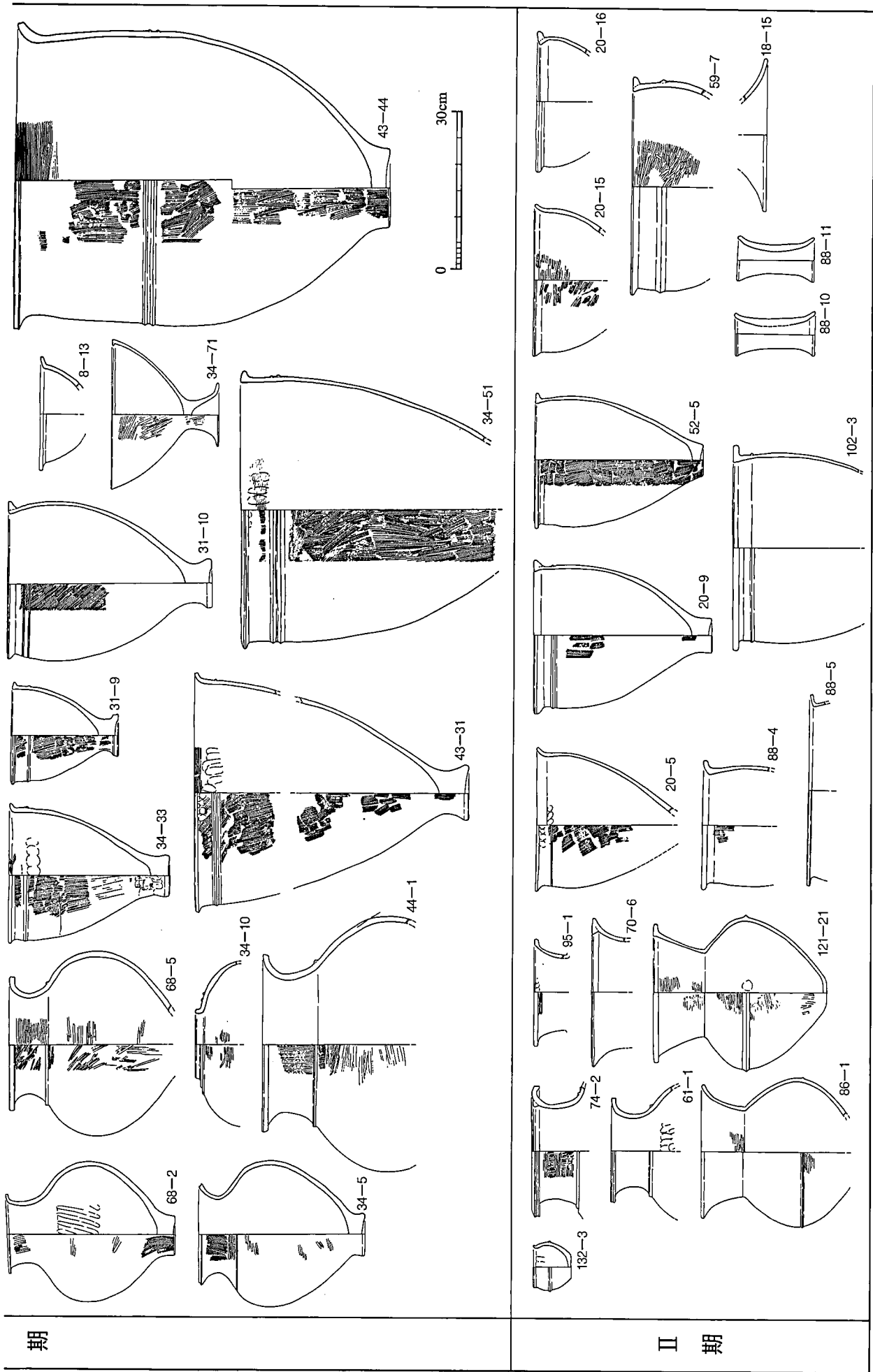




I a 期



I b



第170图 仁右衛門畑遺跡出土弥生時代中期土器編年图 (1/10)

I b期 この時期の良好な一括資料には34号・43号・68号土坑がある。これ以外にも資料が豊富であり、足りない器形はその他の土坑で補っている。典型的な中期初頭の土器群である。

壺には小形・中形・大形がある。8-9は次のⅡ期に継続する器形の無頸壺だが、Ⅱ期のものとは比べて底部が厚く頸部が締まり、胴部に三角突帯を持たない。中形壺は68-1のように底部が丸く不安定なもの、68-1・43-8のように頸部が短いもの、34-5のように口縁端部を幅広く窪ませたもの、34-10のような異形のものなどバラエティに富むが、基本的に胴部が丸く張り、胴部最大径が上位にあり、頸部は前期と比べて立ち上がる傾向にあるものの未だ内傾しており、口縁部は丸く外反している。大半のものは頸肩境に三角突帯を巡らす。大形壺も中形と大差ない。

甕は如意形口縁の甕、三角口縁の甕ともに一定量存在し、どちらかを客体に位置付ける事はできない。中には31-3や43-32のように折衷形態のような甕もある。口縁部の形態以外に異なる点として、三角口縁の甕の方が如意形の甕と比べて器高の割に口径が大きくなる傾向にあるが、一概には言えないようである。どちらも底部は高く柱状をなし、裾が開く。胴部は上半が直立あるいは内傾するが、内傾するものは次のⅡ期へと継続する特徴であり後出する要素である。大半のものが外面の口縁部下に一条の沈線を巡らせているが、中には34-33のように三角突帯を巡らせるものや31-10のやや大形の甕のように二条の沈線を巡らせるもの、34-24のように何も巡らさないものがあるが、量的に少ない。また小形甕31-9や大形甕43-31、34-51には三角突帯を巡らせている。特に大形の甕には沈線ではなく三角突帯を巡らせる傾向にある点は重要である。

鉢には34-68・34-69・2-6の小形鉢、三角口縁の13-13や強く屈曲する如意形口縁系の126-10のような中形鉢がある。器台は2-7のように上下の開きが同じものがこの頃に出現するが、数は少ない。蓋は端部が大きく開き、天井部が甕の底部と良く似た形状のものである。高坏は8-13のように如意形口縁から発展して強く屈曲する口縁のものがある。34-71は高坏と呼ぶには脚部が低すぎることから台付鉢と報告したものである。口縁部内面が短く内側に突出しており次のⅡ期に発展する要素を持っている。43-44は通常甕棺に使用する大形甕である。他の土器群と共伴する資料であり併行関係を求める上で興味深い。

Ⅱ期 この時期の一括資料には20号・74号・88号土坑等があるが、あまり条件の良い一括資料とは言えない。また20号土坑出土土器のように前段階の特徴を持ち、他と比べて若干先行する可能性のある土器群もあるものの、壺等において明瞭なセット関係を保有していなかった為に分離を断念した一群もある。将来の良好な一括資料に期待したい。

壺には小形・中形・大形がある。132-3はI b期の8-9と比べて底部が薄く口縁部が開き、また胴部に一条の三角突帯を巡らせている。中形壺には素口縁のものと、未発達な鋤先口縁のものとがある。鋤先口縁の壺については97-1のようにI b期に遡る可能性もあるが、共伴遺物に恵まれなために判断は差し控えた。今後の資料の増加に期待したい。

素口縁の壺は74-2のようにわずかに内傾するもの、61-1のようにわずかに外反するもの、86-1のように口縁部が大きく開くものがありI期からの連続する変化が追える。鋤先口縁の壺は全て口縁部が開くが、端部の形状で95-1のように端部が肥厚するものから70-6のように内端が突出するものを経て121-21のように端部が鋤先状に伸びるものへと発展段階が認められるが、共伴する土器から見ると全てⅡ期におさまるものである。

甕はやはり如意形口縁の系統を引く甕と三角口縁の系統を引く甕とがある。先述したように20-9には厚い底部や三角形状の口縁部にI b期の要素が色濃く窺え、また共伴する20-5の如意形口縁の甕はI b期のものと変わらない。これらは他のものと比較すると型的にやや先行するものである。

如意形口縁の甕の系統のものは88-4のように内面に明瞭な稜をもつものや、88-5のように強く屈曲したものがある。三角口縁の甕の系統のものは52-5や102-3のように逆L字状に伸びた口縁となる。52-5の底部は既に薄くなりつつあり、胴部上半は内傾する。外面の口縁部下には沈線を巡らさずに三角突帯を巡らすか、あるいは何も巡らさないものが多く、I b期と大きく異なる。如意形口縁の系統を引く甕と逆L字口縁の甕とでは圧倒的に逆L字口縁の甕の方が多い。これもI b期と異なる点である。

鉢には如意形口縁の20-15、短い逆L字状口縁の20-16、逆L字状口縁で口縁部下に三角突帯を巡らす59-7があるが、このうち前二者は甕と同様I b期の様相を色濃く残すものである。器台はI b期と器形の変化は認められないが、出土量が増加する。蓋もI b期と器形の変化はない。

**甕の口縁部形態による分類** 次に仁右衛門畑遺跡出土の弥生時代中期の甕について、口縁部形態による分類を行いたいと思う。以下に採る方法は、かつて中間研志氏によって筑紫野市剣塚遺跡、甘木市西原C遺跡、朝倉町金場遺跡において行われたものであるが、地域的・時期的傾向を追い求める上では有効な手段と思われ、比較検討するためにも同様の分類を援用した。分類基準は以下に示すとおりである。なお、I・II類は弥生時代中期初頭、III・IV類は弥生時代中期前半におおよそ位置付けられるものである。

I-A類：如意形口縁で口縁部下端に刻目を施すもの。

I-B類：如意形口縁で口縁端部の刻目、胴部の突帯・沈線等を全くもたないもの。

I-C類：如意形口縁で口縁部下に沈線を巡らすもの。

I-D類：如意形口縁で口縁部下に三角突帯を巡らすもの。

II-A類：三角口縁で口縁端部に刻目を施すもの。

II-B類：三角口縁で胴部の突帯・沈線等を全くもたないもの。

II-C類：三角口縁で口縁部下に沈線を巡らすもの。

II-D類：三角口縁で口縁部下に三角突帯を巡らすもの。

III-B類：如意形口縁から変化した屈折口縁で突帯・沈線等を全くもたないもの。

III-C類：如意形口縁から変化した屈折口縁で口縁部下に沈線を巡らすもの。

III-D類：如意形口縁から変化した屈折口縁で口縁部下に三角突帯を巡らすもの。

IV-B類：三角口縁から変化した逆L字状口縁で突帯・沈線等を全くもたないもの。

IV-C類：三角口縁から変化した逆L字状口縁で口縁部下に沈線を巡らすもの。

IV-D類：三角口縁から変化した逆L字状口縁で口縁部下に三角突帯を巡らすもの。

第5・6表から得られた事は、まずI類とした如意形口縁の甕は沈線を巡らすC類が多く、次いで突帯・沈線を巡らさないB類となり、三角突帯を巡らすD類は一割にも満たない。従って沈線を巡らせるものが一般的であったと言える。II類とした三角口縁の甕はB類が約半数を占め、次いでC類が41%とかなり高い割合を占める。D類はI類同様1割程度である。もっともB類に関しては

第5表 仁右衛門畑遺跡出土甕分類表①

	I類				II類				III類			IV類		
	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	A	B	C
住居														
住5							1					3		1
住6						1	1				1			1
住53										1		3		
住54						2	1	1	1					
住55			2									8		
住56		2	1						1					
住60									3			2		
住61						1			1					
住62						2			3					
住64			1			1			2					
住66												2		
住67									1			4		
住68							1					3		
住79		1								1				
土坑														
土1			1						1					
土2		1				1								
土8						1								
土11		1	2			4	3							
土12			1			1						4		1
土13							1							
土17		2	2			1								
土18										1		6		1
土19		1										1		
土20			4				1					1	1	1
土21		1				1	1							
土22												2		
土23				1		1						1		
土26				1										
土27												1		
土28						2		1						
土29						1						2		1
土30		1	7			2	6							
土31			7				2	3						
土32			2					2						
土34		1	15	4		5	9	3						
土35	1	2	2			2	2							
土40		1										1		
土42		5				1	1							
土43			8	6		1	8	3						
土44			2			1								
土45			4					2						
土46		1	1											
土47							1		1			2		1
土48	1	1	1			1								
土51			1	1										
土52						1						3		
土53				2										
土55			3	1		1	6							
土56			2	3			2	1						
土57			1				1							
土58			3			3	2							
土59						1				1		2		1
土60						3	1							
土61									1	1		5		3
土64		1				1								
土65			1											
土68		4	7	1		2		2						

第6表 仁右衛門畑遺跡出土甕分類表②

	I類				II類				III類			IV類			
	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	A	B	C	
±69			1												
±70												4			
±72			5			3	2								
±74			1									4			
±76				1						1					
±77			1												
±78		1	1			1						5			
±79		3	1			1	2								
±80			2			2	1								
±81									2			7			
±82												4	1		
±85		2	5	1											
±86									1			1			
±87		1	7			1			1		1	4			
±88									2						
±92		2	5			1	3		1						
±93		1	6			1									
±94		1													
±95									1			4			
±96													1	1	
±97			7	1		3	4								
±100		2	5			2	3	1							
±102						2								1	
±103		1	3									5			
±104		2	1												
±105			1			4	2								
±106		1				3									
±107												1			
±109		1	2												
±110												7	1	1	
±112		1				2									
±113			1			1									
±116		1				3									
±118			1			2									
±119			1			1									
±120				1								2			
±122															
±123		1	1	1											
±125	1	1	3			1									
±126		2	1			2									
±127		1	1			2									
±128		2	1	2		3	3								
±132						2						1			
±133		1	1												
溝															
溝9							1								
溝12		2	7				2								
溝20							2								
溝21			1				1		1			7		1	
溝25		1	1			2									
溝26		1													
その他		2	1			6	4	1			1	8		1	
計	3	60	156	27	0	96	81	20	24	4	4	120	4	16	
	1.2%	24%	63%	11%	0%	49%	71%	10%	72%	15%	12%	86%	3%	11%	
	246				197				33			140			
	56%				44%				19%			81%			
	443								173						

口縁部の細片のみで胴部を欠失したのも少なからず含んでおり、本来はかなり少なかったものと思われる。いずれにせよ、Ⅰ・Ⅱ類ともに沈線を巡らす割合が高く、対して三角突帯は少なかったと言える。

Ⅰ類とⅡ類の比率に関しては、Ⅰ類が56%、Ⅱ類が44%でほぼ同数であり、如意形口縁分布圏と三角口縁分布圏の中間に位置する当地域の地域色をよく示しているものと思う。

次にⅢ類とⅣ類を比較してみると、Ⅲ類・Ⅳ類ともに沈線・三角突帯を持たないB類が多く、沈線のC類、三角突帯のD類が極めて低い。これにもやはり胴部を欠失する口縁部細片の資料を含むために実際はもっとB類の数値が低くなると思われるが、それでもB類の増加と、対するC・D類の減少は傾向として認められるだろう。更にⅢ類とⅣ類の比率を比較してみると、Ⅲ類が約2割、Ⅳ類が約8割でⅣ類が圧倒的に比率が高く、この点でもⅠ・Ⅱ類と大きく異なっており興味深い。

上記の検討を基に、周辺遺跡との比較を行い当遺跡出土土器の特徴を述べておく。

まず、仁右衛門畑遺跡と同じ吉井町内にある大碓遺跡では弥生時代前期後半～中期初頭の土器が出土しており、調査担当者によって遺構別の変遷が検討されている。この中でV期とされた土器群については弥生時代中期初頭の特徴をよく示しており、仁右衛門畑遺跡のⅠb期とした土器群と併行する。Ⅳ期とされた土器群については、壺の形態や甕の胴部から口縁部にかけての形態、口縁部に刻目を施さない点で中期初頭でも古い段階に位置付けられると判断でき、この点では仁右衛門畑遺跡のⅠa期に併行するものと考えられる。だがその一方で、如意形口縁のみで構成され、甕の胴部に三角突帯を巡らせるものが多く、底部があまり厚くならない点で仁右衛門畑遺跡例と異なり、同一地域内におけるこの差異を果たして時期差とみるのか、或いは集落間の差と見るのかは今後の課題である。

続いてやはり同町内にある鷹取五反田遺跡では、弥生時代中期後半の土器がまとまって出土している。甕の口縁部形態を見てみると、亀ノ甲系の三角口縁の系統と言われる鋤先状口縁や端部を丸くおさめる逆L字状口縁の甕とともに、遠賀川以東の如意形口縁の系統と言われる端部を四角く面取りし、上端を跳ね上げる、く字状口縁の甕が少なからず出土しており、当遺跡のⅡ期の様相と大きく異なる。これを果たして時期的な特徴として良いのかどうか、今後の調査の進展に期待したい。

次に、筑後川を挟んで対岸に位置する朝倉郡域の遺跡と比較を行う。

朝倉町にある上の原遺跡では、弥生時代前期末～中期中葉の良好な一括資料が得られており、これを基に土器の変遷が提示されている。仁右衛門畑遺跡と比較して、壺や甕の形態、土器組成の点から仁右衛門畑遺跡のⅠa・Ⅰb期が上の原遺跡のⅡ期、仁右衛門畑遺跡のⅡ期が上の原遺跡のⅢ期にほぼ対応する。しかし細部を見ると、壺において頸部が直立するタイプは仁右衛門畑遺跡では個体数が多くはなく、仁右衛門畑遺跡では頸部が内傾する前期の特徴を残す壺が後々まで残存し、中期初頭では主体的な位置にある。上の原遺跡で見られる広口の小形壺は仁右衛門畑遺跡では出土していない。甕においては上の原遺跡のⅡ期に見られる口縁部とその下の三角突帯に刻目を施す前期的な甕は仁右衛門畑遺跡では全く出土していない。

上の原遺跡と同じ朝倉町にある金場遺跡でもやはり弥生時代中期初頭の良好な一括出土土器があり、先述したとおり甕の口縁部形態について分類がなされている。仁右衛門畑遺跡と比較すると、金場遺跡では如意形口縁の甕が多数を占めるのに対し、仁右衛門畑遺跡では如意形口縁と三角口縁

の甕がほぼ同数であり、地域性をよく示しているものと思う。さらに口縁部下に突帯を巡らす甕の比率が仁右衛門畑遺跡と比べて高い事も地域性を表したものと言えるだろう。なお口縁部外面が凹面状をなし、全体的なカーブが跳上口縁的なものは、仁右衛門畑遺跡は確実にそれと認定できるものは見出せなかった。

最後に、距離はやや離れるが、同じ筑後平野にある三国丘陵の土器と比較を行う。三国丘陵については片岡宏二氏によって中期の詳細な土器編年が組み立てられており、比較を行う上で非常に参考になる。仁右衛門畑遺跡でI a・I b期とした土器群のうち、甕については三国丘陵の編年でのI b期に相当する。しかし壺においてはI a期におさまるものであり、セット関係において食い違いが生じている。やはり仁右衛門畑遺跡では頸部が内傾する壺が長く採用されたものと解釈して良いだろう。仁右衛門畑遺跡でII期としたものは、三国丘陵の編年のI b期の新しい段階からII a期の古い段階に相当すると思われる。

これまで見てきた結果によると、壺の頸部や甕の口縁部、外面口縁部下方の沈線と突帯の比率において仁右衛門畑遺跡の特徴とも言える差異を見出すことが出来た。これが果たして仁右衛門畑遺跡だけの特徴なのか、または浮羽地域全体の地方色なのかは今後の事例をまっけて検討したい。

#### 引用・参考文献

【堺町・大碓遺跡】	浮羽バイパス関係文化財調査報告	第8集	1994	福岡県教育委員会
【鷹取五反田遺跡I】	浮羽バイパス関係文化財調査報告	第9集	1998	福岡県教育委員会
【西原C遺跡】	九州横断自動車道関係文化財調査報告	(3)	1984	福岡県教育委員会
【上の原遺跡I】	九州横断自動車道関係文化財調査報告	(18)	1990	福岡県教育委員会
【上の原遺跡II】	九州横断自動車道関係文化財調査報告	(27)	1993	福岡県教育委員会
【上の原遺跡III】	九州横断自動車道関係文化財調査報告	(33)	1995	福岡県教育委員会
【金場遺跡】	九州横断自動車道関係文化財調査報告	(54)	1999	福岡県教育委員会
【剣塚遺跡群】	九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 -X X IV-		1978	福岡県教育委員会
【三沢蓬ヶ浦遺跡】	福岡県文化財調査報告書	第66集	1984	福岡県教育委員会
【大板井遺跡II】	小郡市文化財調査報告書	第14集	1982	小郡市教育委員会
【一ノ口遺跡I地点】	小郡市文化財調査報告書	第86集	1994	小郡市教育委員会
【北松尾口遺跡I地点】	小郡市文化財調査報告書	第54集	1989	小郡市教育委員会
【北松尾口遺跡II地点】	小郡市文化財調査報告書	第63集	1990	小郡市教育委員会
【北松尾口遺跡III・IV地点】	小郡市文化財調査報告書	第77集	1992	小郡市教育委員会



## 2. 浮羽郡内における弥生時代後期の土器について

今回編年の対象とする浮羽郡は、近年浮羽バイパス関連の継続的な発掘調査や町の調査が行なわれており、著しい資料の増加が確認される。これらを用いて郡内の弥生時代前期後半から中期前半、古墳時代土師器の編年の研究が行なわれている。上記2時期の資料に比べて弥生時代後期の資料はいささか時期の偏りやその絶対数の不足など少し問題点もあるが一編年試案として考えてみたいと思う。

### 研究小史

北部九州における弥生時代後期土器の編年研究史は

I期 戦前

II期 戦後から1970年代

III期 1980年代前半

IV期 1980年代後半

V期 1990年以降

の5時期に区分される。それぞれI期は編年研究の始まりの時期、II期は編年研究の活発化の時期、III期は弥生時代後期土器編年の確立期（対象地域は広いことが多い）、IV期は土器編年に属性分析を用い出す時期、V期は小平野単位で土器編年を行う時期であると言えるだろう。

したがって本稿では、土器の属性を抽出し、変化を追いつつ、その土器が共伴する一括性の高い遺構を用いて浮羽群内における弥生時代後期土器の変遷をたどることとする。

### 分析

弥生時代後期の土器はおおよそ壺、甕、高坏、鉢、器台、支脚の6形式から構成されており、壺ならば複合口縁壺、長頸壺、直口壺等々というようにそれぞれ小形式を含んでいる。本来、各形式、小形式ごとに属性を取り出し、その組み合わせから型式を設定することが必要である。しかし浮羽郡内においては各形式の資料が豊富にあるわけではなく、数個体しか確認できていないものもある。したがって、今回は抽出した各遺構に比較的安定して存在する在地系の壺、甕を主な資料として属性分析を行なうこととする。まず、その過程で設定された各型式の遺構における共伴状況から編年をくみ、他の4形式については住居における共伴事例から、大きな形で変化の流れを追うこととする。

#### (1) 型式分類

##### 1 複合口縁壺の分析と型式の設定

壺は資料数が多く、各時期において形態の変化が大きい複合口縁壺を分析資料とする。複合口縁壺の分析には岩永氏の口縁部形態、頸部形態、頸部の長短、胴部形態、胴部突帯の位置、底部形態の6要素に、頸部突帯の形態と本数、胴部突帯の形態および刻み目の有無の2要素を加えた8要素を用いる。その要素を数種に分類し、個体上における組み合わせから以下の6型式を設定した。

**複合口縁壺1類** 中期の袋状口縁壺の形態を残すもので口縁の反転部に稜が入らず、平底で胴が張るもの将来的には胴部・頸部の形態差から、さらに分類できるものも含む。

**複合口縁壺2類** 口縁反転部に弱い稜があるもので頸部は短い。また、時期が下ると頸部のしま

りを欠いてくる。平底のものが多い。

**複合口縁壺 3類** 口縁反転部が強く内湾して内傾するものである。時期を下ると頸部は短頸から長頸に向かいしまりを欠くものもある。3類は底部の出土例が無いが平底から凸レンズ状底であると思われる。

**複合口縁壺 4類** 口縁反転部が弱く内湾して内傾するもので、形態的に3類と5類の間である。頸部は長くなり、しまりがあるものは少ない。底部の出土例はないが3類と同様の形態を持つと思われる。

**複合口縁壺 5類** 口縁反転部が直線的に内傾するもので、頸部が直線的に大きく開くものがでてくる。底部は平底から凸レンズ状底。

**複合口縁壺 6類** 口縁反転部が一度内傾し再び立ち上がるものから、直立するものまで含む。底部は平底に近い凸レンズ状底から丸底に近いものまでである。

## 2 広口甕の分析と型式設定

広口甕は口縁部形態、口唇部形態、胴部形態、底部形態の4要素を用いる。岩永氏は頸部のしまり具合も要素に挙げてあるが、浮羽郡内においては完形の土器が少ないため参考程度に留めておく。複合口縁壺同様、要素を数種に分解し各個体における組み合わせから以下の5型式を設定した。

**広口甕 1類** 口縁部が中期的な形態を保つものである。低部は平底である。

**広口甕 2類** 口縁部が直線的に立ち上がり、頸部内面に稜がないものである。口唇部は方形を呈す。時期を経るに従い胴部中位が張るものが増えてくる。

**広口甕 3類** 口縁部が直線的で頸部内外面に稜が入るものである。口唇部は隅丸方形から方形を呈し、胴部最大径は胴部中位が張るものが多い。底部は平底で内湾しながら立ち上がる傾向にある。

**広口甕 4類** 口縁部が外反しながら立ち上がり、頸部内外面に稜が入るものである。口唇部の形態は様々で、底部は平底で内湾しながら立ち上がるものから凸レンズ状底を呈するものが多い。

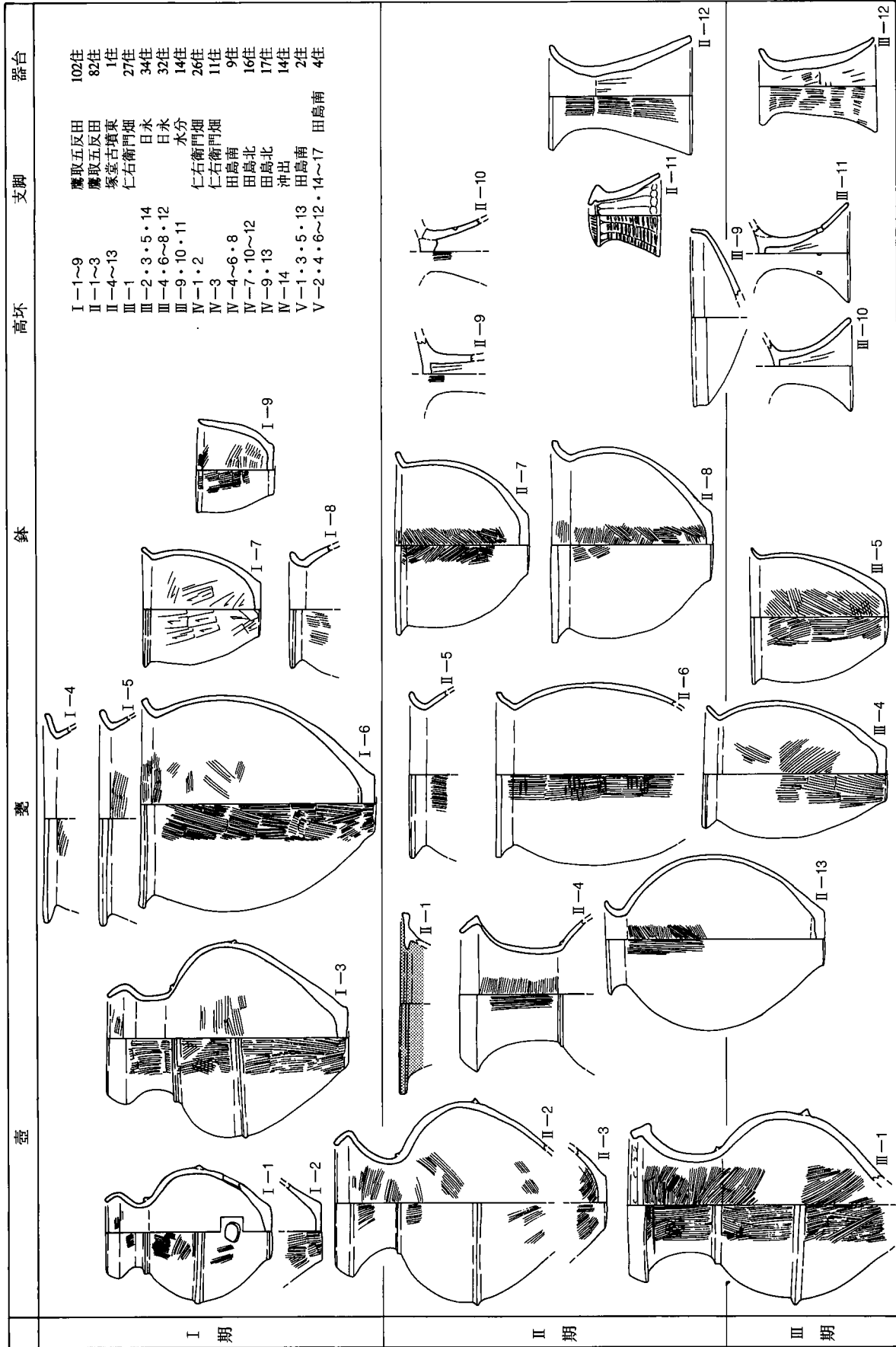
**広口甕 5類** 口縁部が外反し頸部内面に弱い稜が入るものから無いもので、底部は凸レンズ状のものが多い。

### (2) 編年

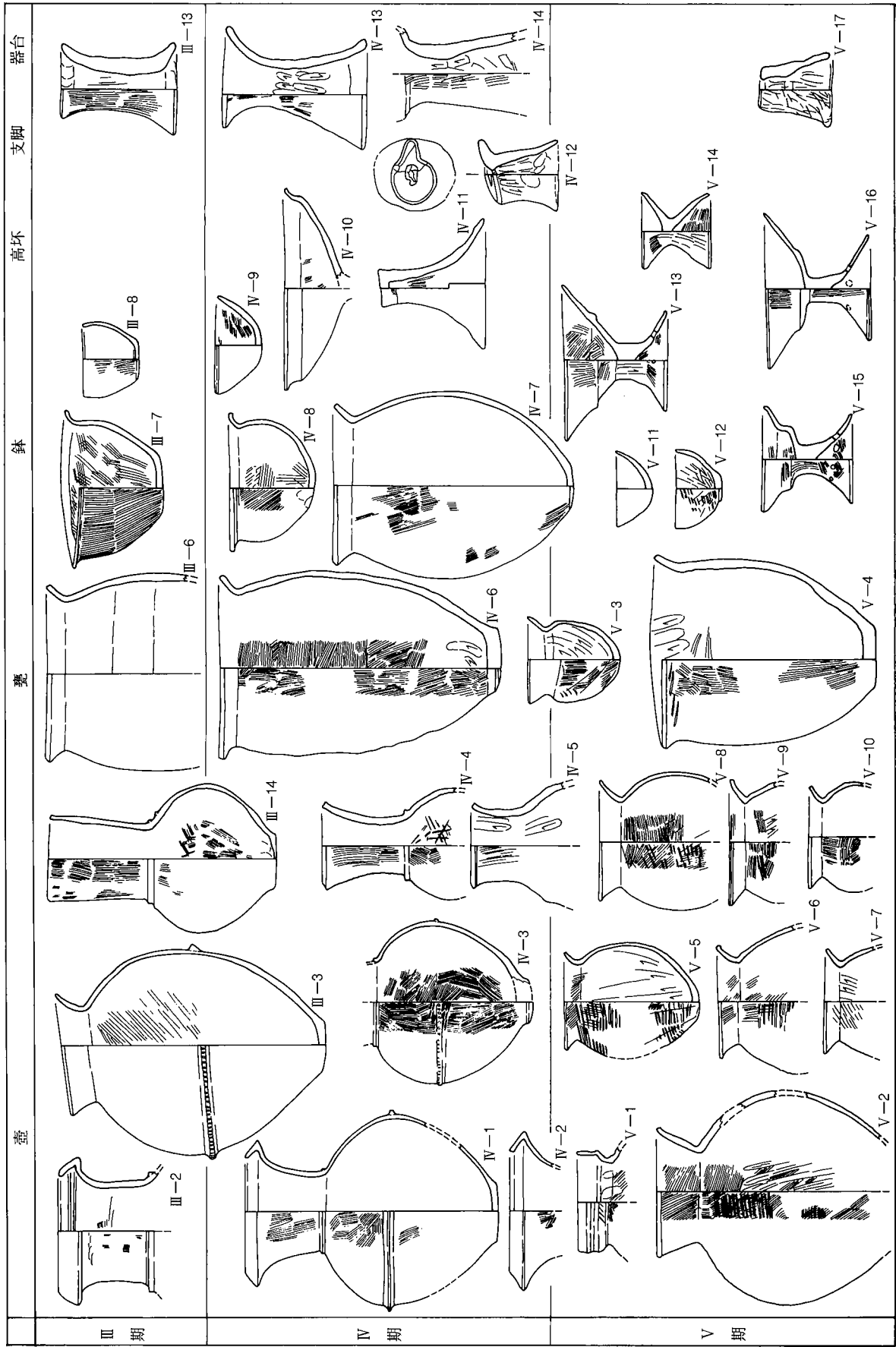
ここでは弥生時代後期を5期に区分し編年を試みる。このうちⅠ・Ⅱ期が高三濬式、Ⅲ・Ⅳ期が下大隈式、Ⅴ期が西新式に相当するものと考え。Ⅱ期とⅢ期は口縁が立ち上がる高坏の出現を、Ⅳ期とⅤ期は丸底に近い直口壺の出現を画期とする。Ⅴ期の新しい段階では庄内系・布留系土器が出現する。また、今日までの編年研究から土器の底部が平底→凸レンズ状底→尖底・丸底へと変化していくことが確認されており、その変化を中心に壺・甕の口縁部の形態変化を対応させる。この場合、基本的に住居跡等、比較的出土状況に一括性が想定される遺構から抽出した遺物を取りあげる。

Ⅰ期(第171図Ⅰ-1~9) 弥生時代後期初頭である。図化した資料は鷹取五反田遺跡102号住居であるが、浮羽郡全体として一括資料は非常に少ない。

壺は複合口縁壺2類(Ⅰ-1~3)が確認される。弱い稜がはいる袋状口縁と平底から内湾しながら立ち上がる胴部形態から、Ⅰ期の中でも新しい様相を示す。後期初頭の複合口縁壺は短頸で袋状口縁を持つ塚堂古墳東地区1号住居跡出土の壺のようなものをさすのであろう。また、確認されていないが大型の鋤先口縁壺、広口壺の存在も想定される。甕は中期的口縁形態を持つ広口壺(Ⅰ-



第171図 浮羽郡の弥生時代後期土器編年図① (1/8)



第172図 浮羽郡の弥生時代後期土器編年図② (IV-3: 1/16、他は1/8)

4～6)、直線的に立ち上がる口縁の広口甕(I-7)丹塗りの広口壺(I-8)がある。広口甕は平底で内湾しながら立ち上がり、胴部中位に最大径をもつもの、平底で外反しながら立ち上がる形態の2形態がある。鉢は素口縁(I-9)である。平底で口縁端部を摘み上げる。内外面ともにハケ目を施す。高坏は確認されていないが、中期後半の鋤先口縁を持つものが存在すると思われる。

I期は壺・甕ともに中期後半の形態を引きずりながらも整型、調整等が粗雑になる傾向があるといえるだろう。

II期(第171図II-1～11)弥生後期前半である。図化した資料は鷹取五反田遺跡82号住居、塚堂古墳東地区1号住居跡のものである。II期はI期と比べ資料の増加傾向がうかがえる。

壺は鋤先口縁を持つ広口壺(II-1)、複合口縁壺、口径が小さい広口壺(II-13)がある。複合口縁壺は短頸の2類(II-2)としまりのない長頸で弱く内湾しながら内傾する口縁を持つ4類(II-4)、図化していないが、強く内湾する口縁を持つ3類が存在する。底部は平底から平底に近い凸レンズ状底をもつ。広口壺も平底に近い凸レンズ状底である。甕は外反する口縁を持ち胴部中位が張ってくる広口甕4類(II-5・6)と図化していないが肩部が張るものが存在する。底部を確認できる資料は少ないが、平底から凸レンズ状底を呈する。鉢(II-7・8)は甕と同じような形態を持つ。胴部は張り、平底に近い凸レンズ状底を呈する。調整は内外面ともにハケメを施す。高坏は脚部のみ出土であるが、中期的なもの(II-9)としまりが無く開いていくもの(II-10)の2種類が確認できる。器台(II-12)くびれ部が上位に位置するもので外面ハケメ、内面ナデを施す。支脚(II-11)は器高の低い厚手のものである。口縁部は内傾し、外面にタタキを施す。

II期は中期後半系統の土器が存在する最後の時期である。壺・高坏が比較的新しい段階まで残る傾向は玄海灘沿岸においても見られる様相である。

III期(第171・172図III-1～13)弥生後期中葉である。図化した資料は仁右衛門畑遺跡27号住居、日永遺跡2区32号住居、34号住居、水分遺跡14号住居のものである。

壺は複合口縁壺4類(III-2)と長頸で直線的に内傾する口縁を持ち、球胴の複合口縁壺5類(III-1)、直口化に向かう広口壺(III-3)が存在し長頸壺(III-14)が出現する。複合口縁壺は底部が残るものはないが凸レンズ状底を呈する。広口壺も凸レンズ状底を持ち、胴部最大径が中位に位置する。また、口縁が立ち上がる傾向にある。長頸壺は球胴のしまりが無く直線的に立ち上がる口縁部をもつ。甕は広口甕3類(III-4・6)、広口甕4類(III-5)が存在する。両者とも長胴化の傾向が著しく、底部は凸レンズ状底をもつものが増える。鉢(III-19・20)は跳ね上がる口縁を持つものと素口縁のものがある。両者ともに凸レンズ状底のものが多い。高坏(III-9～11)は中期の系統を引くものは無くなり、坏部が途中で屈曲し口縁部が立ち上がるものが出現する。脚部はしまりが無くラップ状に開くもので、透かしを持つものもある。器台(III-13)は、II期よりもしまりの位置が上位に移る。

III期は直口壺・口縁部が立ち上がる高坏の出現により、後期前半と画される。

IV期(第172図IV-1～14)図化した資料は仁右衛門畑遺跡11号、26号住居、田島南遺跡9号住居、田島北遺跡16号住居、17号住居である。

壺は複合口縁壺5類(IV-1)と直線的に内傾し、口縁端部が小さく外反する6類(IV-2)である。底部も丸底に近い凸レンズ状底を持つもの(IV-3)もある。長頸壺(IV-4・5)は頸部の付根が一度閉まり、立ち上がるにつれ広がる口縁を持つもので、胴部最大径が中位に位置する。

甕は広口甕4類(Ⅳ-6・7)でほとんど胴の張りが無いものや胴部中位に最大径が位置し張りがあるものが存在する。いずれも凸レンズ状底を持つ。鉢(Ⅳ-8・9)は凸レンズ状底から丸底を呈す。内外面ともハケ目を施す。高坏(Ⅳ-10・11)は坏部が途中で屈曲し外反するものである。脚部もより裾が広がる。器台は杢型器台(Ⅳ-12)と、口縁部が袋状を呈すものもある(Ⅳ-14)。V期(第172図Ⅴ-1~17) 図化した資料は田島南遺跡2号、4号住居跡である。V期では複合口縁壺は確認できていないが外来系の二重口縁壺(V-1)が出土している。直口壺はやや開いた口縁部を持ち、胴部中位に最大径が位置するもので、新しい様相を示す。甕は内湾した口縁を持ち頸部に稜がない広口甕4類が出現する。頸部のしまりは弱い。また、V期から他地域の影響を受けた甕が多く出現する。鉢も丸底化が進み(V-11) タタキ痕を持つものもある(V-12)。高坏は外反する口縁部がさらに伸びるものである(V-13・16)。この他に瀬戸内系の高坏(V-15)も出土している。

V期は在地系の土器を凌駕する勢いで外来系の土器が流入してくる時期である。今回は検討した遺構数が少ないため詳細は不明であるがV期を古相、図化したものの大部分を占める新相の二時期に区分できると考えられ、後者は古墳時代の初頭に位置付けられる。

### (3) まとめ

本稿では浮羽郡の弥生時代後期土器編年試案を示した。その過程で気づいたことを記してまとめとしたい。

郡内には編年作業に耐えうる一括性の高い住居が20棟以上ある(本報告文を含む)。そこで上記のような属性分析を用いて時期を見ていくと、後期Ⅰ期が極端に少ないことが確認される。また、Ⅰ期からⅣ期まで次第に住居が増加する傾向にあるが、V期に入ると3分の1ほどに減少することがわかる。遺構の数が少ないので後期初頭と弥生終末~古墳時代初頭に大きな画期があったとは断言できないが画期については今後着目すべきところであると思われる。

### 参考文献

- |            |   |
|------------|---|
| 岩永省三(1989) | 「土器から見た弥生時代社会の動態—北部九州地方の後期を中心として—」<br>『生産と流通の考古学』 |
| 常松幹雄(1991) | 「伊都国の土器、奴国の土器」『古代探叢』Ⅲ                             |
| 小池史哲       | 「第8章 第3節 1. 土器」                                   |
| 『塚堂遺跡』Ⅰ    | 浮羽バイパス関連埋蔵文化財調査報告 第1集 1983 福岡県教育委員会               |
| 重藤輝行       | 「仁右衛門畑遺跡を中心とした浮羽群の古墳時代土師器編年」                      |
| 『仁右衛門畑遺跡』Ⅰ | 浮羽バイパス関連埋蔵文化財調査報告 第12集 2000 福岡県教育委員会              |
| 水ノ江和同      | 「大碓遺跡出土の弥生土器について」                                 |
| 『堺町・大碓遺跡』  | 浮羽バイパス関連埋蔵文化財調査報告 第8集 1994 福岡県教育委員会               |
| 『日永遺跡』Ⅱ    | 浮羽バイパス関連埋蔵文化財調査報告 第7集 1994 福岡県教育委員会               |
| 『鷹取五反田遺跡』Ⅰ | 浮羽バイパス関連埋蔵文化財調査報告 第11集 1998 福岡県教育委員会              |
| 『沖出遺跡』Ⅰ    | 浮羽町文化財調査報告書 第3集 1987 浮羽町教育委員会                     |
| 『田島北遺跡』    | 浮羽町文化財調査報告書 第9集 1992 浮羽町教育委員会                     |
| 『田島南遺跡』    | 浮羽町文化財調査報告書 第13集 1998 浮羽町教育委員会                    |
| 『田主丸古墳群』   | 田主丸町文化財調査報告書 第2集 1985 田主丸町教育委員会                   |

### 3. 弥生時代の遺構について

今回報告を行った弥生時代の仁右衛門畑遺跡では、竪穴住居跡23棟、土坑102基、甕棺墓1基、溝8条を検出した。これらは大きく弥生時代中期初頭～前半と、弥生時代後期中葉～後半の二時期に分けられる。この二つの時期の間には空白期間が存在し、継続的に集落が営まれていた訳ではない。以下ではこの二つの時期に属するそれぞれの遺構について検討を行いたいと思う。どちらの時期も検出できた遺構は集落全体のわずか一部分に過ぎず、これだけをもって集落の構造を把握することは到底なし得ない事である。また当地域の該期集落の調査事例もそれほど多くはなく、遺構を類型化することもまた困難である。従って結論は今後の調査の進行に期待し、今回は各遺構の时期的傾向と問題点の把握に努めたいと思う。

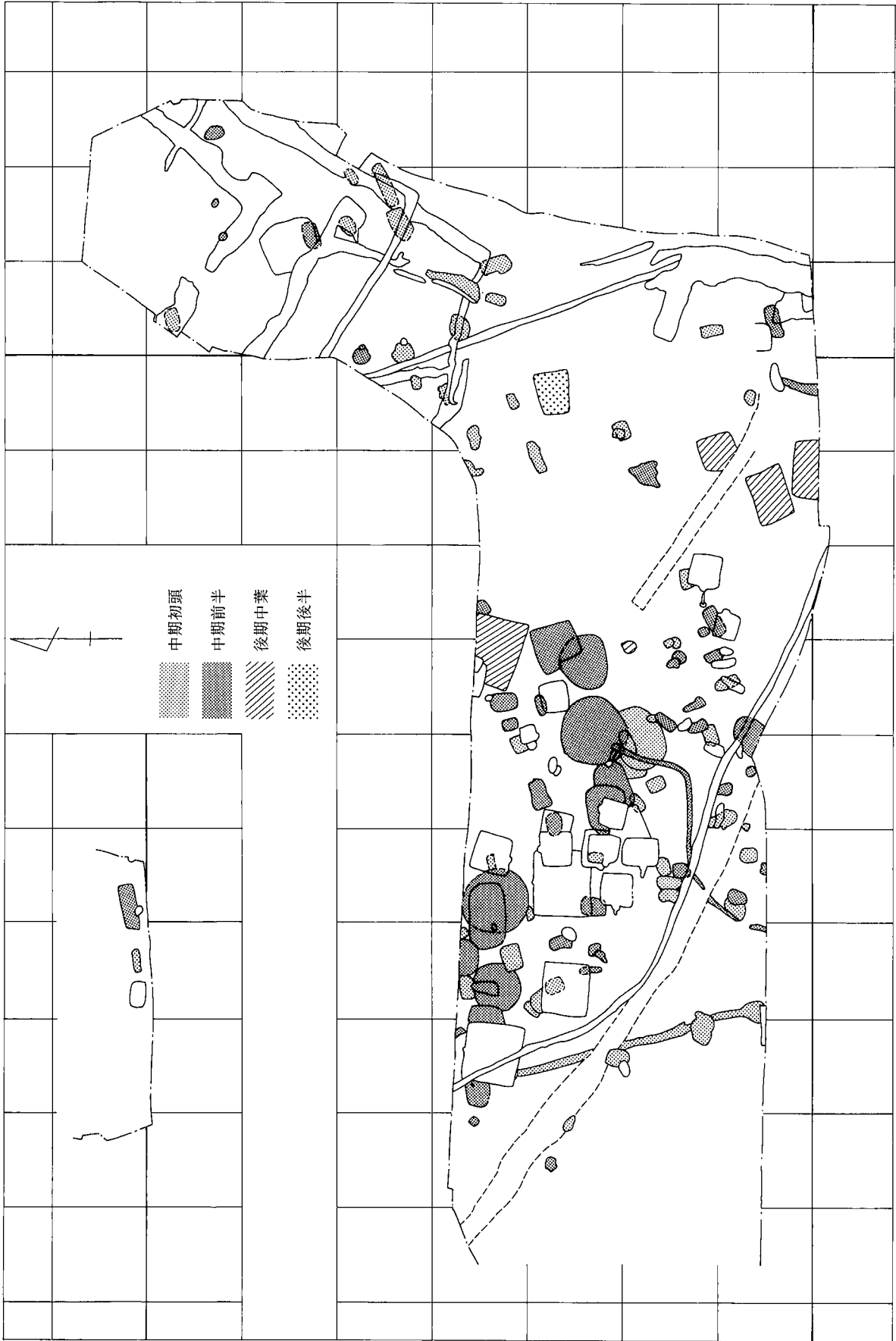
**弥生時代中期初頭～前半** 弥生時代の遺構のうち、大半がこの期に属しており、竪穴住居跡15棟、土坑101基、甕棺墓1基、溝7条を数える。

竪穴住居跡は調査区の中で最も高い位置に当たる中央付近に集中する。位置関係からみて分布の中心は更に北側へと展開することは間違いない。竪穴住居跡15棟の中で、中期初頭に属するものは56号竪穴住居跡一棟のみである。同時期の土坑の数からすれば相当数あると思われるが、調査区北側に展開するのだろう。中期前半に属するものは13棟、時期不明の円形竪穴住居跡である73号竪穴住居跡はこの期間内におさまるものと思われる。

平面形態は、中期初頭の56号竪穴住居跡は円形、中期前半には円形、楕円形、方形のものがあり、円形は6号・55号・64号・68号、楕円形は53号・54号・60号・61号・62号・67号、方形は5号のみとなる。このうち円形のものに関しては、中央に土坑を配し、周囲に支柱穴を巡らす基本的パターンを踏襲する。支柱穴は小型のものは5または6本、大型のものは8本を配置している。また大型に属する55号・68号竪穴住居跡で中央土坑両脇の棟持柱穴を検出している。このタイプの住居形態は中間研志により「発展松菊里型住居」とされたものである。中央土坑に関しては64号のように覆土に焼土を含んでおり炉と判断して差し支えないものもあるが、他のものには覆土に焼土・炭等を含まず、さらに73号においては中央土坑とは別に炉と思われる焼土面を検出しており中央土坑を炉として捉える事に躊躇する。6号竪穴住居跡の中央土坑から出土した砥石片の存在も含め、やはり再考する必要があるだろう。

楕円形プランの竪穴住居については数が多いにも拘わらず、残念ながら支柱穴、屋内土坑ともに配置規格が把握できるものがない。位置的に近く同時期の集落遺跡である朝倉町上の原遺跡の楕円形竪穴住居跡は、中央に土坑、その両側に2本の支柱穴を配した例が確認されており、当遺跡の例も同様と考えられる。ただし大型の67号竪穴住居跡はとて2本柱で支えきれるとは思えず、更にもう何本か配置されたものと思う。

同一集落内における円形プランと楕円形プランの同時併存については、弥生時代中期後半に一般化する長方形プランの住居形態を含め、円形から楕円形を経て長方形へと至る形態変遷を辿りたくなるが、当遺跡では中期前半に確実に両者が併存し、また先述の上の原遺跡でも同様で、さらに小郡市の一ノ口遺跡や同北松尾口遺跡では前期の段階で既に円形、楕円形、長方形が併存しており一系的な変遷はたどれそうにない。地域的、或いは时期的に分布が偏る傾向はあるものの、別個の系統の住居形態が長期間存続したとみた方がよいだろう。



第173図 仁右衛門畑遺跡弥生時代主要遺構変遷図 (1/600)



土坑に関しては平面形が長方形或いは長方形に近い楕円形のものが多く、断面の形状は袋状となるものがほとんどない。平面形が円形のものはいくつも見られない。その大半は貯蔵穴として掘削・機能し、役割を終えた後に廃棄土坑として利用されたものと思われる。ただ、68号土坑としたものは他のものに比べて深く湧水点まで達し、また中心に向かって階段状に落ちており井戸の可能性が高い。貯蔵穴の平面形に関しては、小郡市一の口遺跡では前期末～中期初頭に円形のものが増加するが、前後の時期は長方形が主流である。朝倉町上の原遺跡では当遺跡と近い位置にあるにも拘わらず、円形や楕円形のものが多いが、明確な長方形のものは全くなく当遺跡と対照的である。同じ町内で時期的にやや遡る大碓遺跡では長方形・楕円形が多数を占めるものの、円形も少なからず存在する。貯蔵穴の平面形態は集落によってその採用がまちまちというのが現段階の到達点であり、特に時期的・地域的傾向を見いだせないように思われる。或いは貯蔵法や上部構造その他の機能面によるものなのであろうか。周辺地域の今後の調査に期待したい。

土坑の分布位置は大きく二ヶ所に分かれる。一つは堅穴住居跡と同様に調査区の中で最も高い位置に当たる中央付近に集中する。これは一棟の堅穴住居跡に数基の貯蔵穴が伴う各戸保有の貯蔵形態と考えることができる。もう一ヶ所は調査区の北東側に集中し、付近には堅穴住居跡が見られず土坑群のみで構成される一群である。堅穴住居が削平された可能性もない訳ではないが、この一群は堅穴住居に伴う土坑と比べて大型で整った長方形のものも多く、また31号・34号・41～43号・45～47号のように主軸方向をそろえたものがあるなど各戸保有の貯蔵穴群と異なる特徴的な要素が見られる。居住区とは離れた位置にあって別個の群を形成しており、やはり共同管理的な性格を持った貯蔵穴群と位置付けた方が適当であろう。

集落の形成時期は、出土土器からみて弥生時代中期初頭の古い段階に始まったと思われる。堅穴住居跡の検出数こそ少ないものの、土坑の数からして本来は相当数あったに違いない。集落は中期前半まで存続するが、遺構数や配置状況それほど変化があったとは思えず、形成期から終焉期までほとんど規模を変えずに存続したようである。中期前半を境に集落は終焉を迎えている。

**弥生時代後期中葉～後半** この期のものは堅穴住居跡5棟、土坑1基、溝1条を数える。中期の集落とはまったく継続せず、新たに形成された集落である。遺構のほとんどは調査区の中央からやや東に寄った位置にあるが、42号溝だけはかなり離れた位置にあって、果たして同一集落として良いものかどうか疑問である。いずれにしろ調査区が集落のほんの一部をかすめただけに過ぎず、集落全体の景観を復元するまでには至らない。

時期別に見れば、20号堅穴住居跡が後期後半に位置付けられる以外は全て後期中葉のものである。堅穴住居跡は18号が正方形で4本の支柱穴を持ち、中央に炉を配置する。26号は恐らく長方形で2本支柱、中央に炉を配置する形となろう。ベッド状遺構は有していない。11号・27号はどちらも長方形で2本支柱、中央に炉を配置し壁際土坑を有するタイプである。ベッド状遺構の形状は異なり、11号は2方向のコーナーにのみ付き、27号はコ字状に巡る。同一集落内でのほぼ同時期の堅穴住居でこのようなバリエーションが現れるのか興味深い所である。当遺跡に限らず他の遺跡でも同様であり、系統の伝播経路も含めて今後地域性をさらに追及するよう努めたい。

## V 自然科学系の分析

### 1. 仁右衛門畑遺跡出土鉄器の分析

東北芸術工科大学芸術学科助手 松井敏也

#### はじめに

調査される資料は3点あり、これらは考古学視点から鉄斧の再加工品だと考えられていた。これらの遺物の推定される時代（紀元頃）の鉄斧は鑄造されることが多い。出土した鉄製遺物の製造方法の推定と成分分析による遺物の原材料の推定を行った。全ての資料は出土後の処理により薄く樹脂で覆われていた。

#### 実験方法

- ・ 構造調査：X線透過撮影装置を使用した。
- ・ 断面組織観察：構造調査の結果をもとに金属部位を切断し、断面を作成した。エポキシ樹脂に包埋し、鏡面研磨した後、3%硝酸エチルアルコール溶液にてエッチングし、光学顕微鏡、走査型電子顕微鏡にて観察した。
- ・ 成分分析：組織観察用に採取した試料を用い、表面のさび層を除去後、構成成分を分析した。

分析元素：C, Si, Mn, P, S, Cu, Ni, Co, Ti

分析方法：C, S … 燃焼赤外線分析法

他元素 … ICP発光分光分析法

#### 結果

##### 構造調査と断面組織観察

X線透過写真を図1に、断面組織観察部位を図2に示す。

X線透過写真により3点とも金属の部分が残存していることがわかった。特に、No.71は重量が74gあり、重量感を持つ。

##### 【No.71】(112号土坑出土鉄器、第169図-182)

断面はさびが大部分を占め、頂点の窪みに金属が残る表面の層と金属が殆どを占める内部の2つから構成されることがわかる。内部の部分はレーデブライト組織（炭素量4.3%）が観察された（図3）。これは鑄造時、鑄込み後に急冷されることにより生じる共晶組織である。また、組織中の棒状になる初晶のセメントイトはその多くが表面に垂直に成長していることが観察できた。これらことからこの組織は鑄鉄であることがわかった。レーデブライト組織の大部分は耐食性を持つセメントイトで構成されているため、腐食の影響を受けてはいない。頂部の窪みに残存する金属組織はフェライト（炭素量0.01%以下）組織であった。内部のレーデブライト組織との界面の写真を図4に示す。界面ではパーライトとフェライトの混在する層が確認でき、炭素が内部から拡散していることがわかる。これらことから、頂部では鋼を長時間の加熱により張りつけたものと推察できる。また、表面のさびの部分も本来は鋼であったものがさび化したものと考えられる。

##### 【No.72】(81号土坑出土鉄器、第169図-183)

構造調査からは内面のさび化が進行していることがわかった。中央部には金属部分が残存していた。断面組織からは、金属部分の中央部分に黒色球状を呈する黒鉛が観察された（図5）。黒鉛の周囲はパーライト組織が確認できたが、外側にいくにしたがいフェライト組織が主に占めるようになる（図6）。これらのことから外側は焼き鈍し、脱炭されていることが明らかになった。この試料は本来鑄造により製作され、周縁部には急冷により生じたレーデブライトが、中心部には片状黒鉛が生成していたものと考えられる。その後、長時間加熱処理をして脆い鑄鉄に韌性をもたせたものと考えられる。

【No.73】（44号土坑出土鉄器、第169図-184）

断面のマクロ組織の写真を図7に、ミクロ組織の写真を図8に示す。試料No.72と同様に、残存する金属部分に数10 $\mu$ mの大きさの球状を呈する黒鉛が観察できた。鑄造製品であることがわかる。表面にいくにしたがい黒鉛の分布は少なくなっており、鑄造後に脱炭されたと考えられる。

成分分析

断面組織の観察をした箇所より成分分析用にサンプリングを行った。混和したさびを除去した後エタノールで洗浄した。結果を表に示す。

表 鉄製遺物の成分分析結果

試料	炭素	ケイ素	マンガン	リン	硫黄	銅	ニッケル	コバルト	チタン
第169図 - 182	4.51	0.11	0.035	0.28	0.036	0.007	<0.005	<0.005	<0.005
第169図 - 183	0.66	0.11	0.022	0.32	0.034	0.042	0.007	<0.005	<0.005
第169図 - 184	0.51	0.12	0.041	0.24	0.034	0.014	<0.005	<0.005	<0.005

（単位：wt%）

試料No.71は炭素が多く検出された。これは金属部分を占める組織がレーデブライト組織であることに起因する。レーデブライト組織は炭素量が4.3%の共晶組織である。試料No.72、No.73では金属部分に球状黒鉛が存在していたが、分析結果からは炭素は少ししか検出されていない。黒鉛は研磨および試料調整時に除かれたためと思われる。したがって、これら2つの試料についてはフェライト組織の成分値が分析されている。すべての試料においてリンが多く検出されている。日本の国内における砂鉄はリンの含有量が0.0数%であることが言われている。これらの含有量から原材料は鉄鉱石系である可能性が高いといえよう。

まとめ

- ・すべて鑄造鉄製品であると考えられた。
- ・試料No.71の材質はレーデブライト組織を持ち、鑄込み後急冷されたことがわかった。また、鋼の板が加熱接合されていたことがわかった。
- ・試料No.72、No.73は加熱脱炭処理が施されており、黒芯可鍛鑄鉄であることがわかった。
- ・リンの含有量が高く、原材料は鉄鉱石系である可能性が高い。

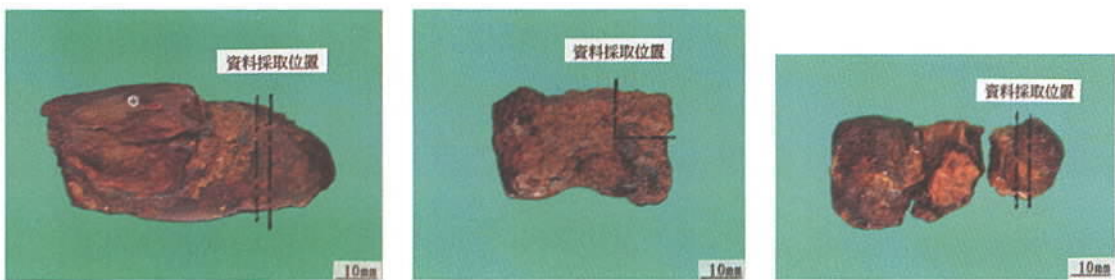


図1 断面組織採取切断部位 左：No.71 中央：No.72 右：No.73

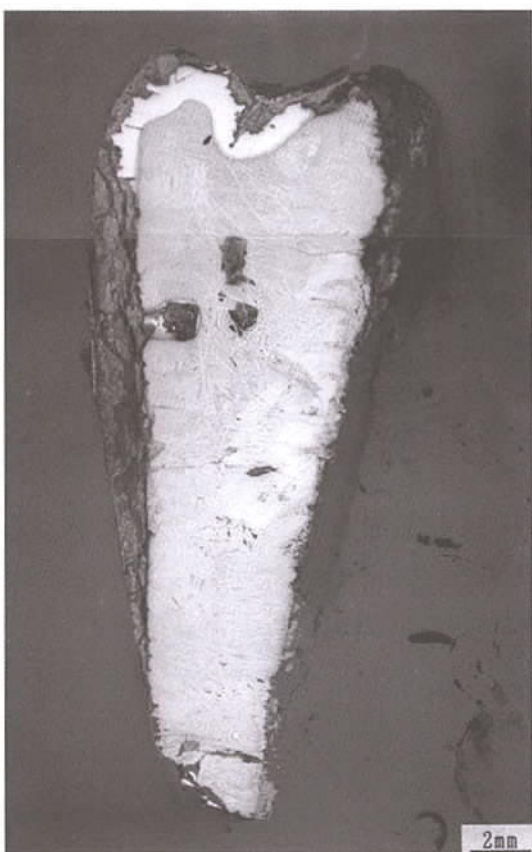


図2 No.71の断面マクロ観察

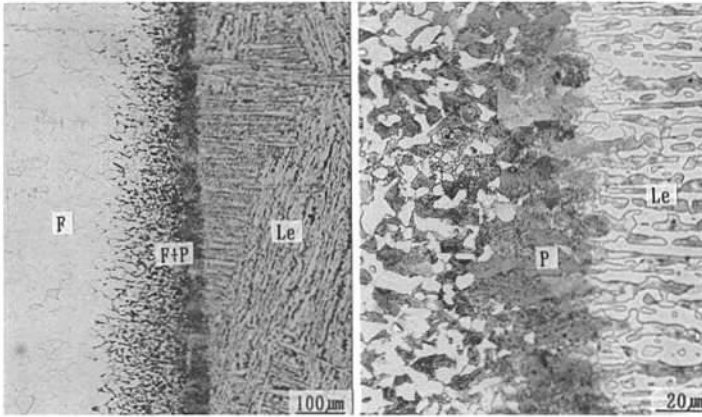


図3 No.71の頂部に残存した金属層と内部の金属部位との界面  
 Le：レーデブライト組織 F：フェライト組織 P：パーライト組織

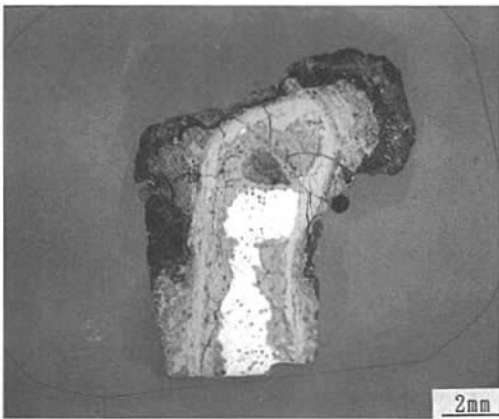


図4 No.72の断面マクロ観察

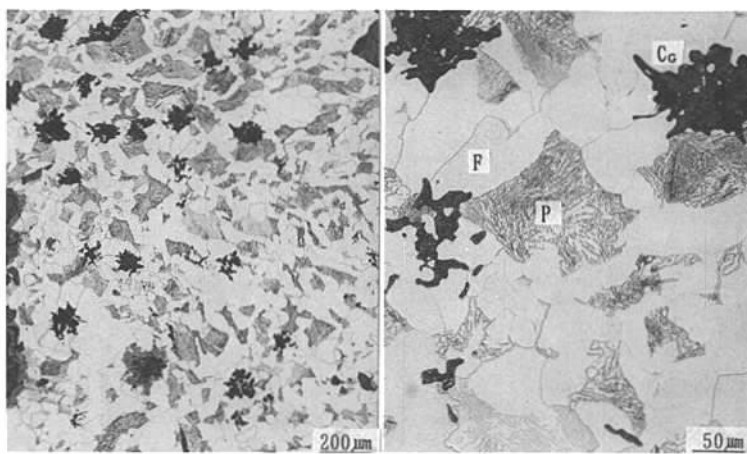


図5 No.72の断面マイクロ組織 C<sub>c</sub>左：黒鉛 F：フェライト組織 P：パーライト組織

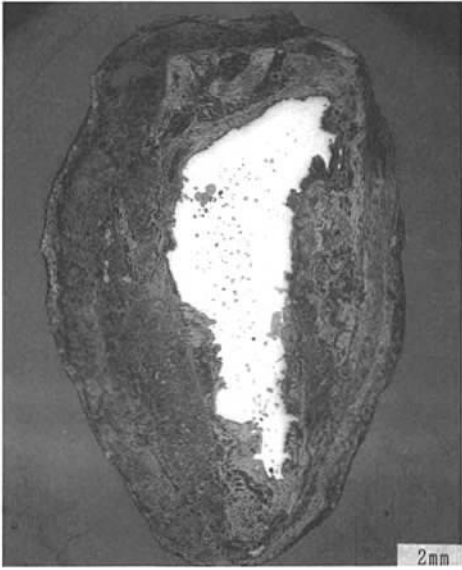


図6 No.73の断面マクロ観察

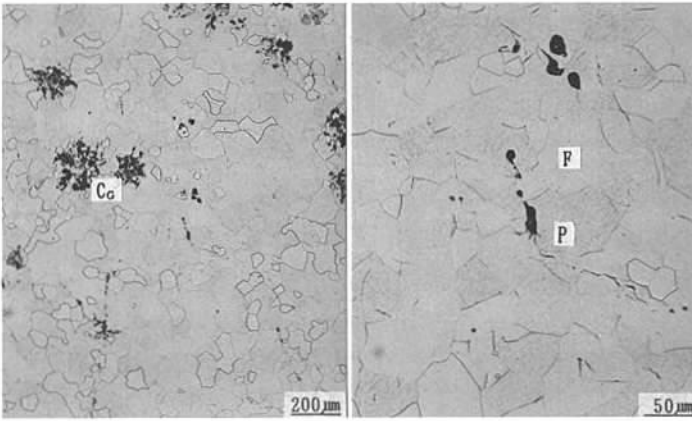


図7 No.73の断面ミクロ組織  $C_{\alpha}$ 左：黒鉛 F：フェライト組織 P：パーライト組織

## 2. 仁右衛門畑遺跡出土土器の胎土分析

(株)九州環境管理協会

はじめに

本報告書は、福岡県の委託を受けて財団法人九州環境管理協会が実施した「出土遺物の胎土分析」についてとりまとめたものである。

### 1. 試料名および分析項目

試料名および分析項目を表1に示す。

表1 試料名及び分析項目

報告書名	試料名	挿図番号	分析項目
	39号竪穴住居跡出土須恵器広口壺	第68図 - 25	
	42号竪穴住居跡出土土師器高坏	第72図 - 31	
仁右衛門畑遺跡	42号竪穴住居跡出土須恵器壺	第73図 - 51	胎土分析
	93号竪穴住居跡出土須恵器坏	第133図 - 12	
	41号溝出土須恵器甕	第190図 - 17	
	41号溝出土須恵器鉢	第190図 - 15	

### 2. 胎土分析

#### (1) 分析方法

土器片をめものう乳ばちで粉碎し、105～110℃で4時間乾燥した。乾燥した土器片を1.000g分取し、硝酸、フッ化水素酸、過塩素酸による分解を行った後、200mLに定容した（過塩素酸—塩酸性溶液）。この溶液についてICP発光分光分析（Fe,Ca,Sc,Sr,Rb）および原子吸光分析（K,Na）を実施した。

#### (2) 分析結果

分析結果を表2に示す。

表2 土器の胎土分析

元素 試料名	N a	K	C a	S r	S c	F e	R b
第68図 - 25	0.455	0.347	0.460	0.370	4.92	3.28	0.453
第72図 - 31	0.642	0.605	0.358	0.603	2.77	3.14	0.906
第73図 - 51	0.383	0.350	0.386	0.359	5.23	3.09	0.503
第133図 - 12	0.443	0.596	0.132	0.429	2.00	2.83	1.094
第190図 - 17	0.418	0.493	0.057	0.272	2.15	2.21	0.785
第190図 - 15	0.415	0.538	0.197	0.484	1.69	1.45	0.994

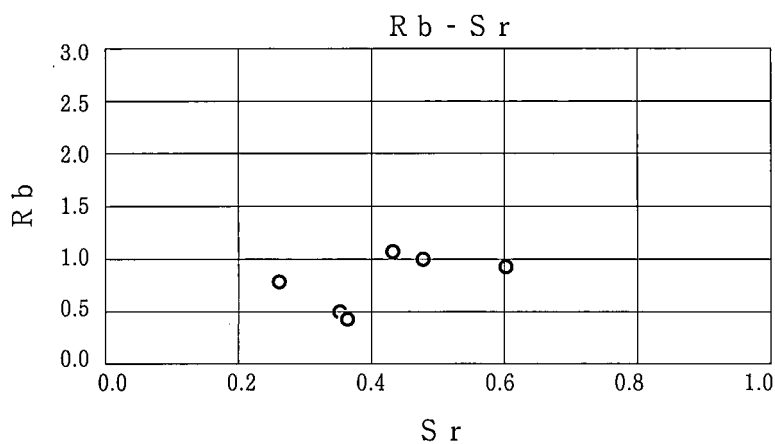
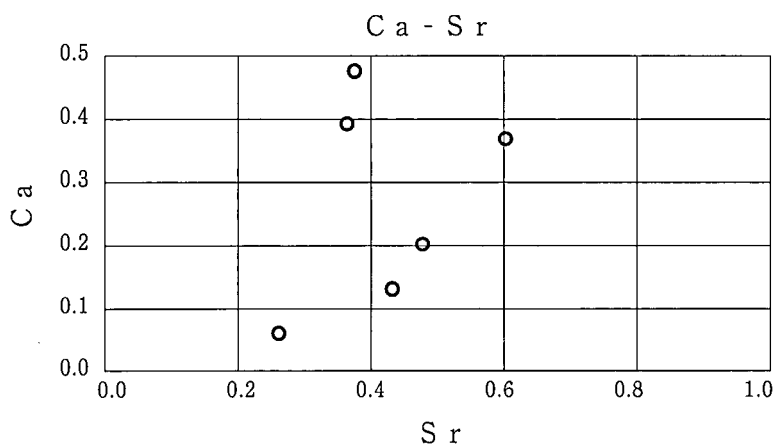
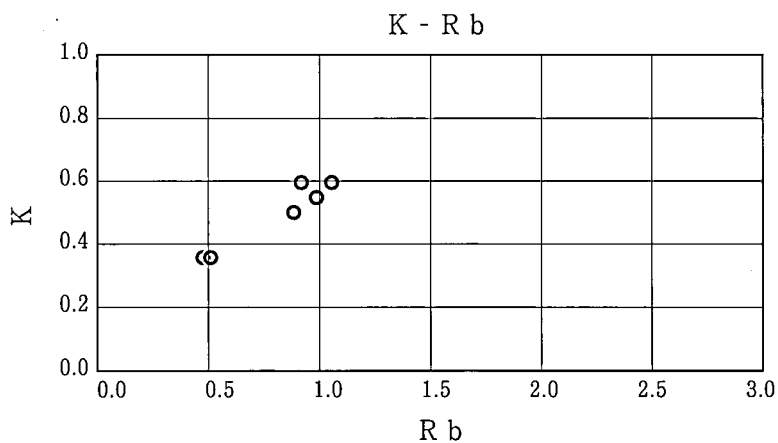
注) 表2の測定は、通産省工業技術院地質調査所の岩石標準試料「JG-1」の濃度に対する相対値である。「JG-1」の各元素の標準値は表3のとおりである。各土器について濃度を得る場合は、表2の測定値(相対値)に表3の標準値を乗ずる。

表3 JG-1の標準値

元素	Na	K	Ca	Sr	Sc	Fe	Rb
標準値	25076	32872	15723	184	6.5	15328	181

mg/kg

参考資料





# 圖 版



1. 調査区中央全景 (空中写真 南東から)



2. 調査区中央北側全景 (空中写真 南東から)



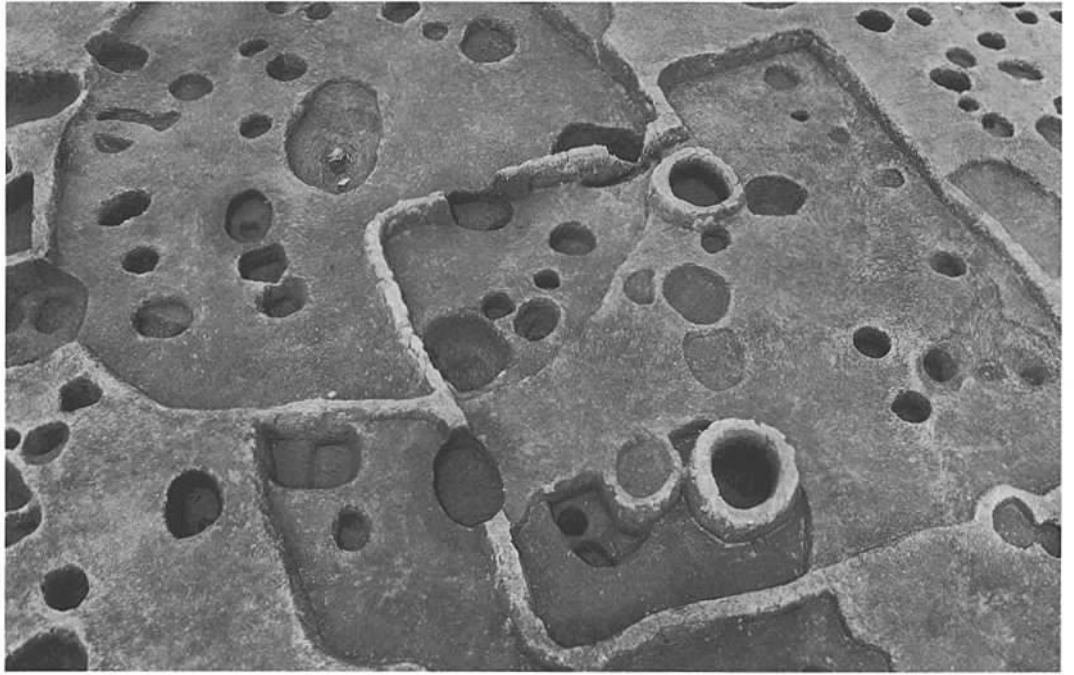
1. 調査区南東全景 (空中写真 上空から)



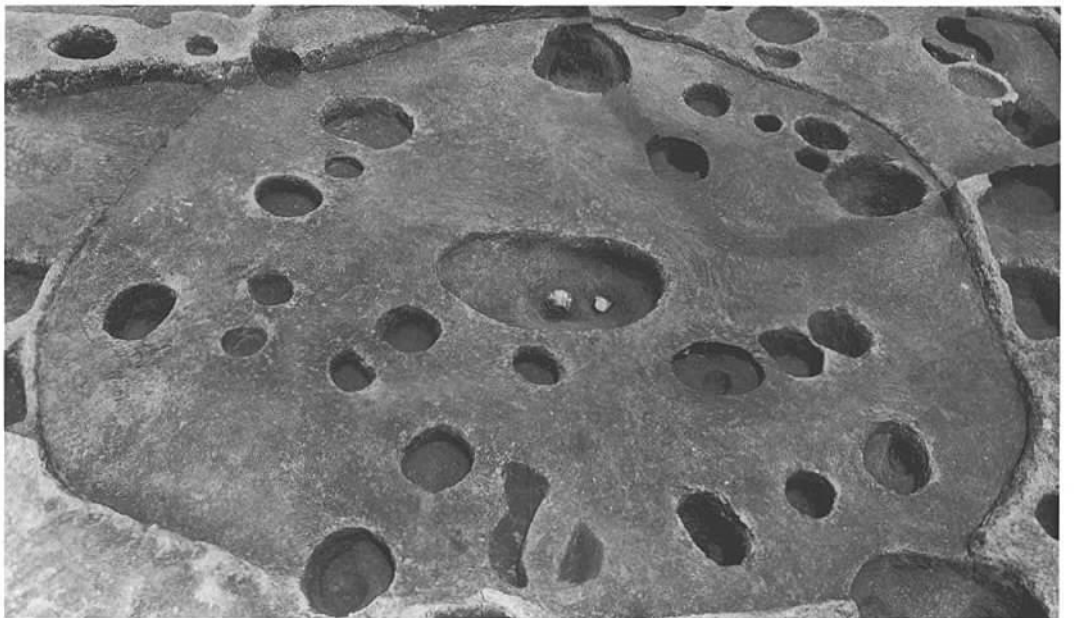
2. 調査区南東端 第二遺構面全景 (東から)



1. 5号竪穴住居跡  
(東から)



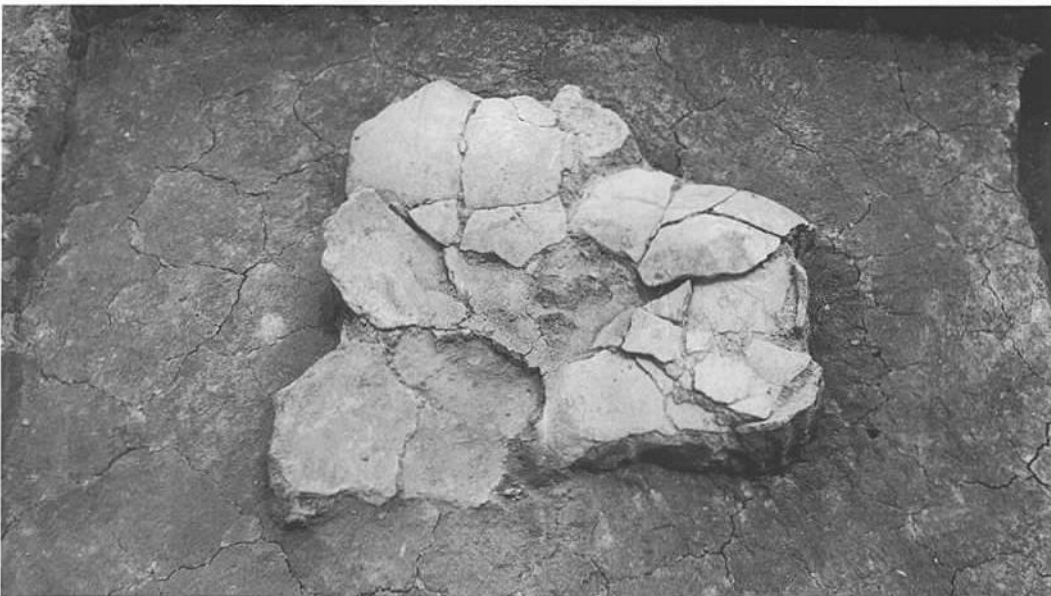
2. 5・6・10号竪穴住居跡  
(東から)



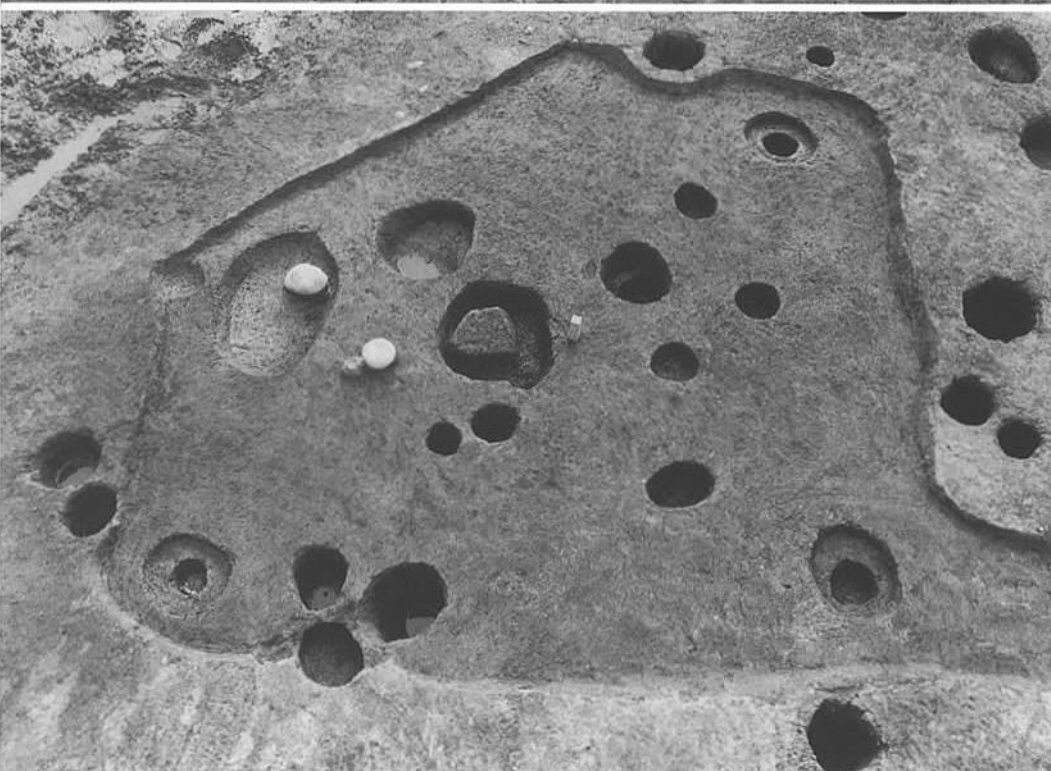
3. 6号竪穴住居跡  
(南から)



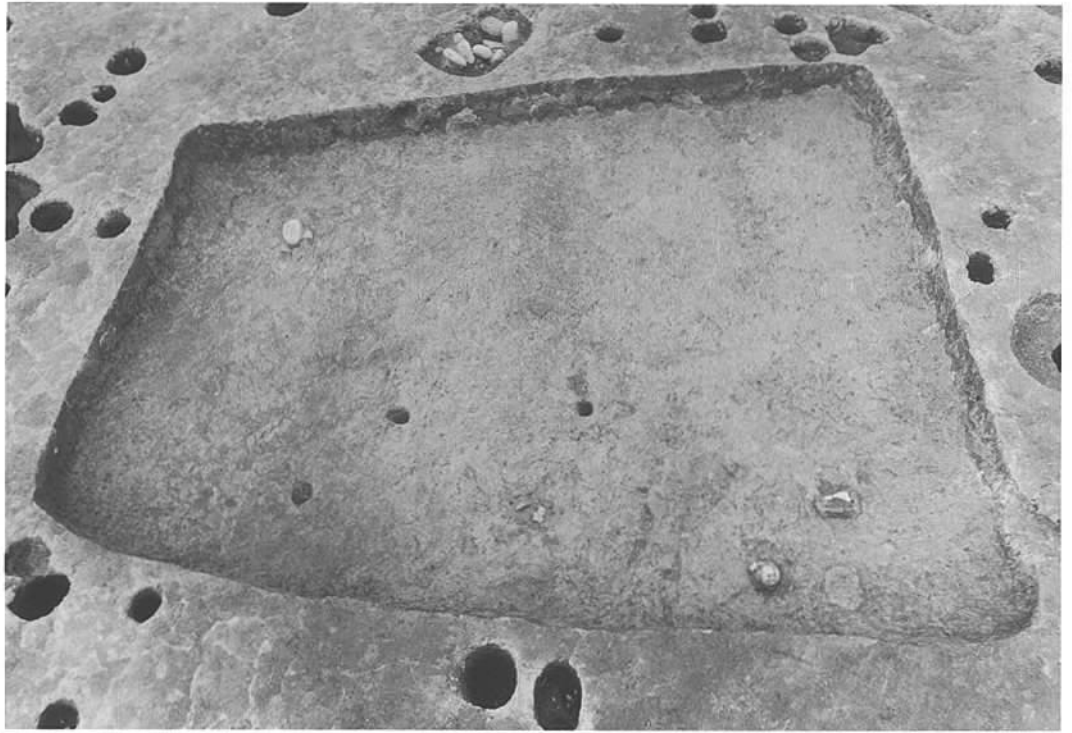
1. 11号竪穴住居跡  
(南から)



2. 11号竪穴住居跡  
遺物出土状態  
(北から)



3. 18号竪穴住居跡  
(東から)



1. 20号竖穴住居跡  
(西から)



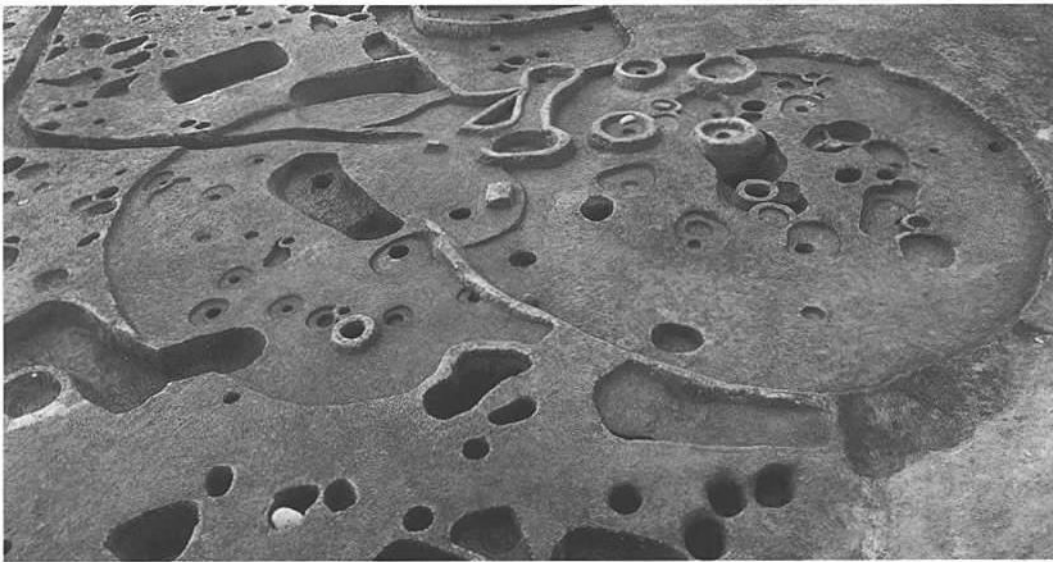
2. 26号竖穴住居跡  
(北から)



3. 27号竖穴住居跡  
(北から)



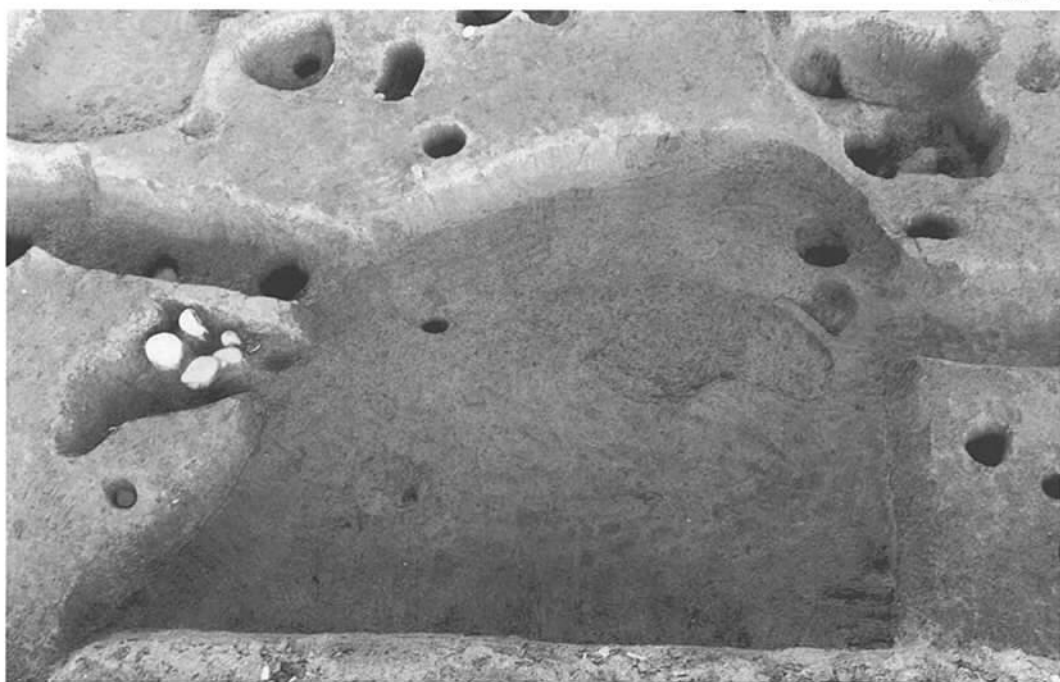
1. 53・54号竪穴住居跡  
(北から)



2. 55・56号竪穴住居跡  
(東から)



3. 56号竪穴住居跡  
(東から)



1. 60号竪穴住居跡  
(南から)



2. 調査区中央北側  
遺構確認状態  
(東から)



3. 同 完掘状態  
(東から)





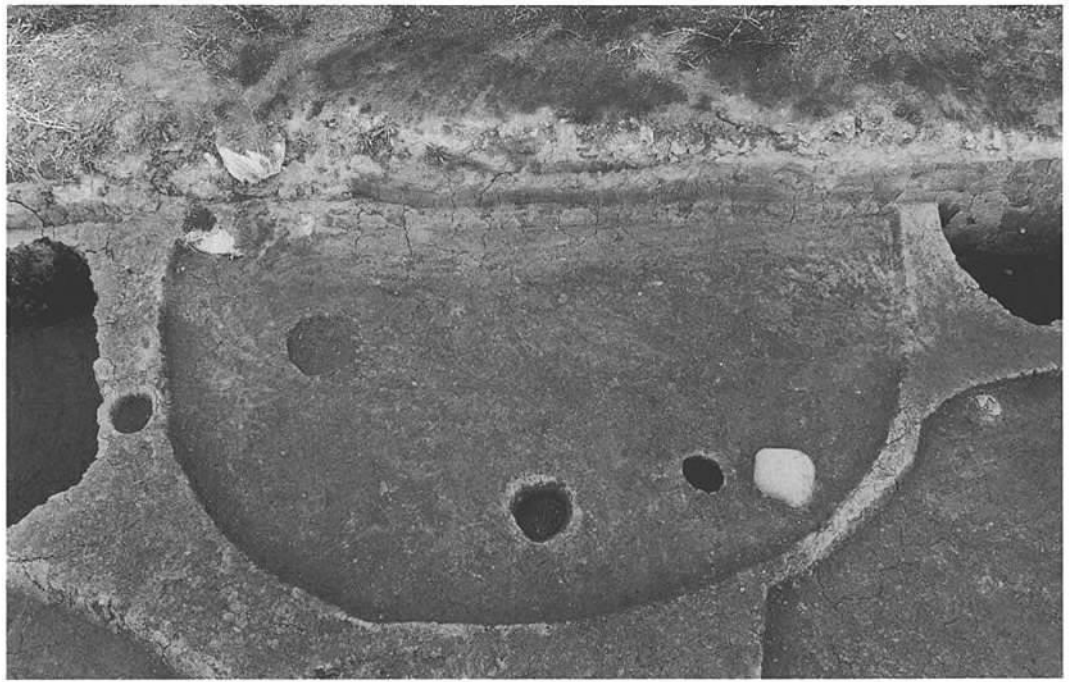
1. 61号竪穴住居跡  
(南から)



2. 62・63号竪穴住居跡  
(西から)



3. 64号竪穴住居跡  
(西から)



1. 66号竪穴住居跡  
(南から)



2. 67号竪穴住居跡  
(南から)



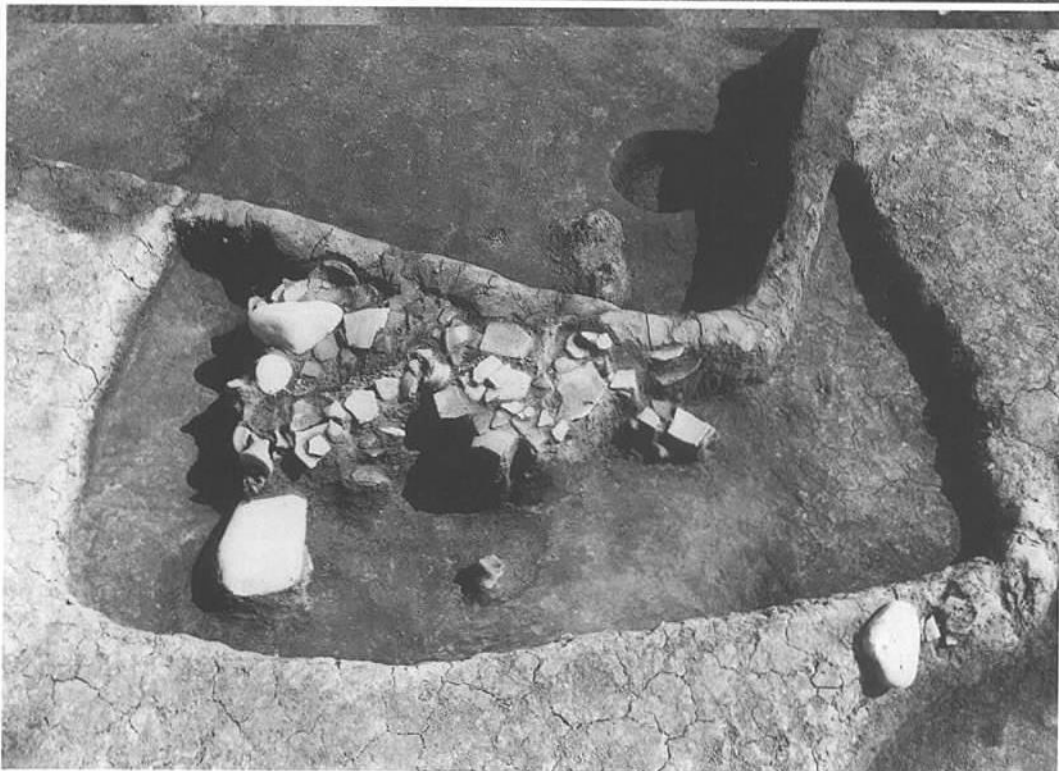
3. 68号竪穴住居跡  
(南から)



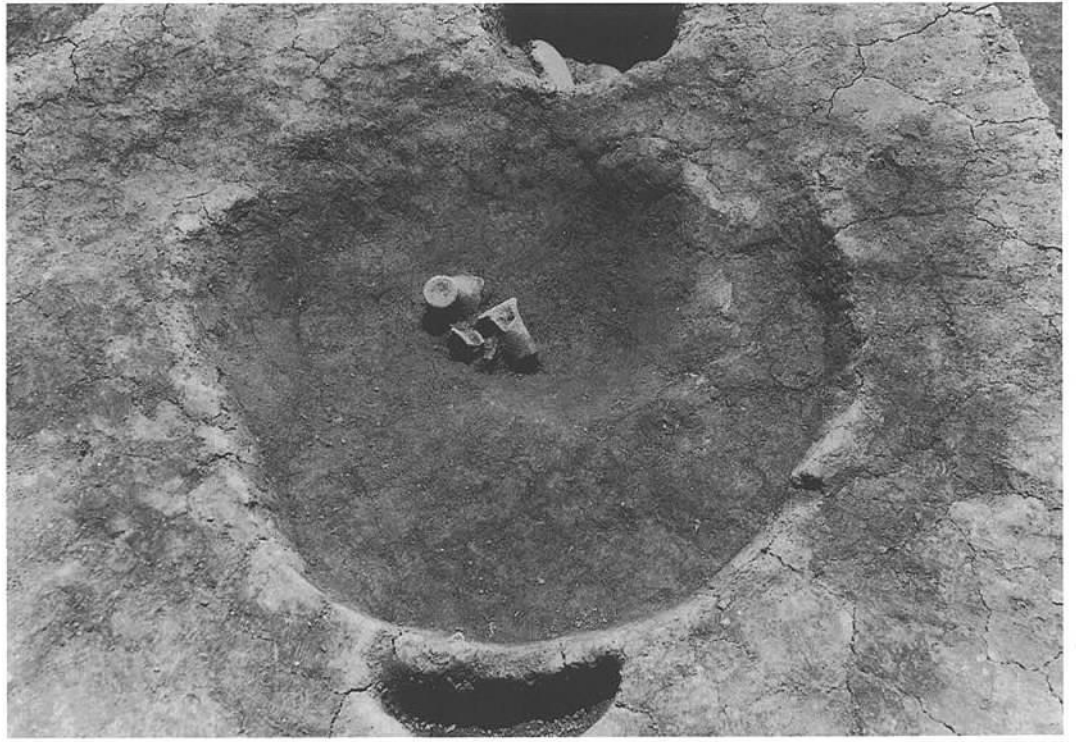
1. 1号土坑 (北から)



2. 2号土坑 (東から)



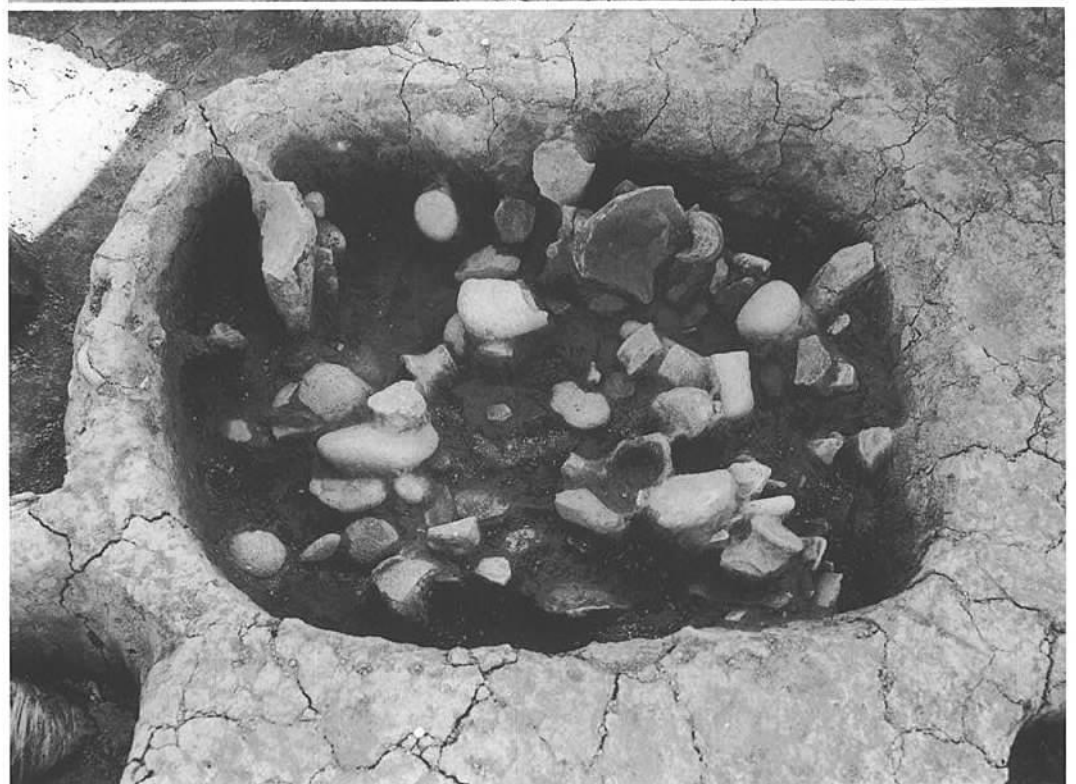
3. 11号土坑 (北から)



1. 12号土坑 (西から)



2. 13号土坑 (北から)



3. 17号土坑 (東から)



1. 18・19号土坑 (東から)



2. 20号土坑遺物出土状態  
(西から)



3. 20号土坑 (西から)



1. 21号土坑 (東から)



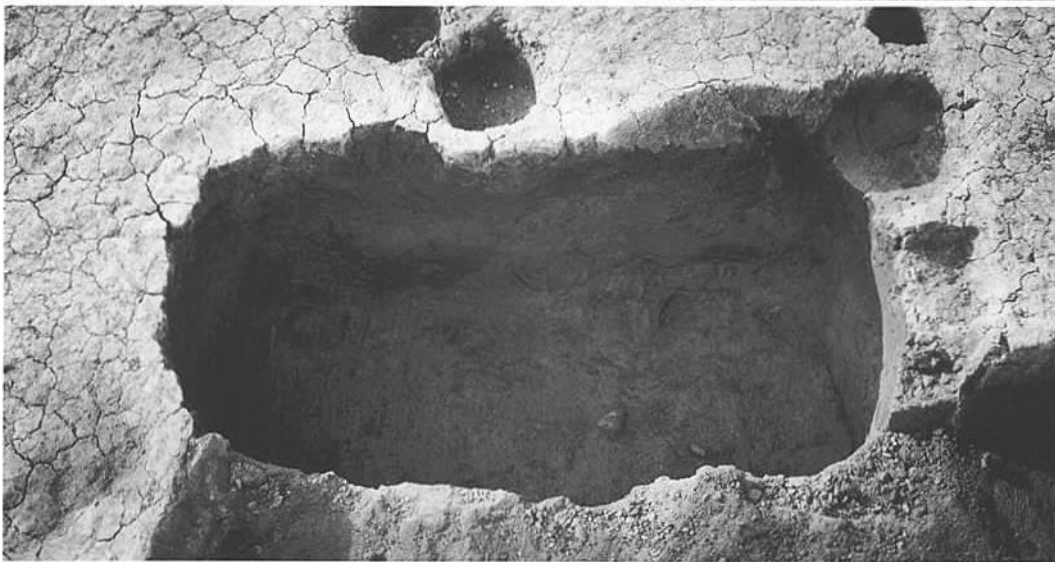
2. 22号土坑 (南から)



3. 23号土坑 (西から)



1. 24号土坑 (南から)



2. 26号土坑 (南から)



3. 27号土坑 (東から)



1. 28号土坑 (北から)



2. 29号土坑 (西から)



3. 30号土坑 (南から)





1. 31・34・46号土坑  
(西から)



2. 31・46号土坑 (北から)



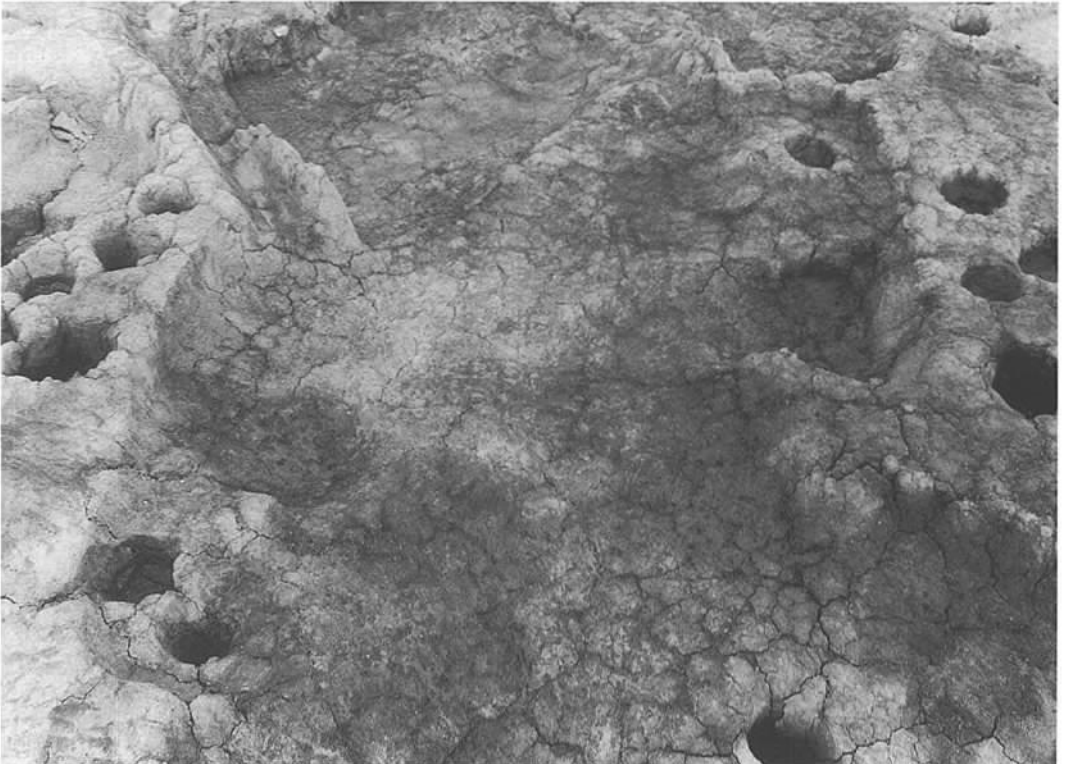
3. 34号土坑 (北から)



1. 35号土坑 (東から)



2. 37号土坑 (北から)



3. 38号土坑 (東から)



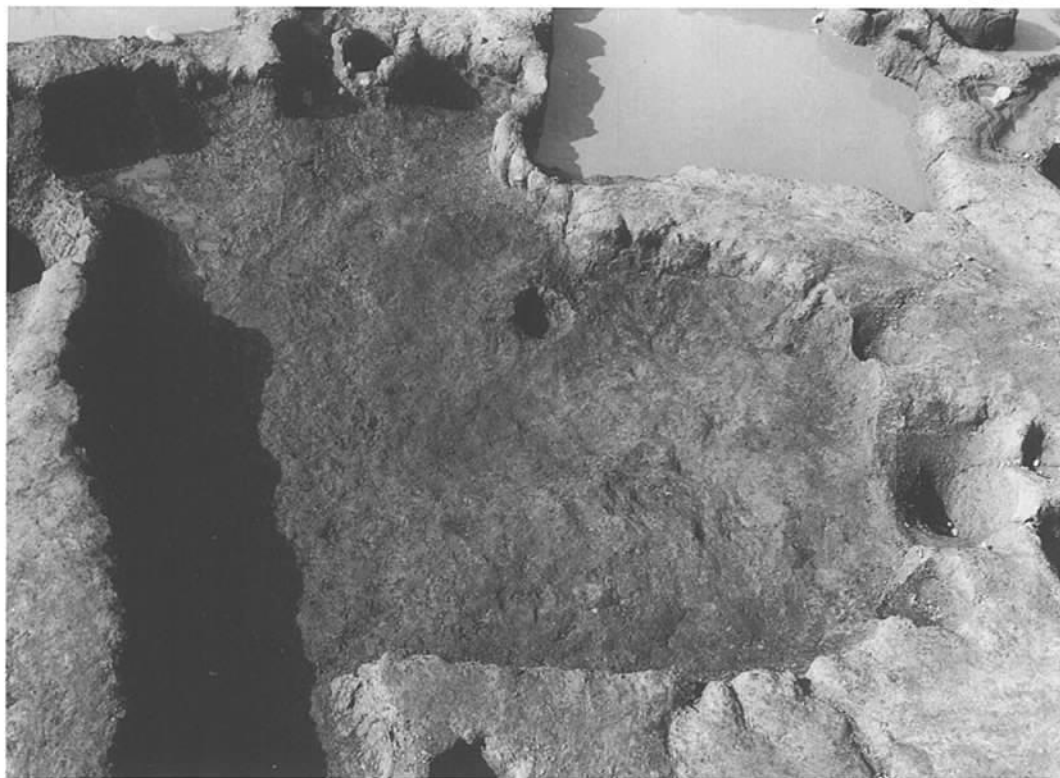
1. 41号土坑 (南から)



2. 43号土坑遺物出土状態  
(南から)



3. 43号土坑 (南から)



1. 44号土坑（南から）



2. 45号土坑（北から）



3. 51号土坑（西から）



1. 52号土坑 (東から)



2. 53号土坑 (南から)



3. 55号土坑 (南から)



1. 56号土坑遺物出土状態  
(南から)



2. 56号土坑 (南から)



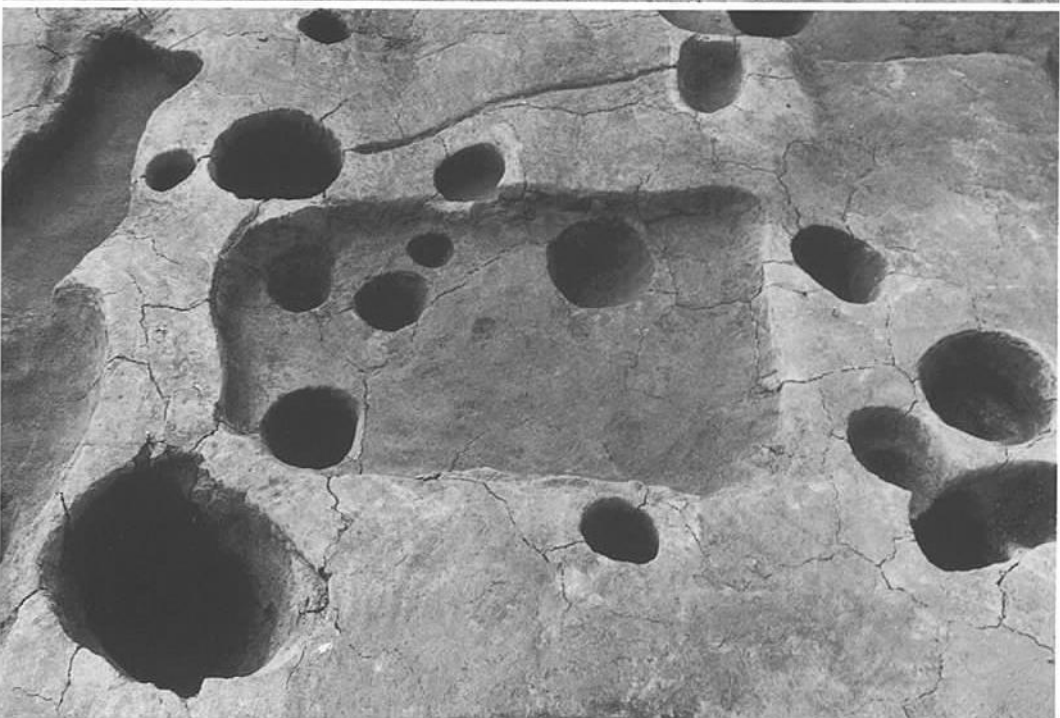
3. 58号土坑 (南から)



1. 60号土坑 (北から)



2. 61号土坑 (北から)



3. 62号土坑 (北から)



1. 64号土坑 (北から)



2. 65号土坑 (北から)

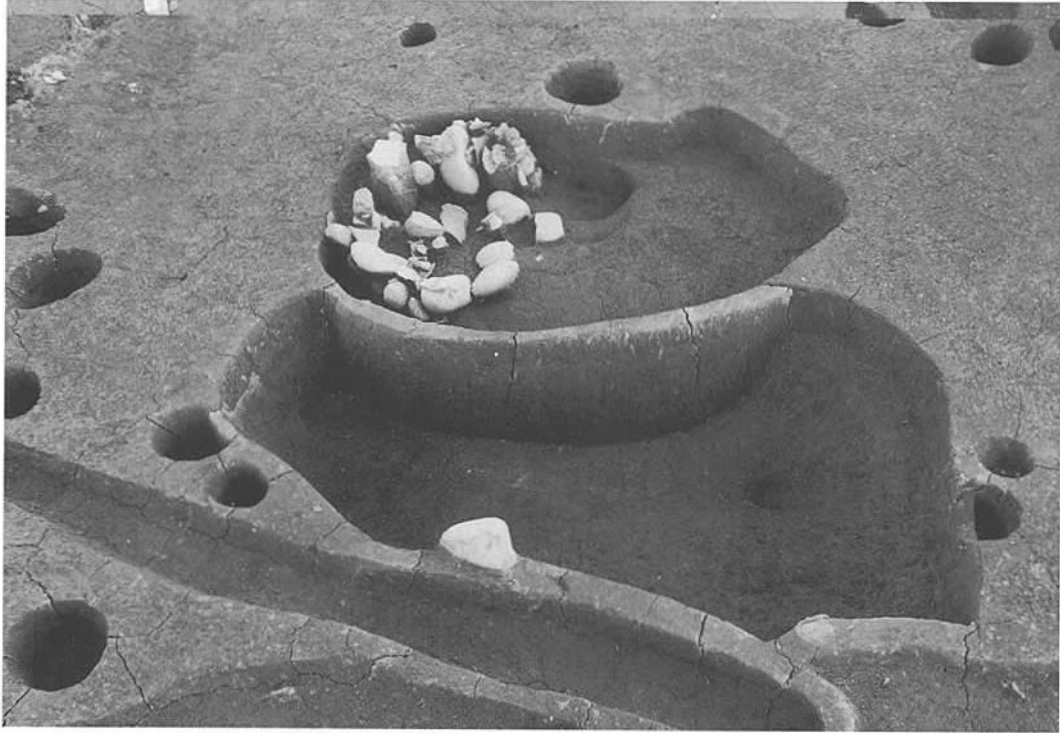


3. 66号土坑 (北から)





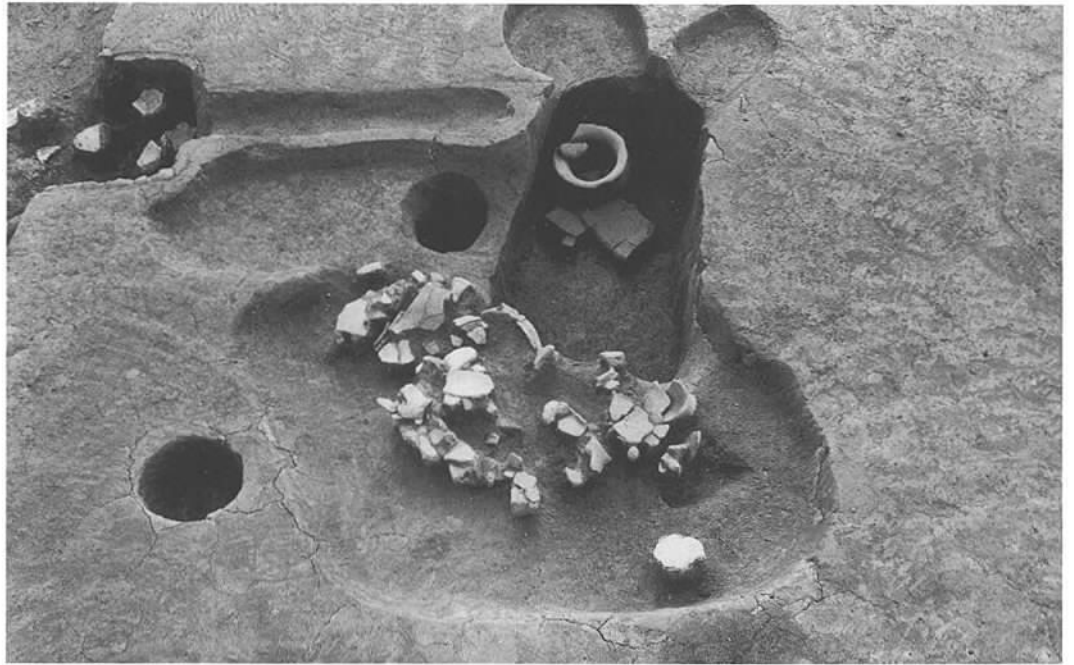
1. 68号土坑 (南から)



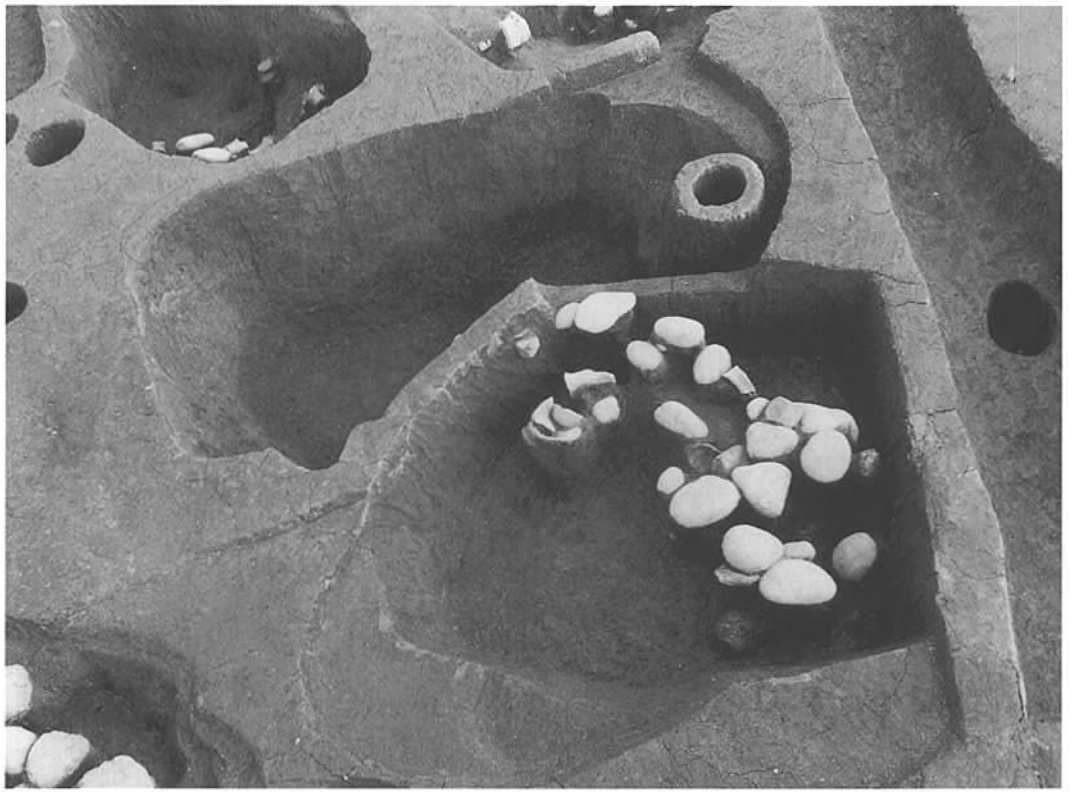
2. 69・70号土坑 (西から)



3. 72号土坑 (西から)



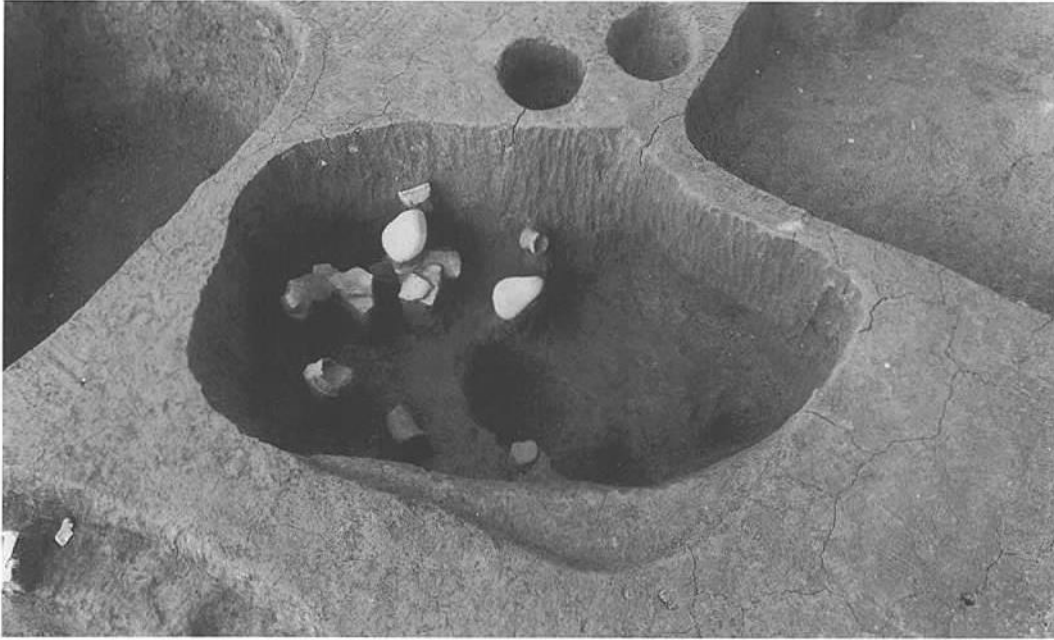
1. 74号土坑 (北から)



2. 76・77号土坑 (西から)



3. 78号土坑 (東から)



1. 79号土坑（東から）



2. 80号土坑（東から）



3. 80号土坑（西から）



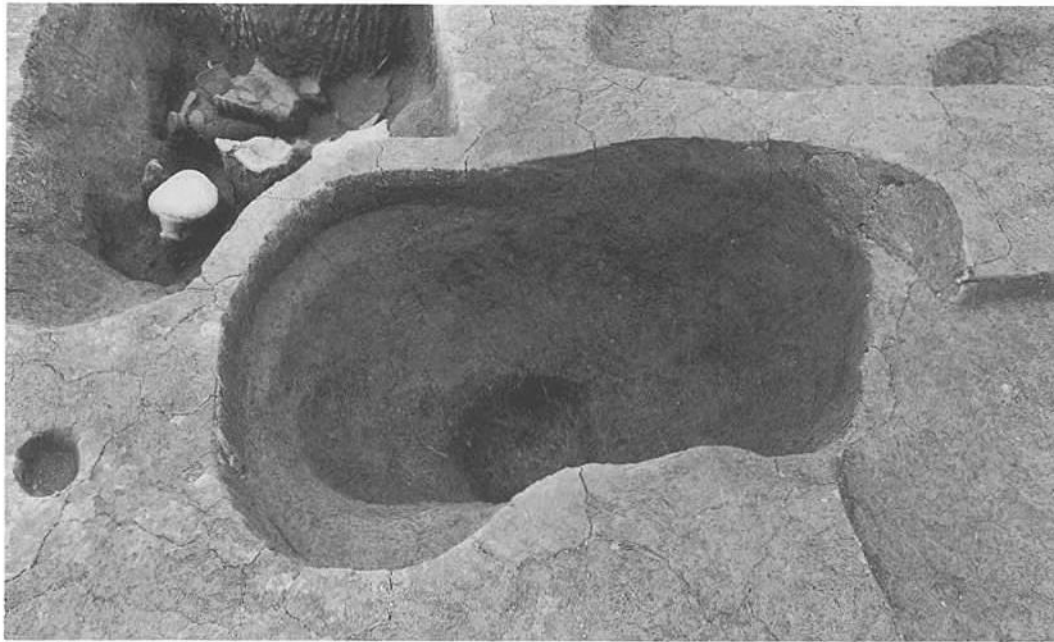
1. 81号土坑 (北から)



2. 82号土坑 (東から)



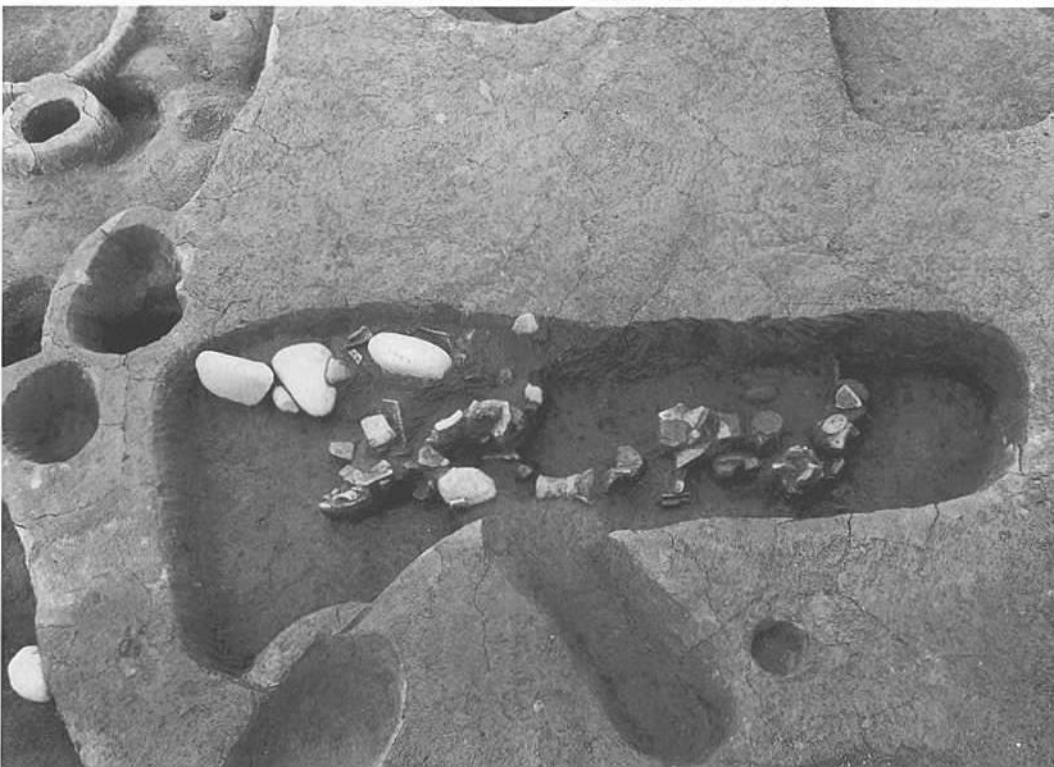
3. 85号土坑 (南から)



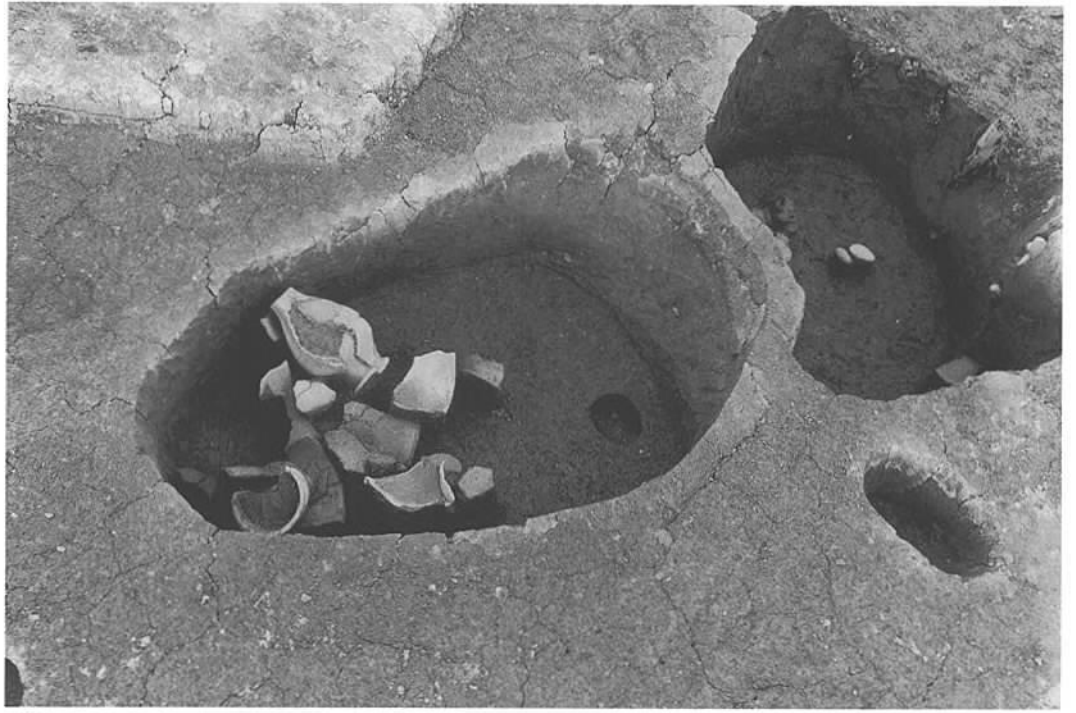
1. 86号土坑 (東から)



2. 87号土坑 (南から)



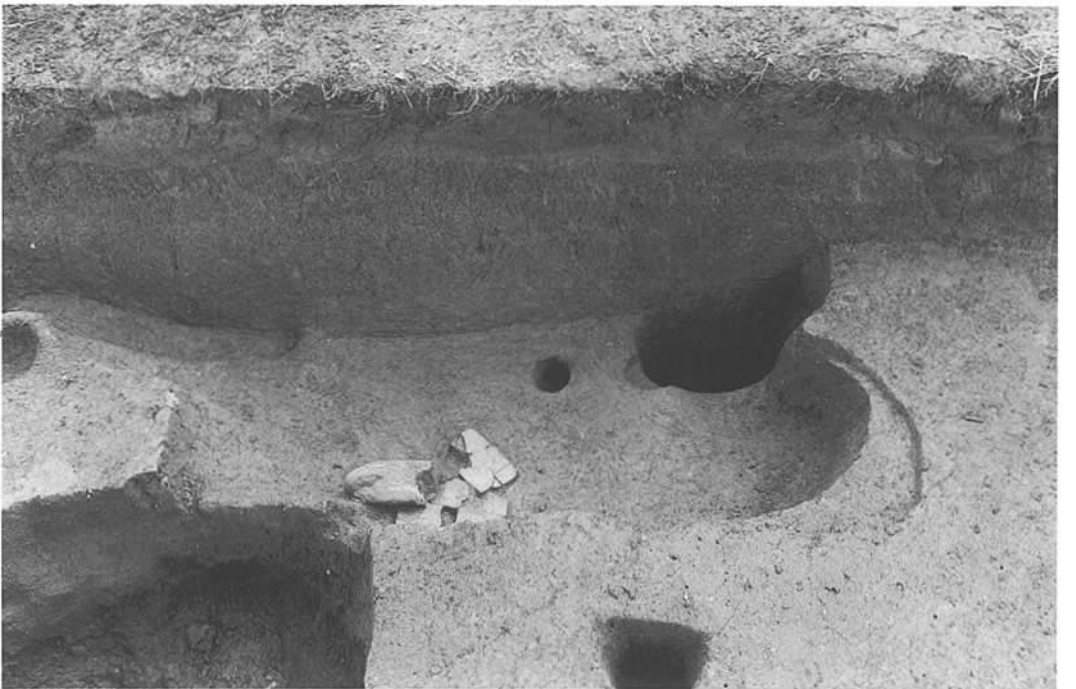
3. 88号土坑 (東から)



1. 92号土坑 (南から)



2. 93号土坑 (南から)



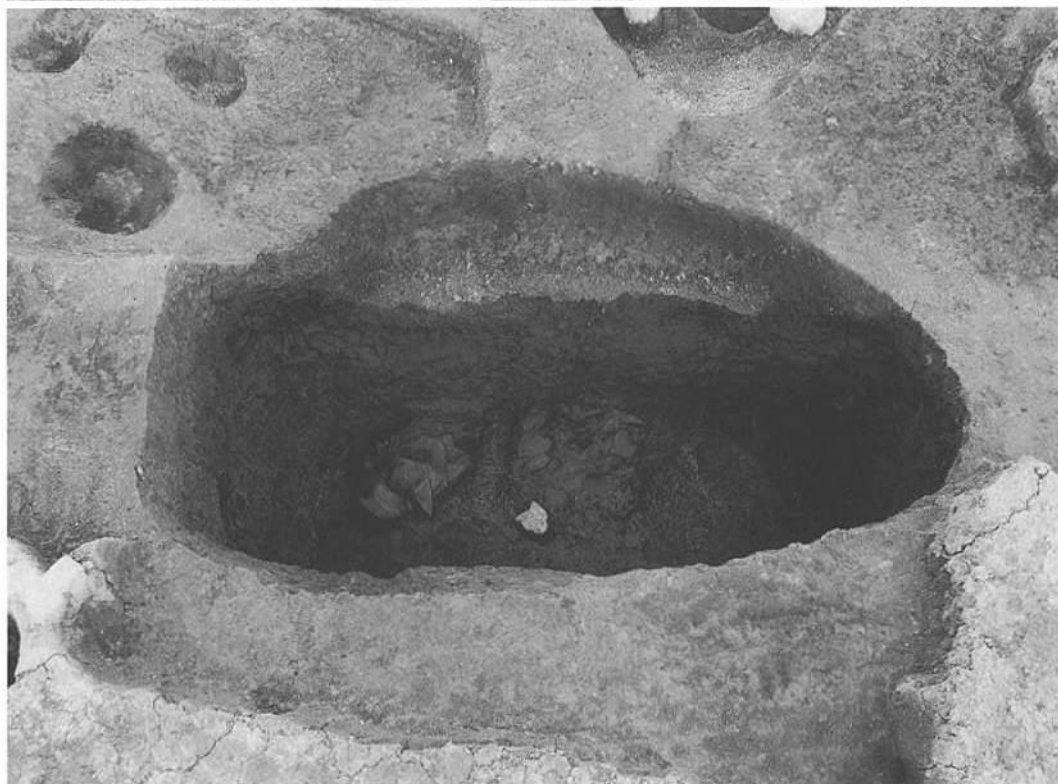
3. 96号土坑 (北から)



1. 97号土坑 (東から)



2. 99号土坑 (北から)



3. 100号土坑 (南から)



1. 102号土坑 (東から)



2. 103号土坑土層 (西から)



3. 103号土坑 (北から)





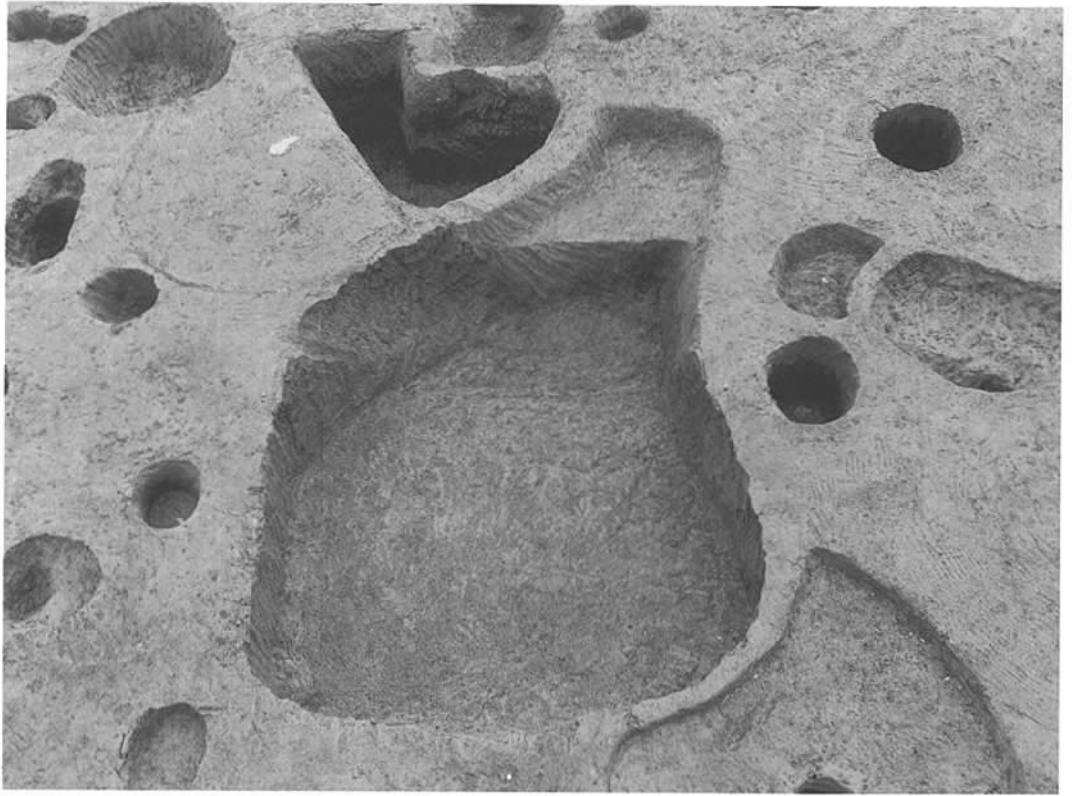
1. 104号土坑 (北から)



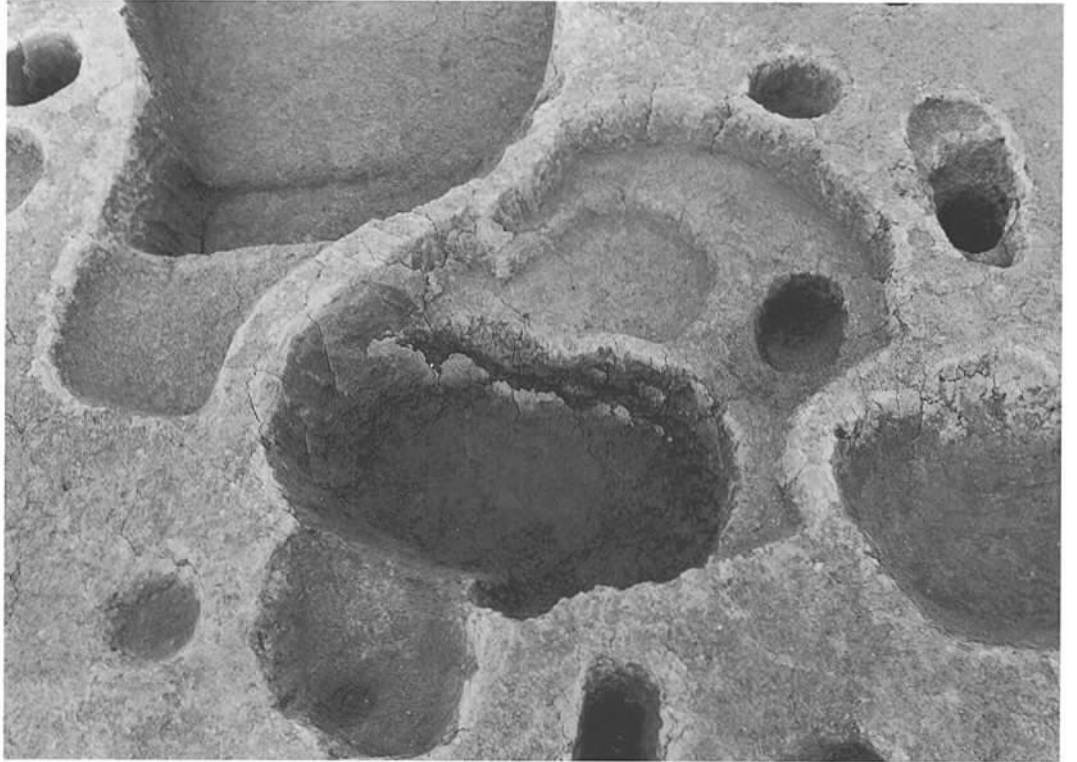
2. 105号土坑 (西から)



3. 106号土坑 (南から)



1. 107号土坑 (東から)



2. 108号土坑 (南から)



3. 109号土坑 (東から)



1. 110号土坑 (西から)



2. 67・68号竪穴住居跡  
111・112号土坑  
(南西から)

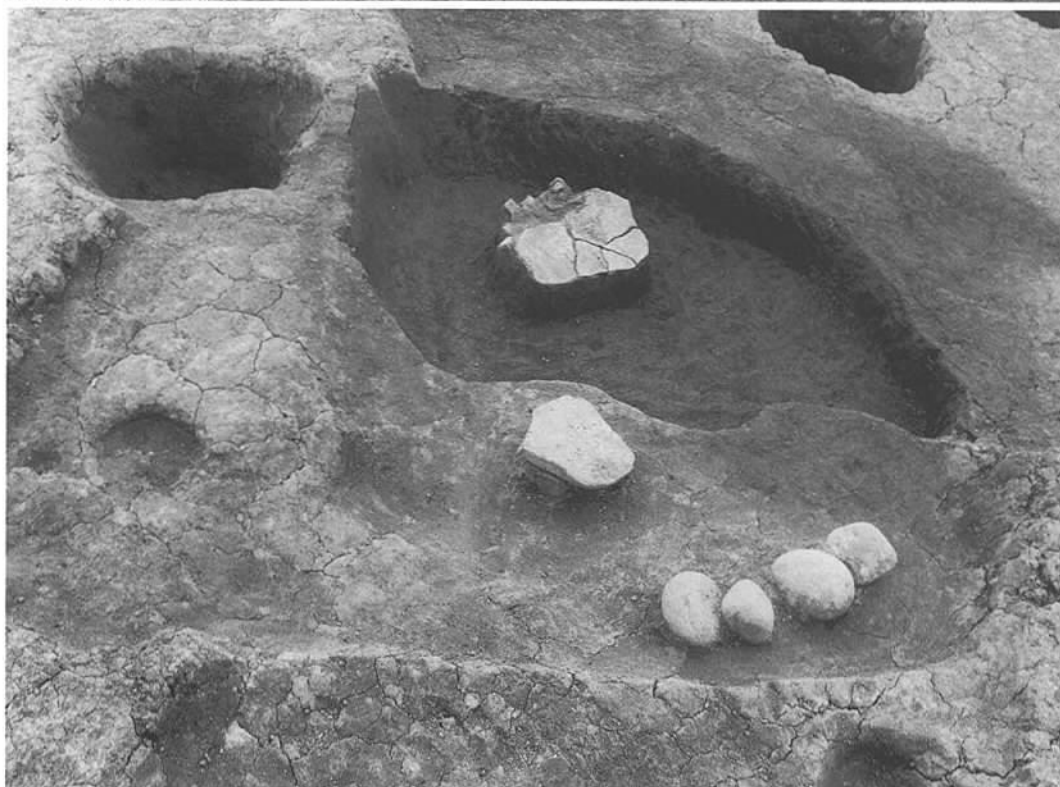


3. 112号土坑 (北から)

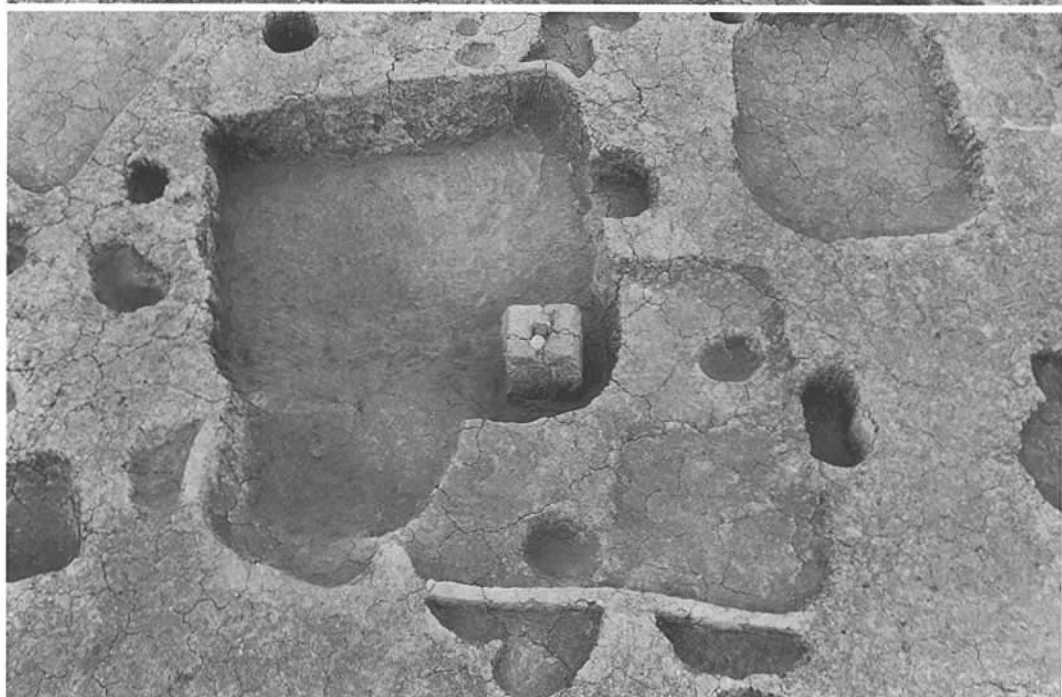
1. 113号土坑 (西から)

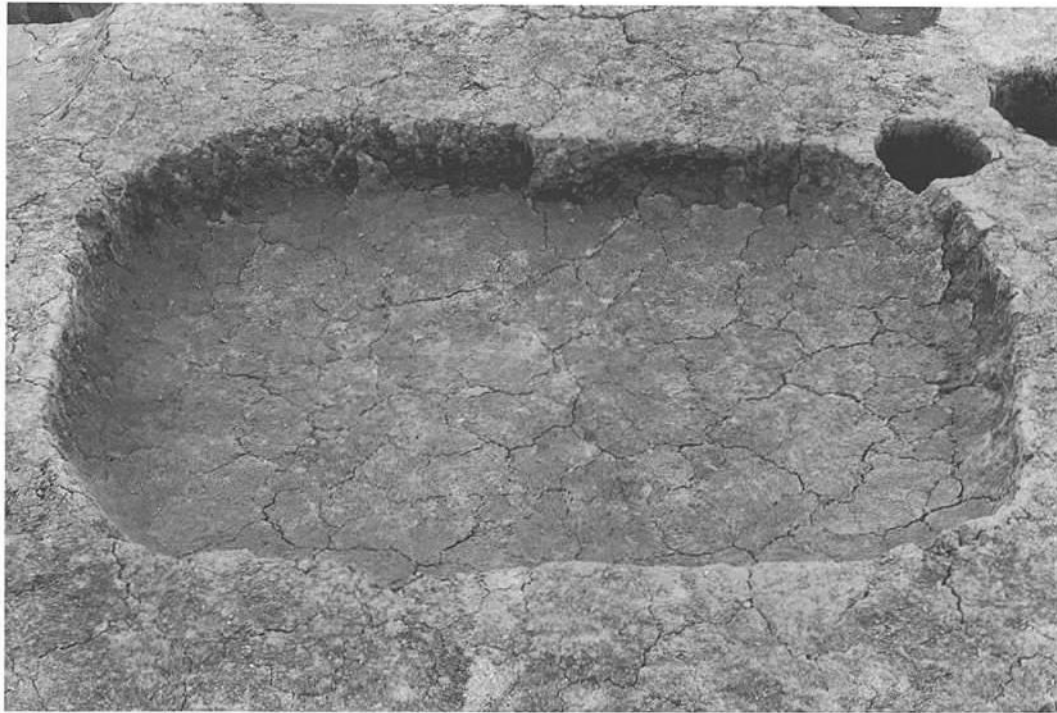


2. 116号土坑 (東から)

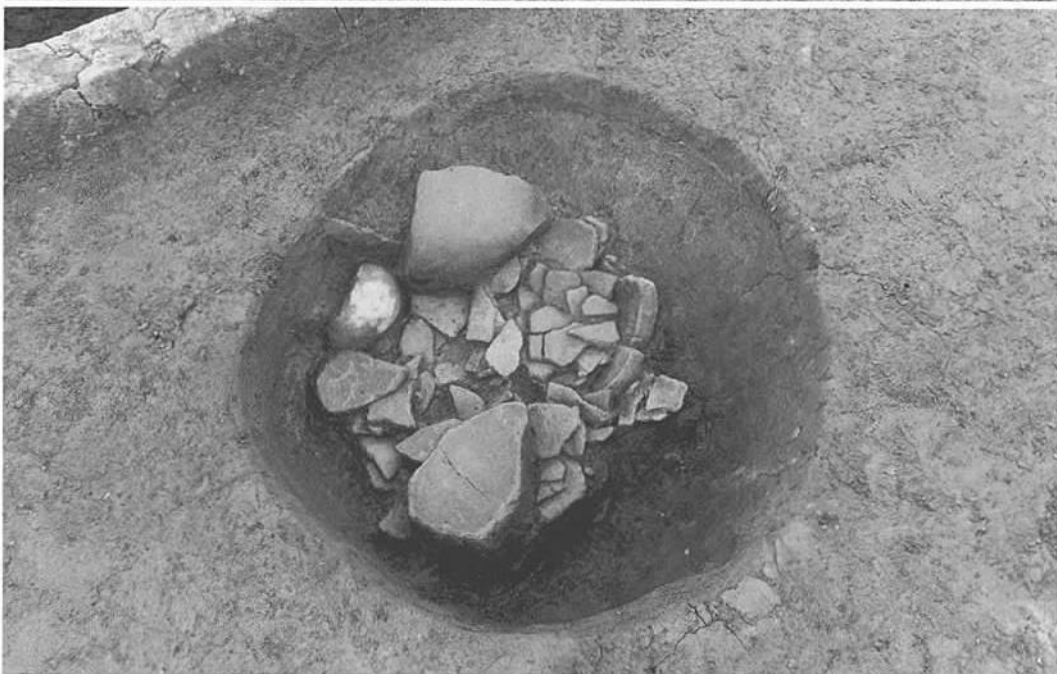


3. 117・118・124号土坑  
(北から)





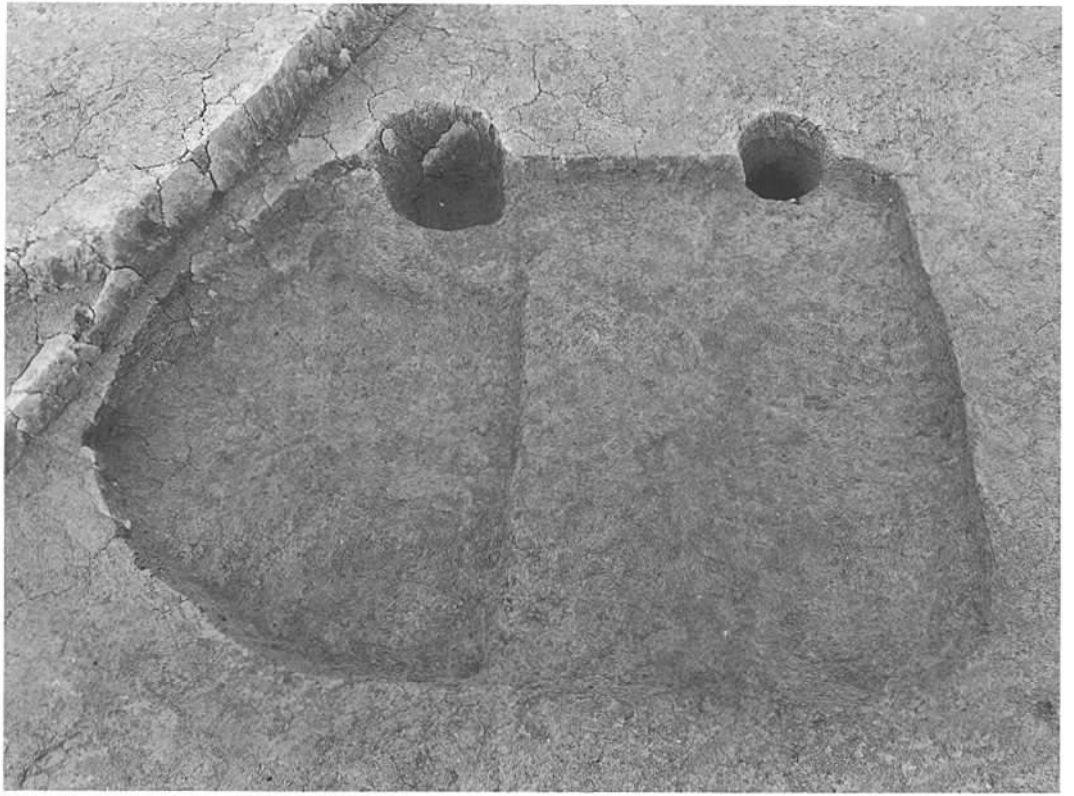
1. 119号土坑 (東から)



2. 121号土坑 (東から)



3. 73号竪穴住居跡、  
122号土坑  
(南から)



1. 123号土坑 (西から)



2. 125号土坑 (西から)



3. 126号土坑 (南から)



1. 128号土坑 (北から)



2. 129号土坑 (西から)



3. 130号土坑 (北から)



1. 132号土坑 (南から)

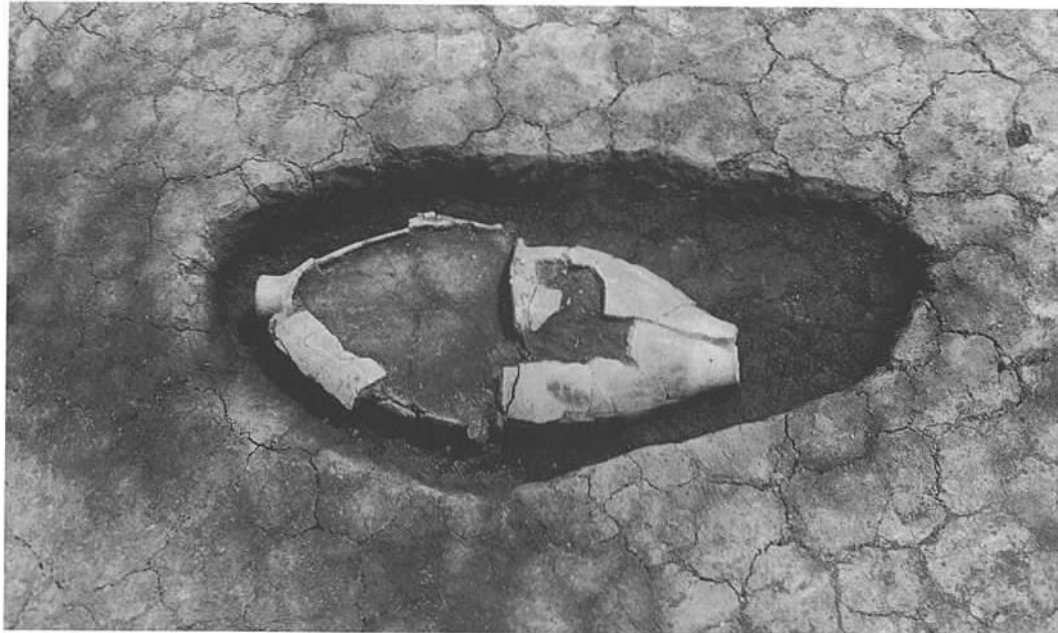


2. 133号土坑 (南から)



3. 134号土坑 (西から)

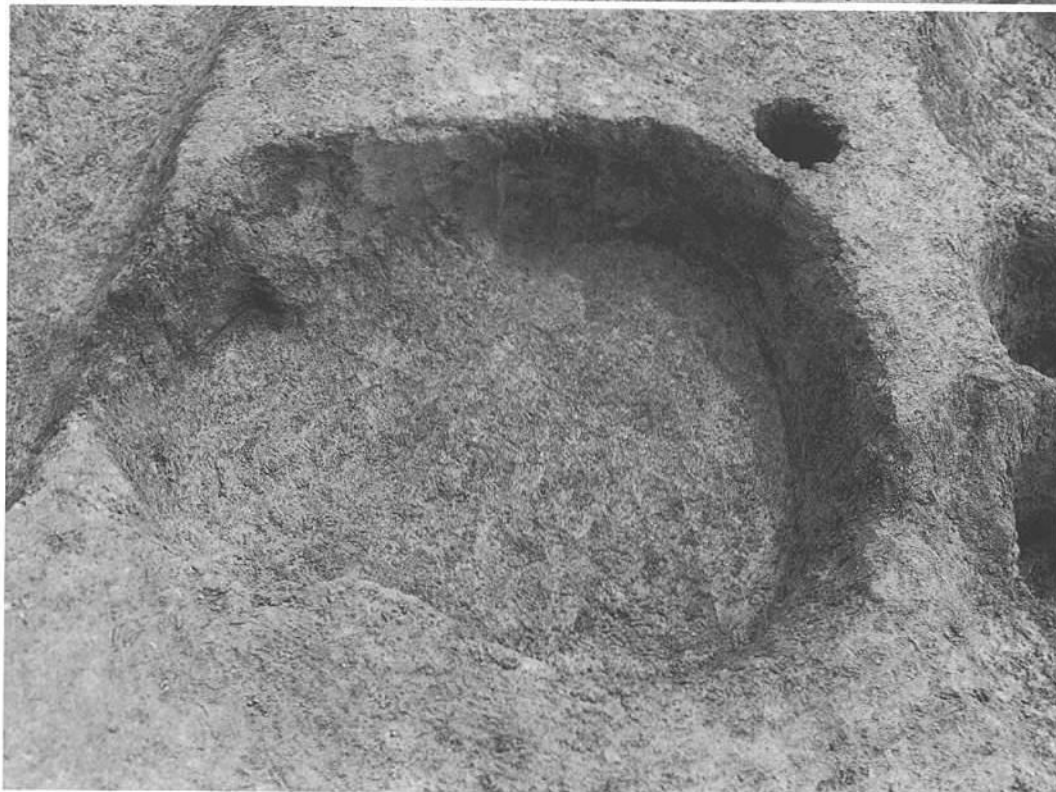




1. 1号甕棺墓 (東から)



2. 25号溝断面土層 (北から)



3. P-169 (西から)



11-5



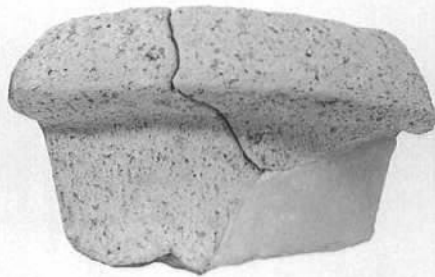
11-6



11-1



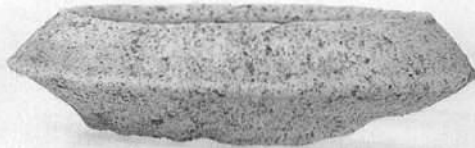
11-7



11-2



11-8



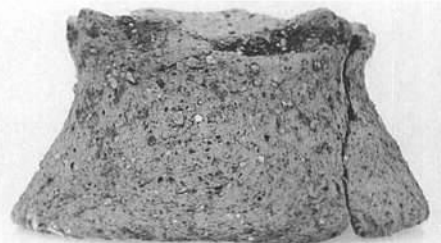
11-3



11-9

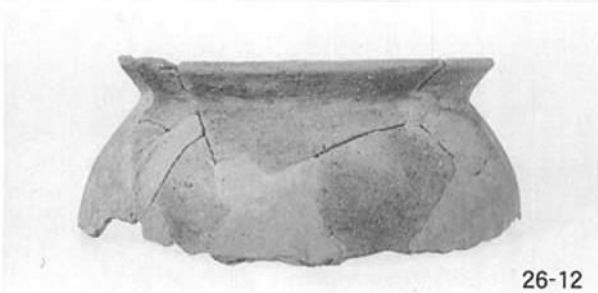
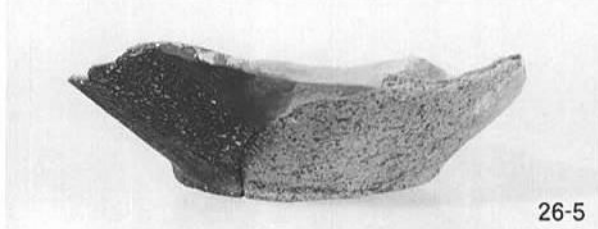


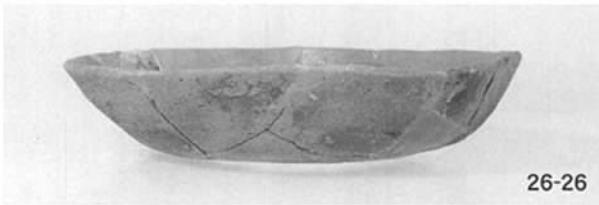
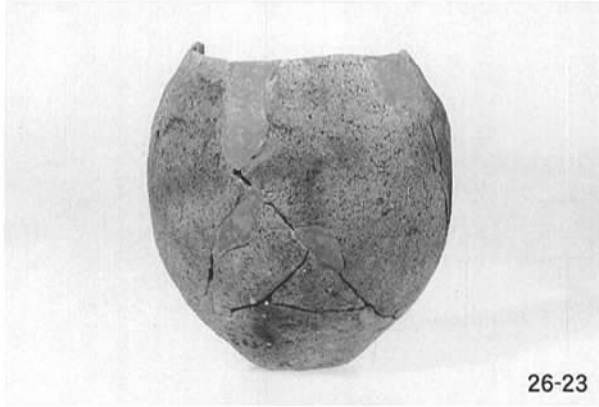
11-4



11-10

11号竖穴住居跡出土土器







27-9



27-28



27-22



27-29



27-31



27-45



27-23



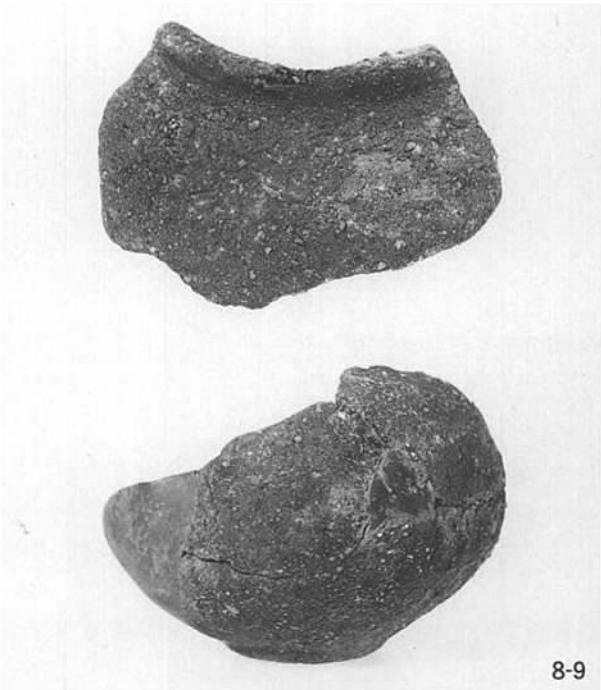
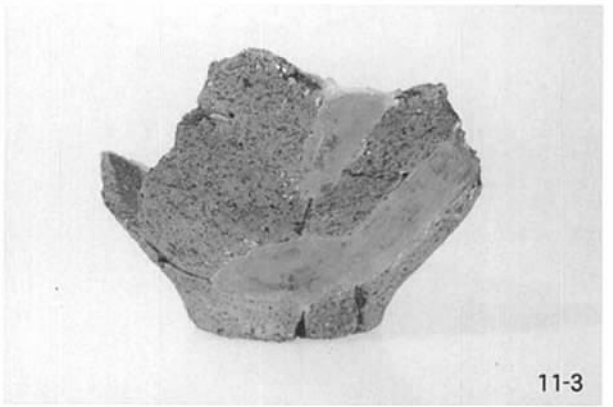
56-32



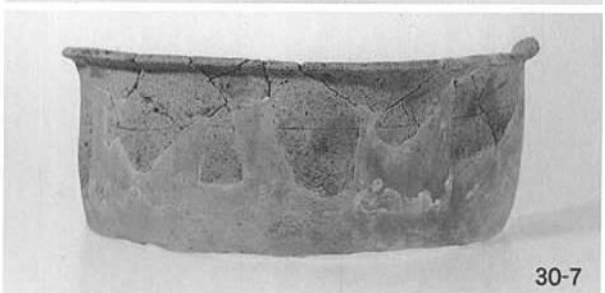
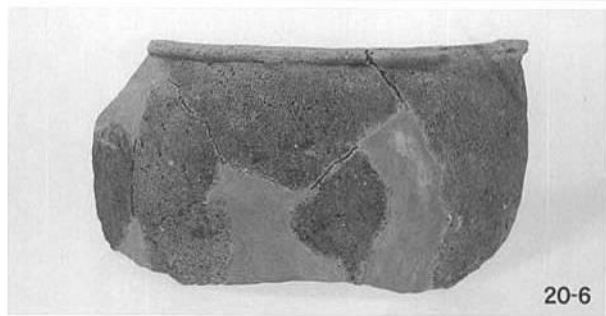
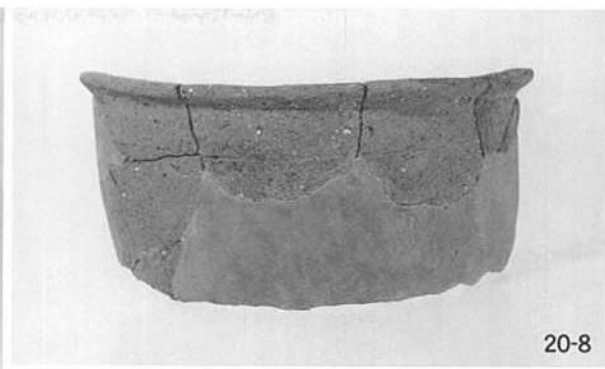
27-27

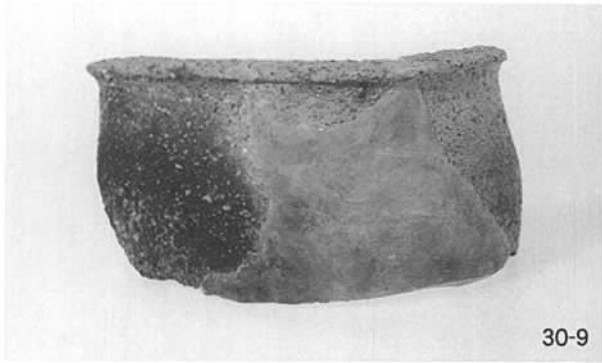


60-9



1·2·8·11·19·20号土坑出土土器





30-9



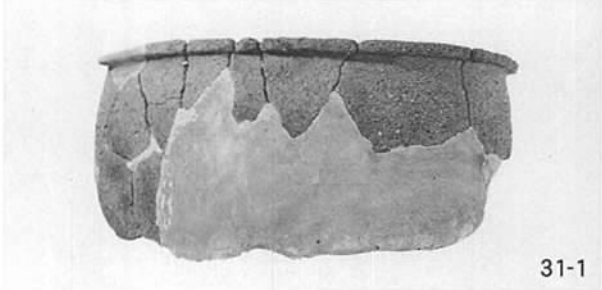
31-7



30-13



31-9



31-1



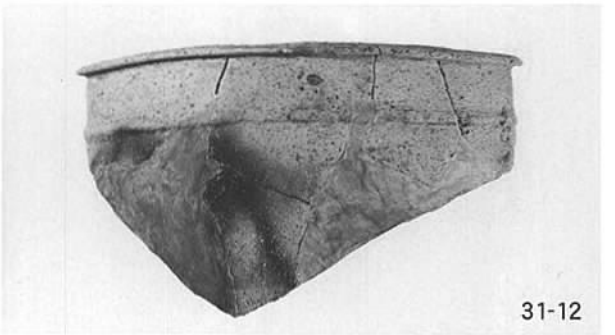
31-10



31-2



31-3

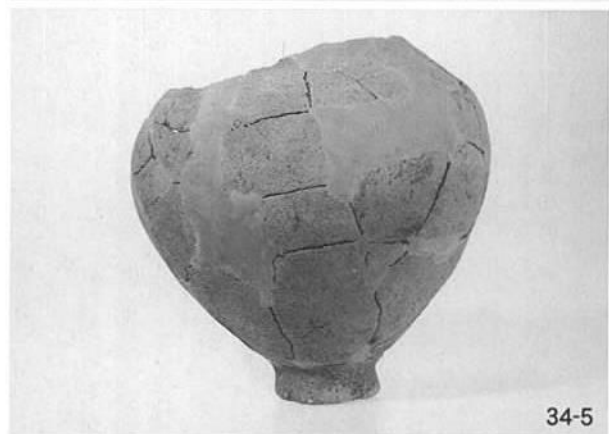
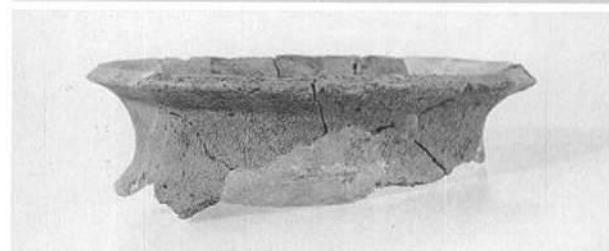
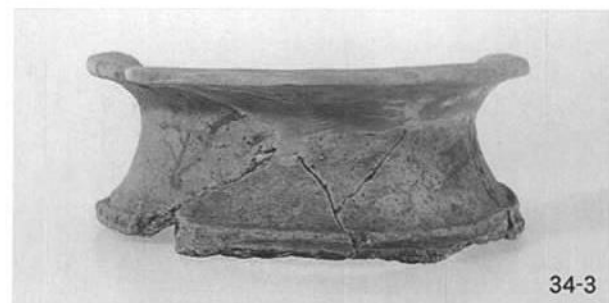


31-12



31-20







34-27



34-41



34-31



34-43



34-32



34-45



34-33



34-47



34-40

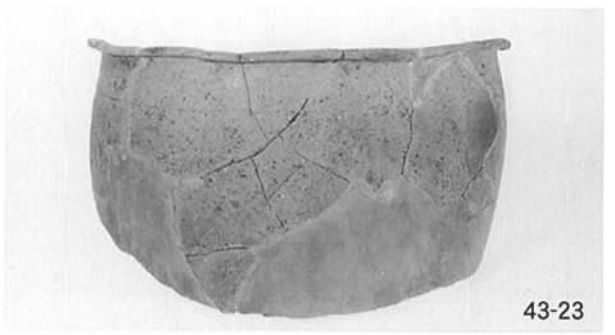


34-50





43-6



43-23



43-7



43-24



43-8



43-30



43-21



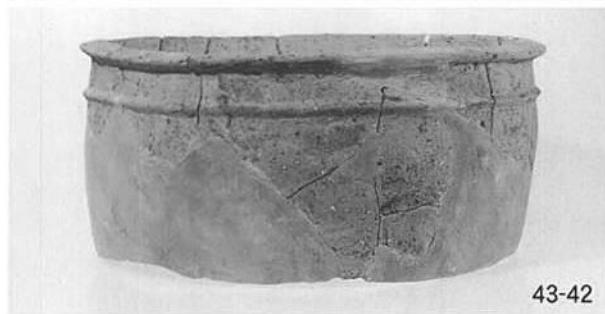
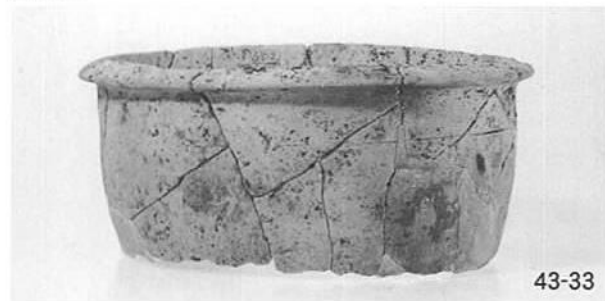
43-31



43-22



43-32





45-2



55-6



55-8



52-5



56-1



56-2



53-9



56-4





58-8



68-1



58-9



68-2



59-5



68-3



68-5

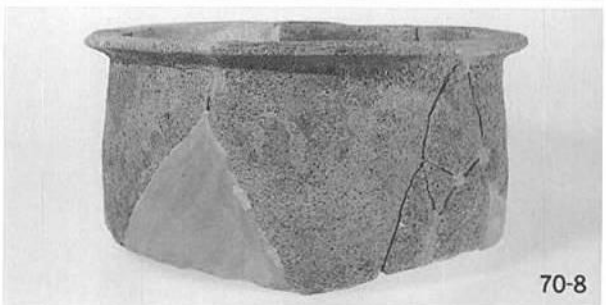


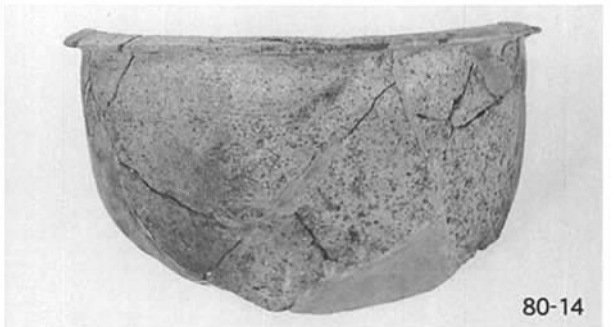
61-19

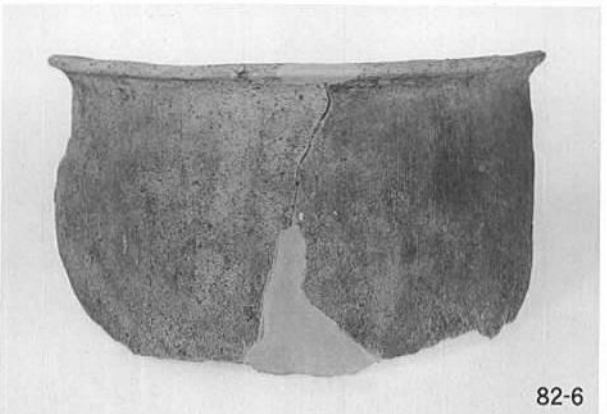
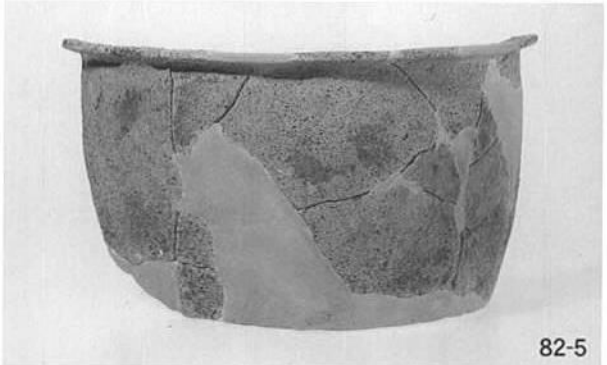


68-12











87-1



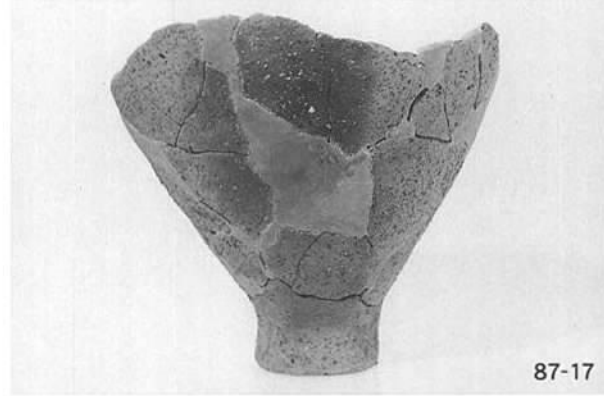
88-13



87-16



92-1



87-17



92-2



88-11



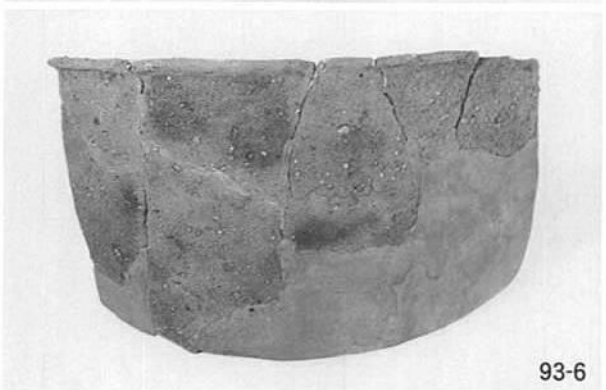
92-3

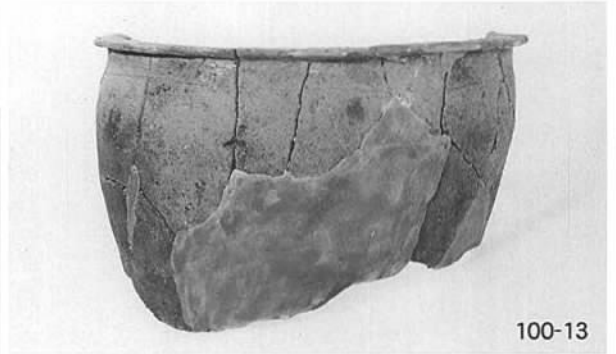


88-12

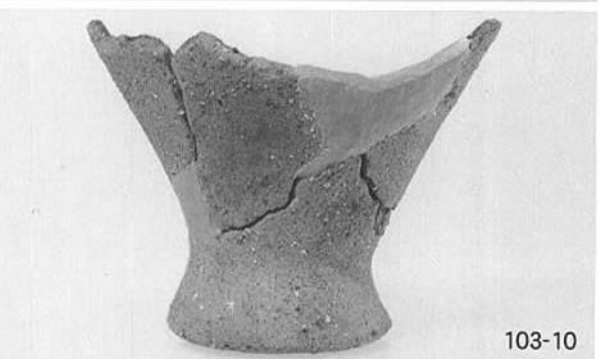
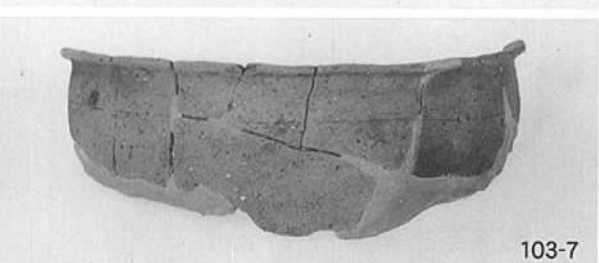
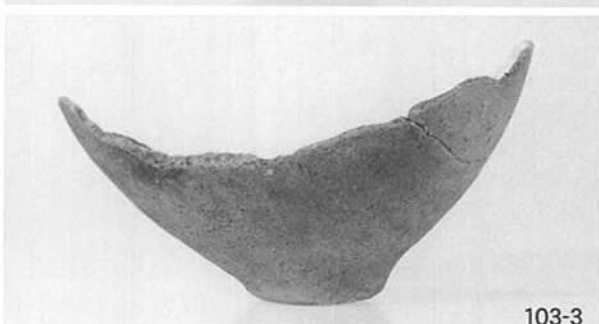
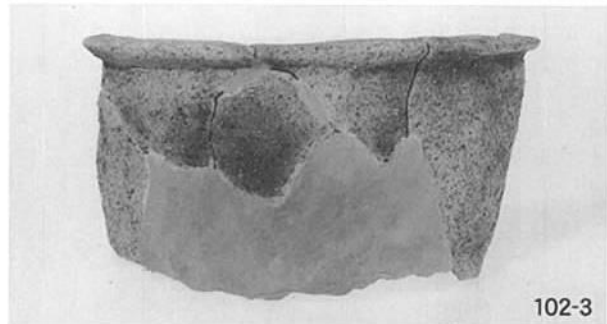


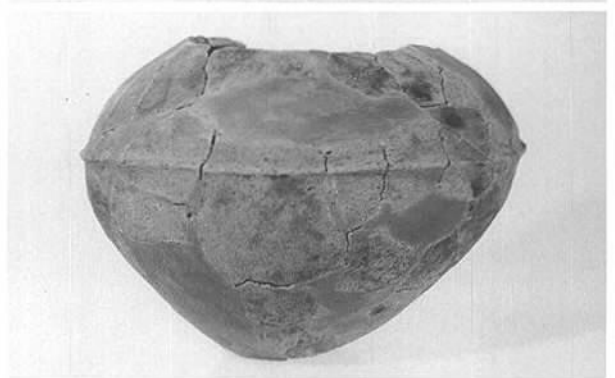
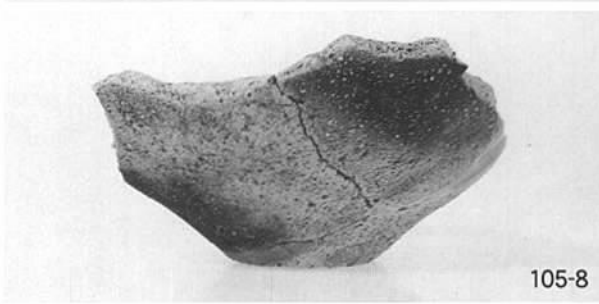
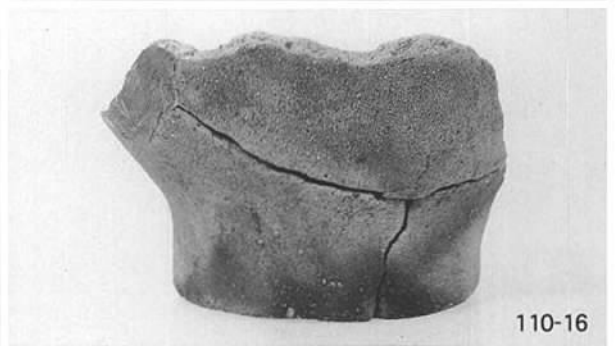
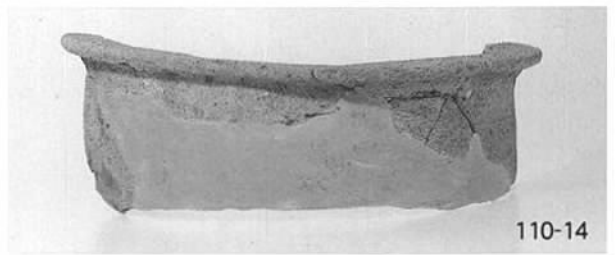
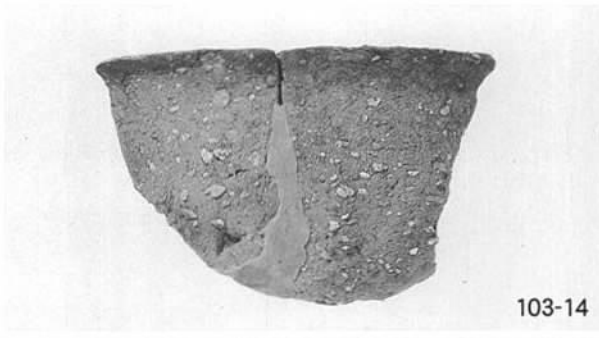
92-11





100号土坑出土土器

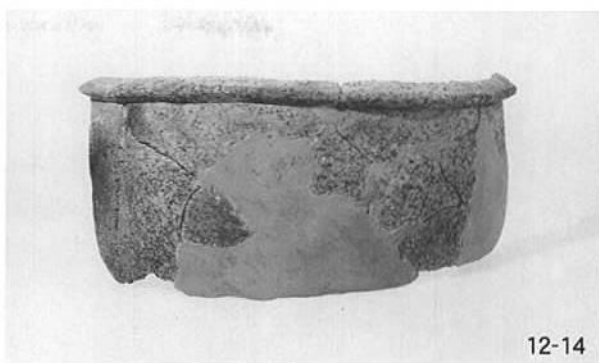














12-19



12-24



12-20



12-25



12-21



25-1



12-22



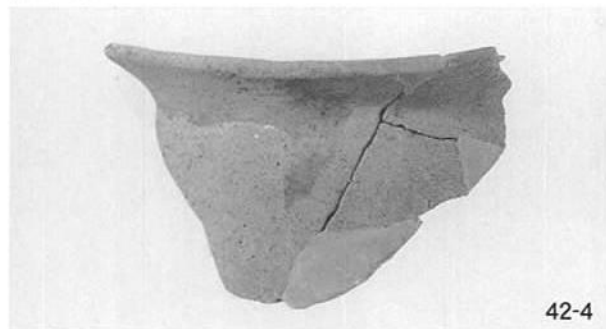
42-1



12-23



42-2



42-4



42-9



42-5



42-6



1



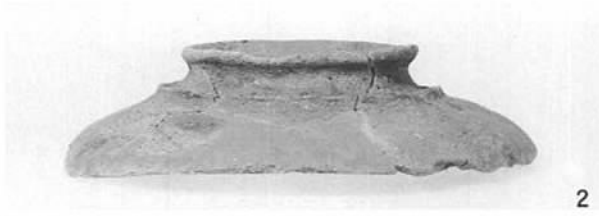
42-7



2



42-8



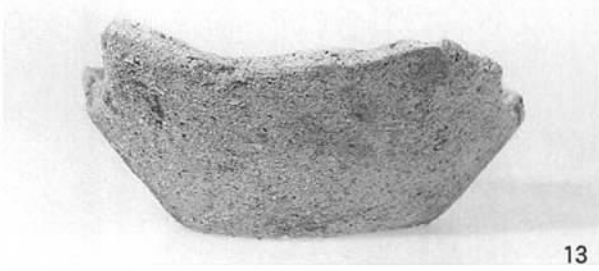
2



9



10



13



17



20



26



28



36



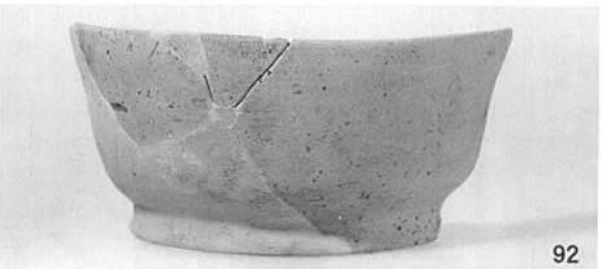
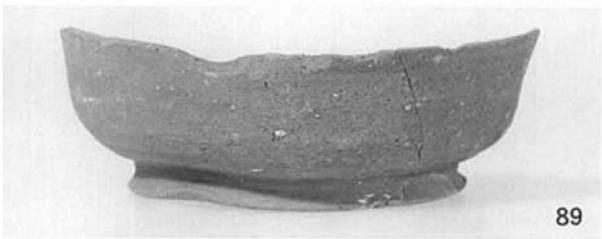
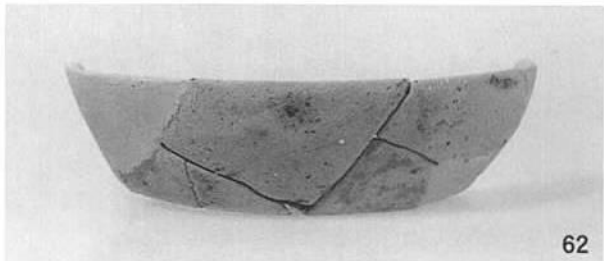
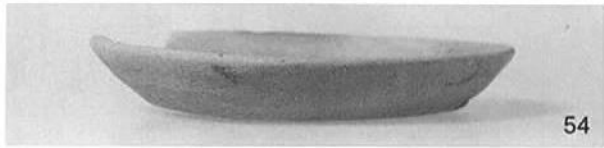
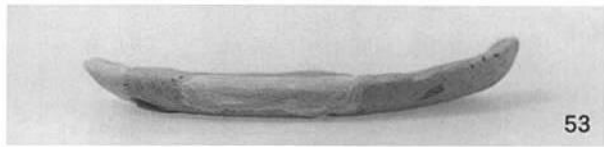
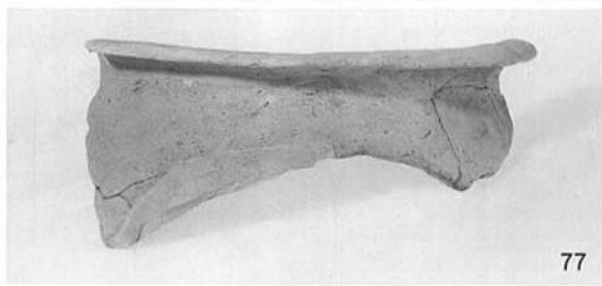
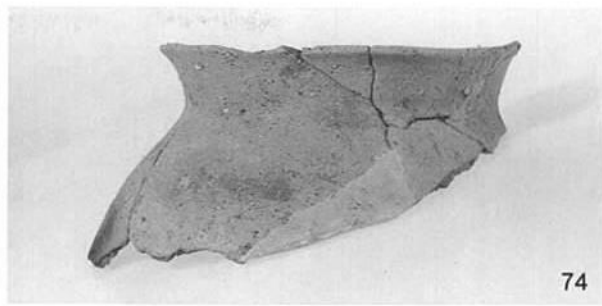
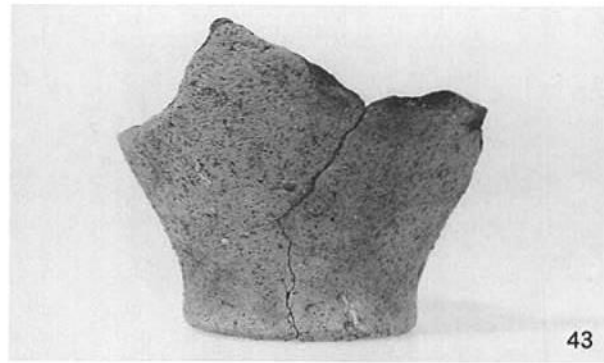
37

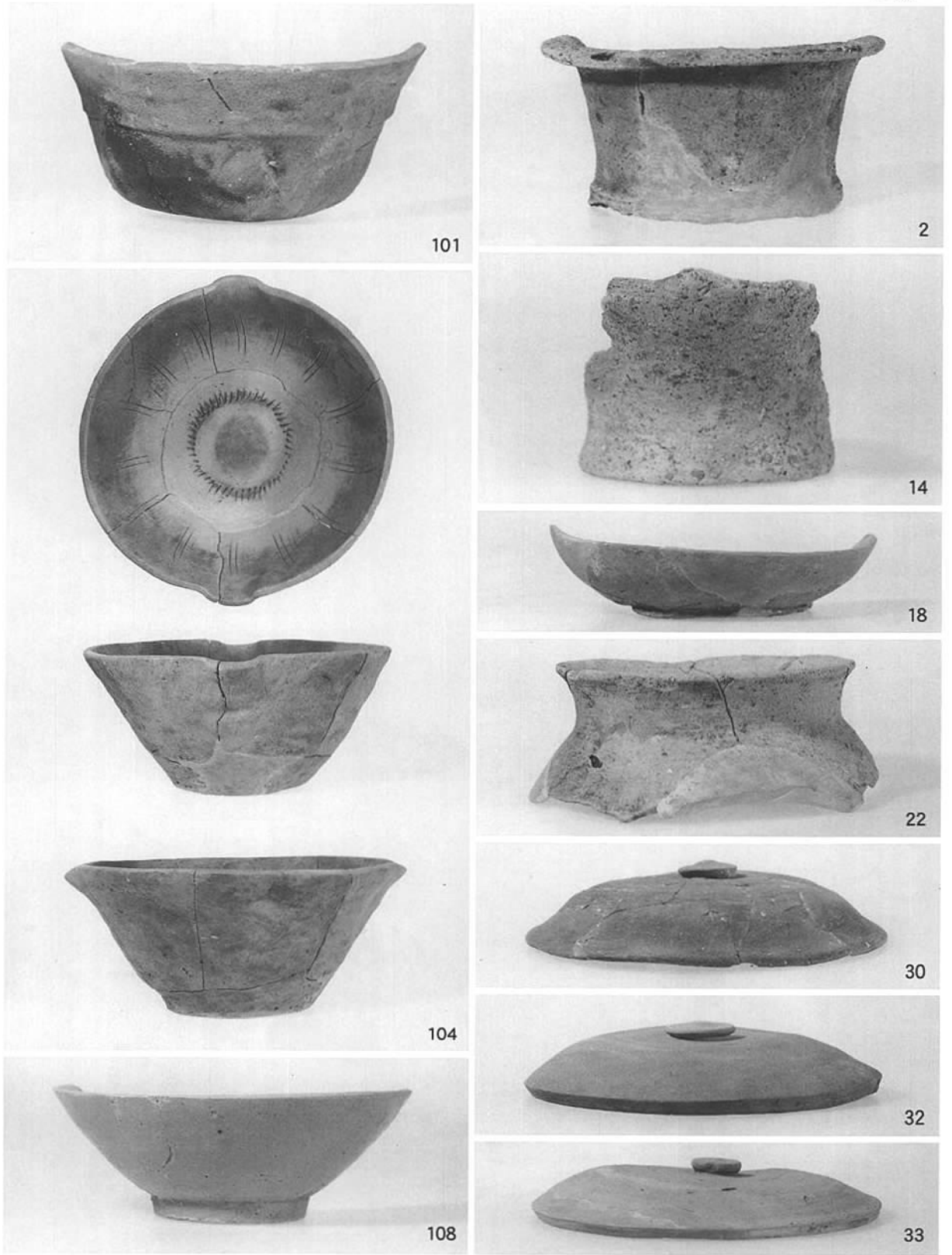


39



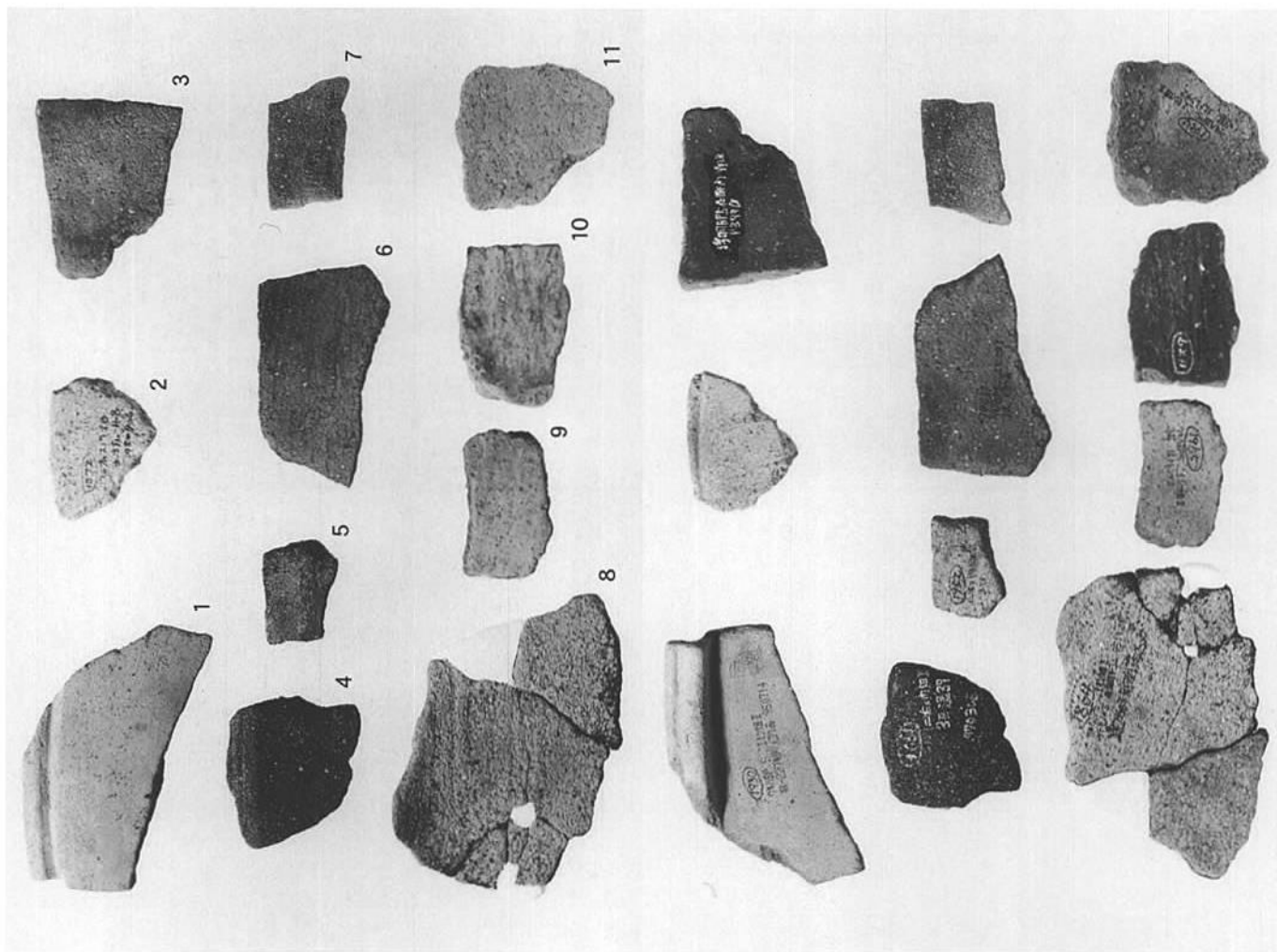
40



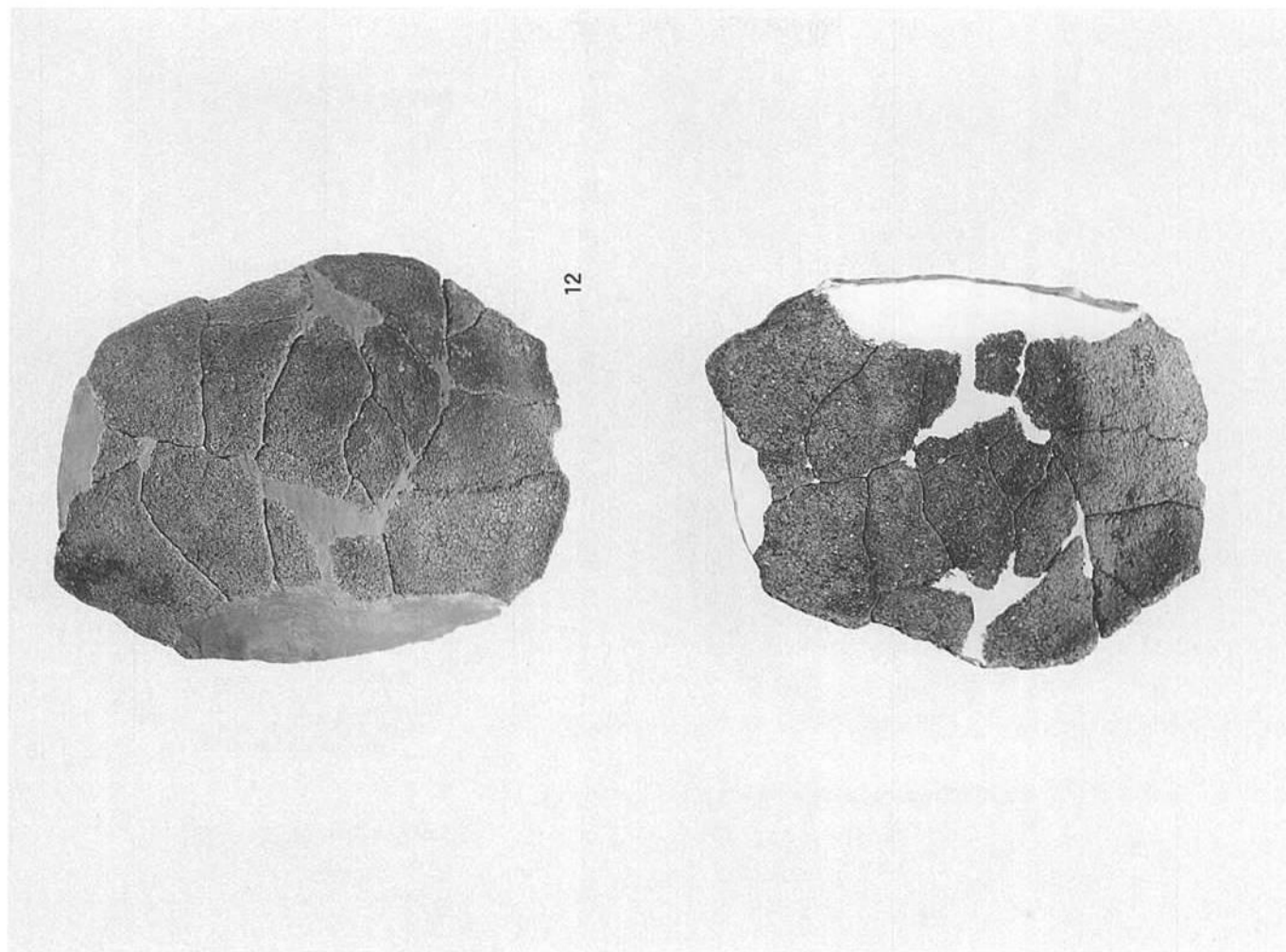


ピット、その他出土土器

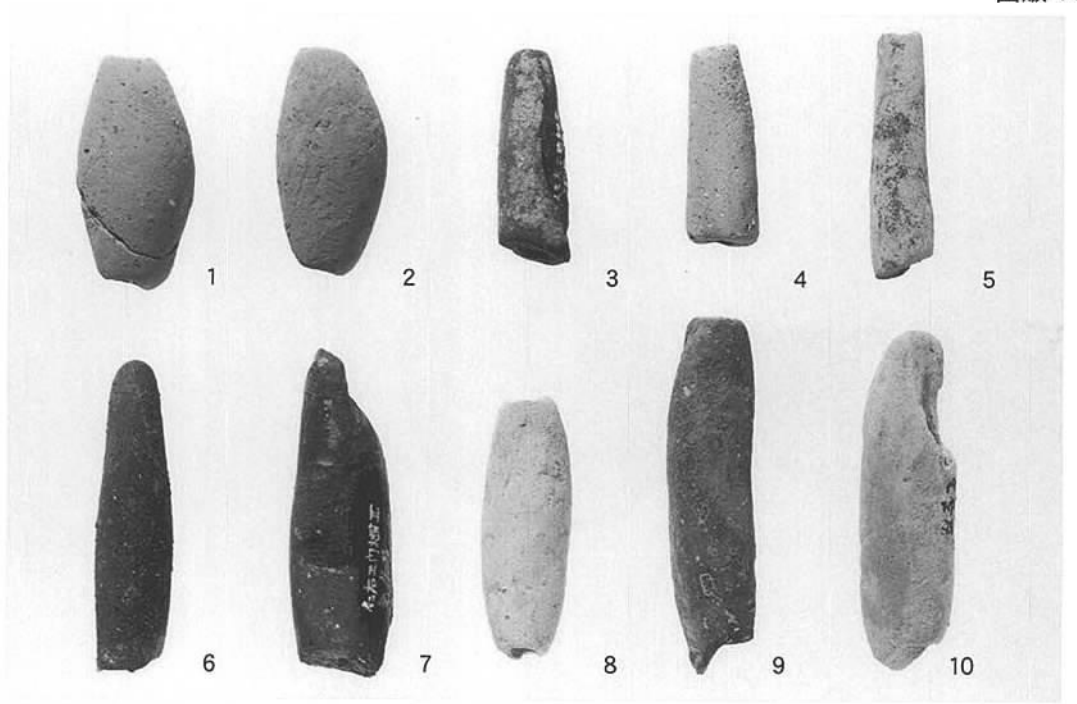




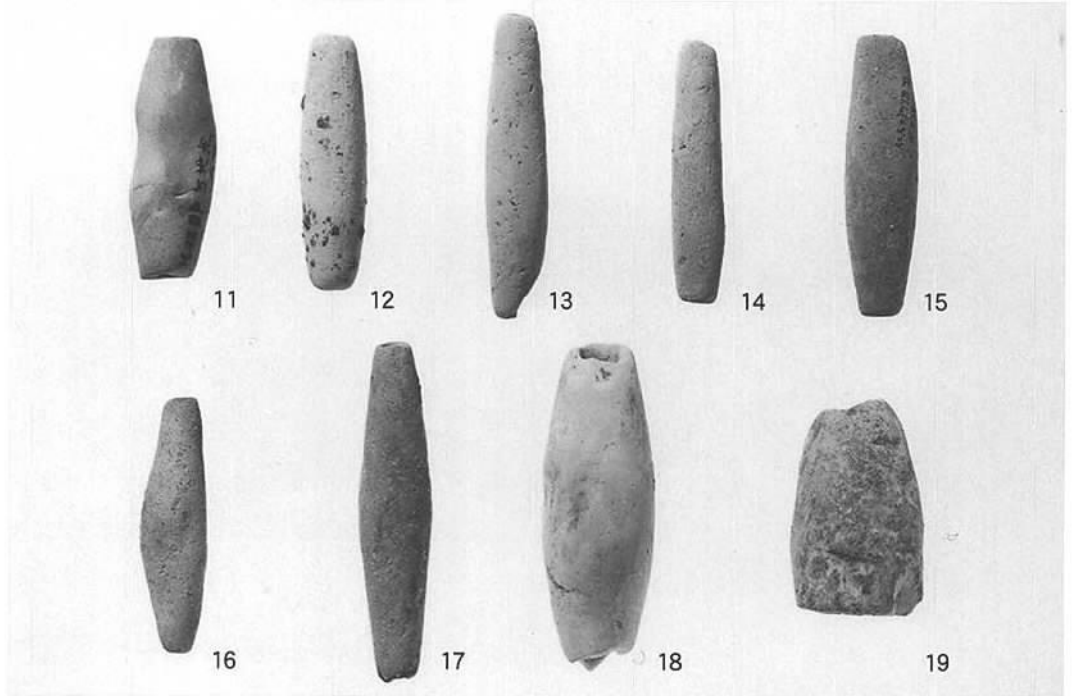
1. 細文土器①



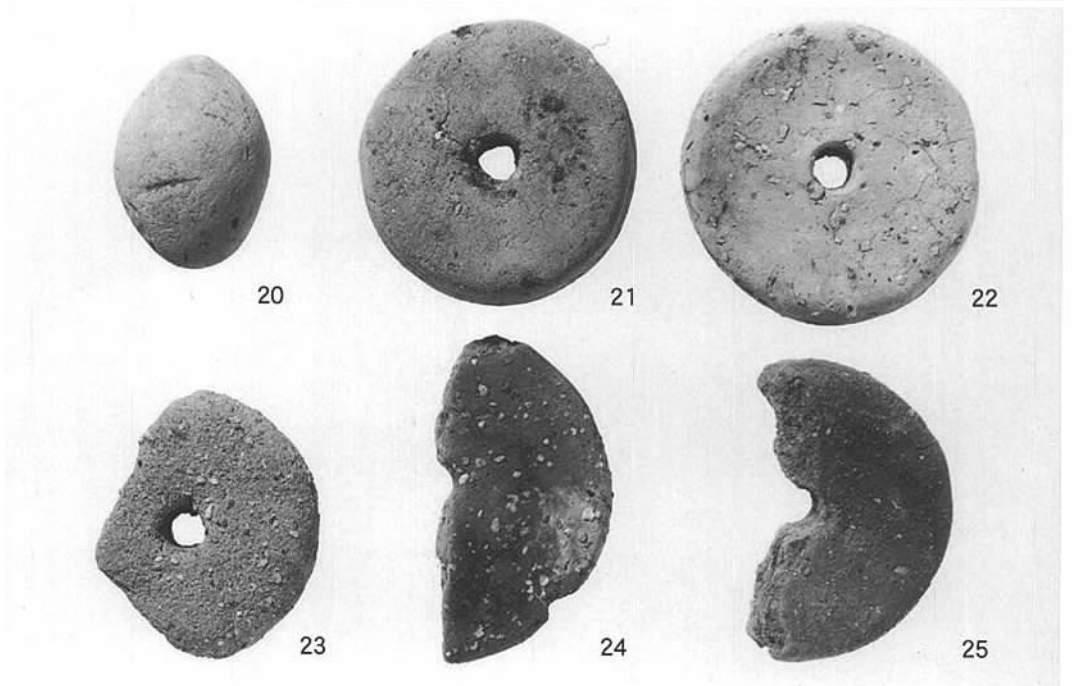
2. 細文土器②



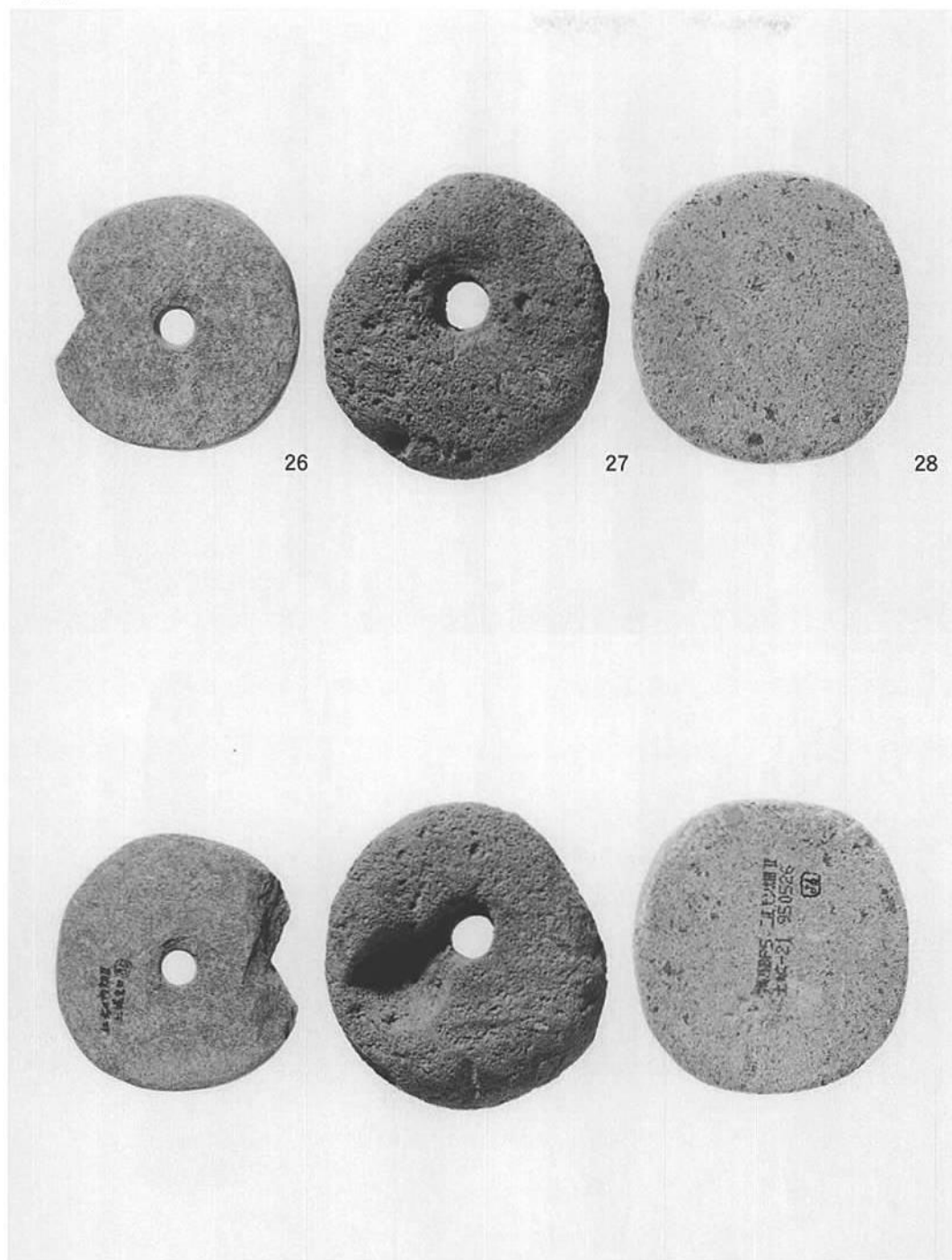
1. 土錘①



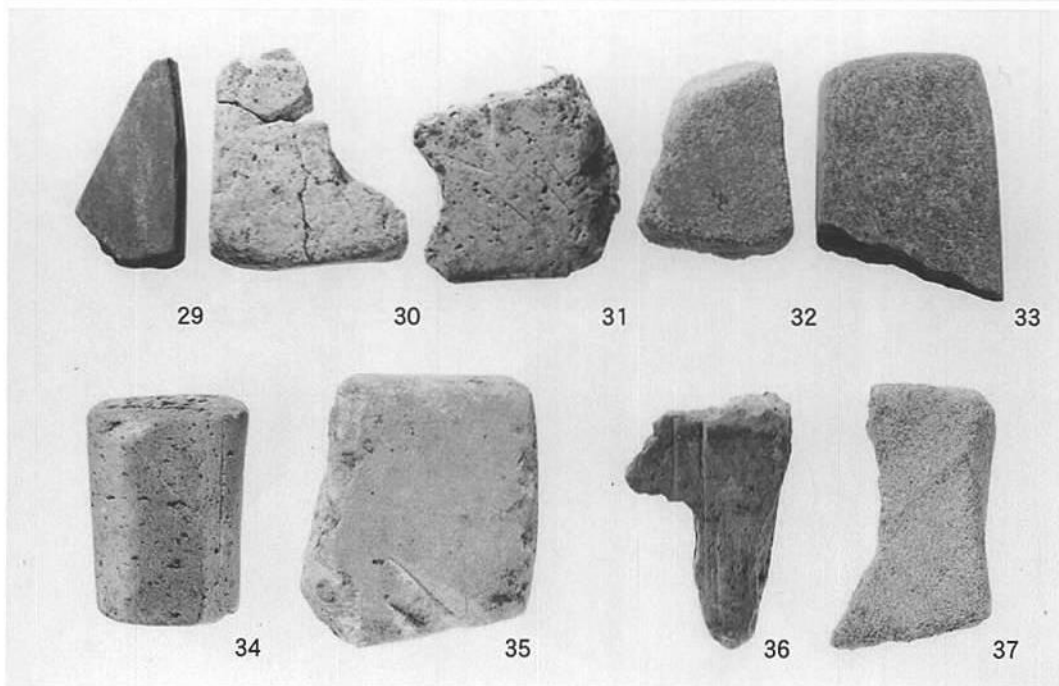
2. 土錘②



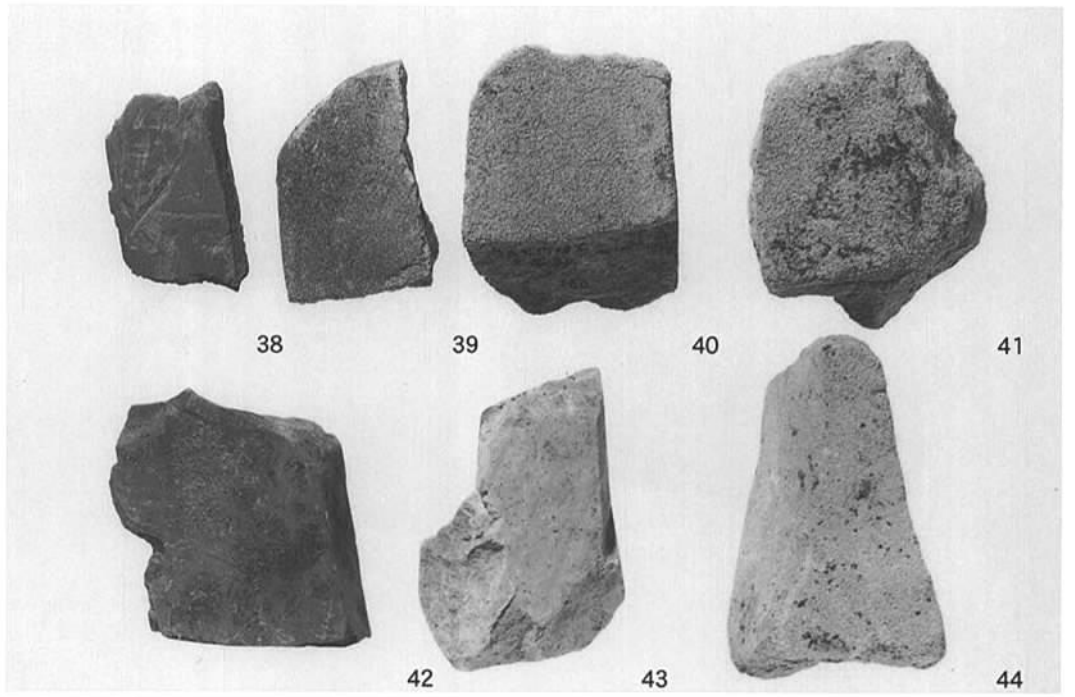
3. 投弾、土製紡錘車



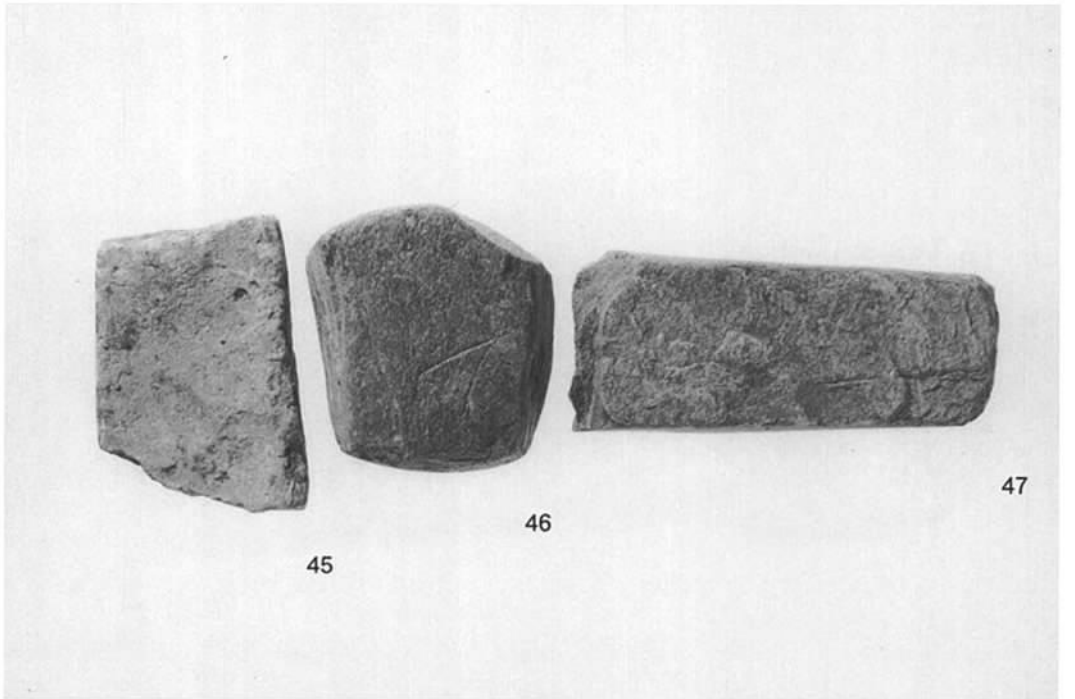
1. 石製紡錘車、浮子、  
円盤状石製品



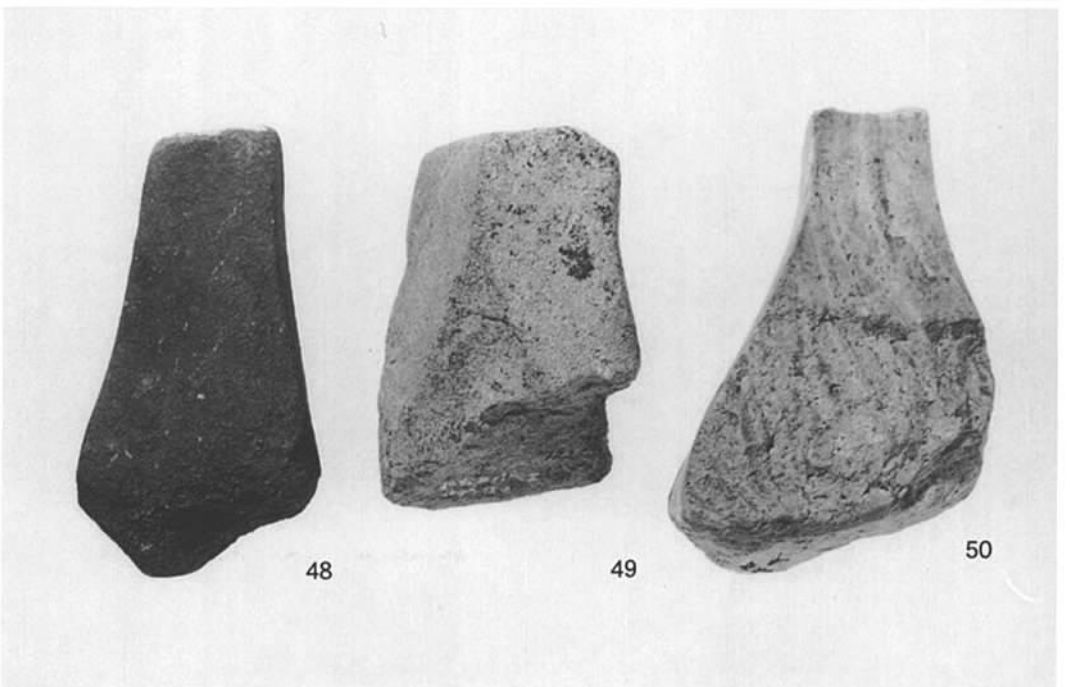
2. 砥石①



1. 砥石②



2. 砥石③



3. 砥石④

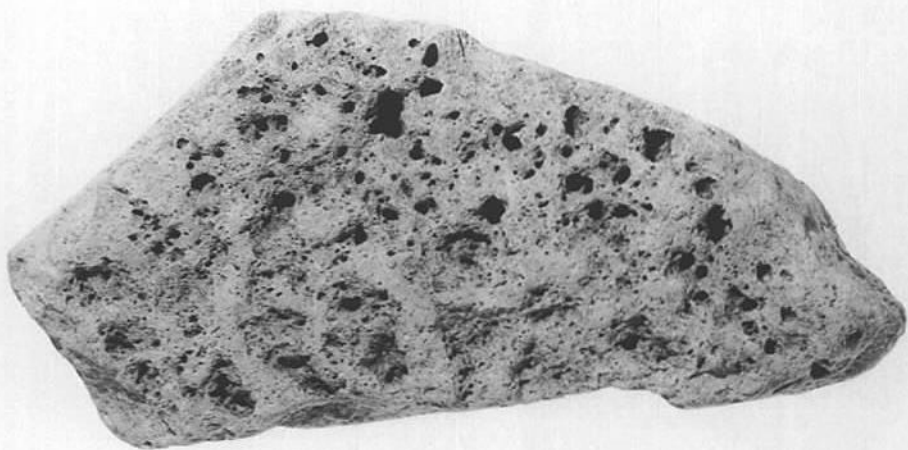
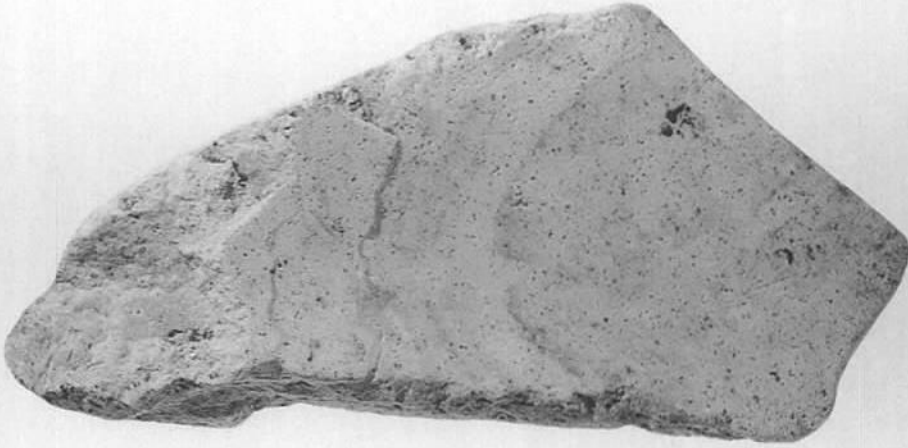


51



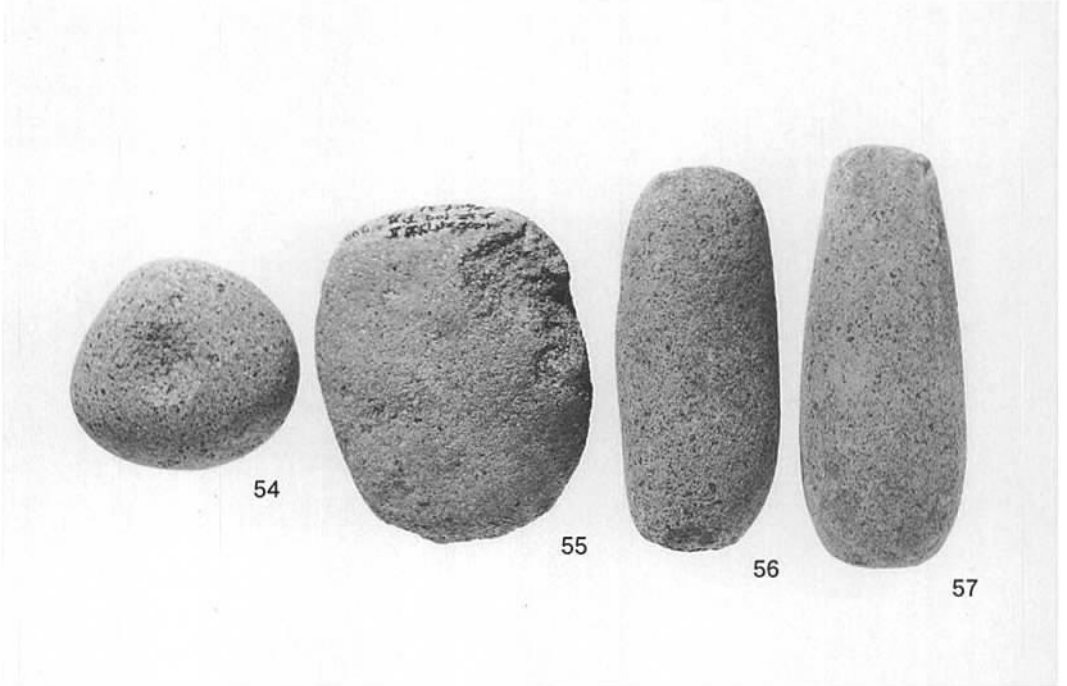
52

1. 砥石⑤



53

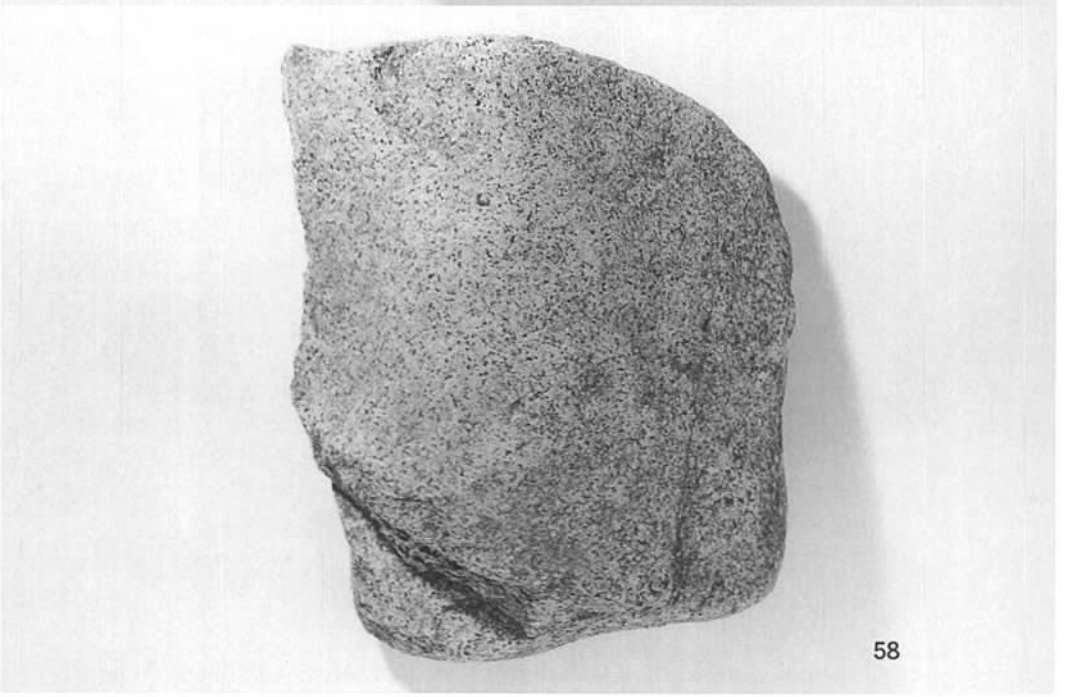
2. 砥石⑥

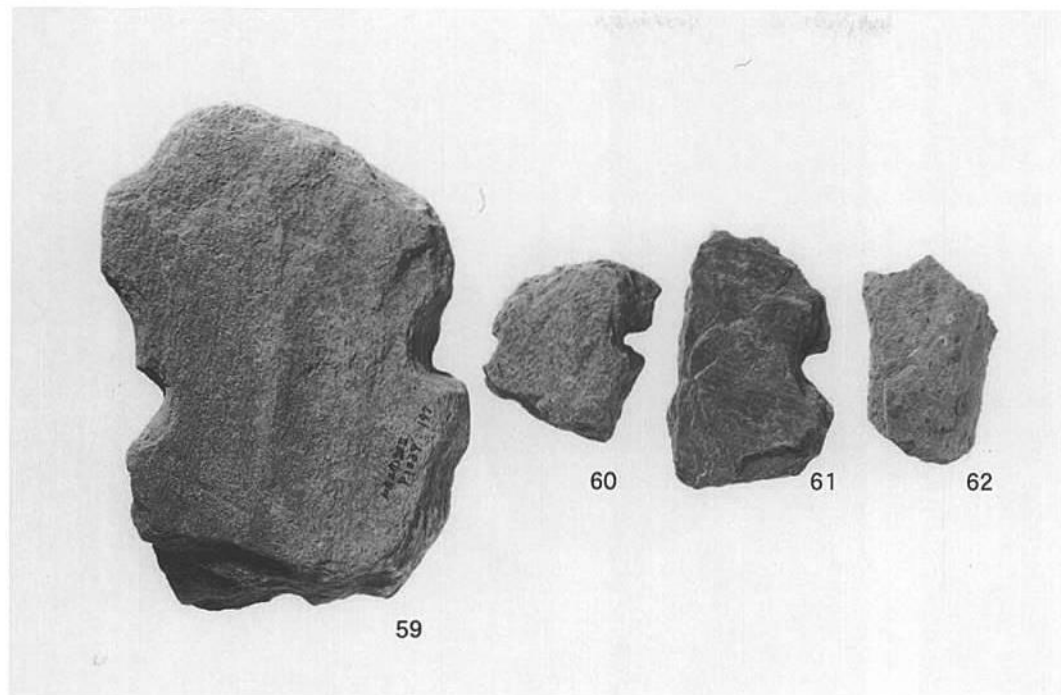


1. 凹石、敲石

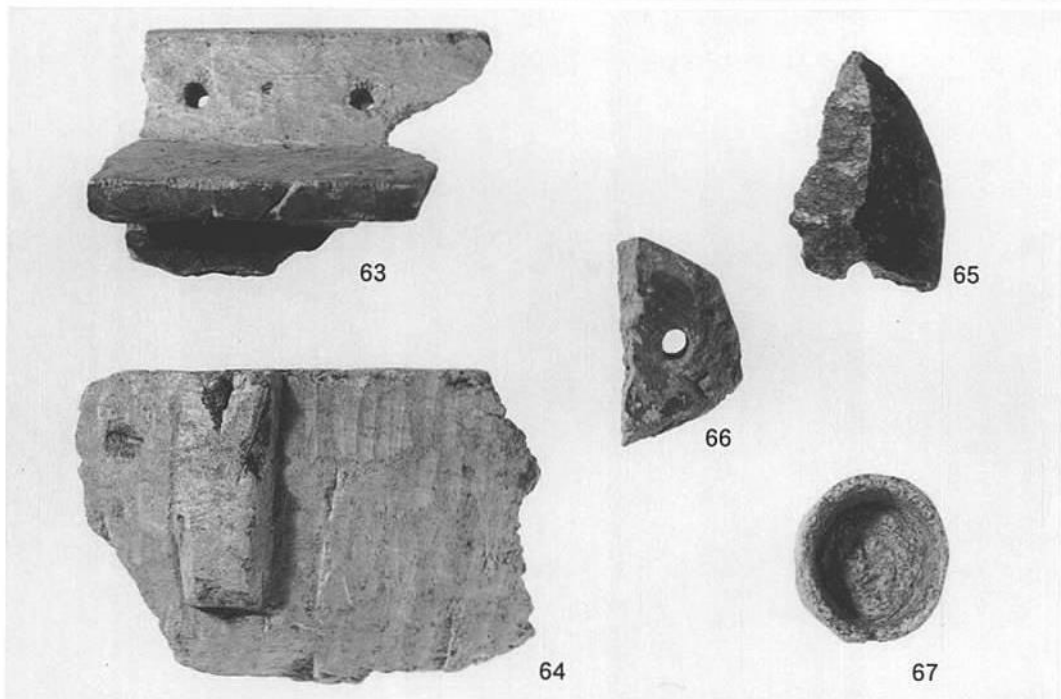


2. 石皿

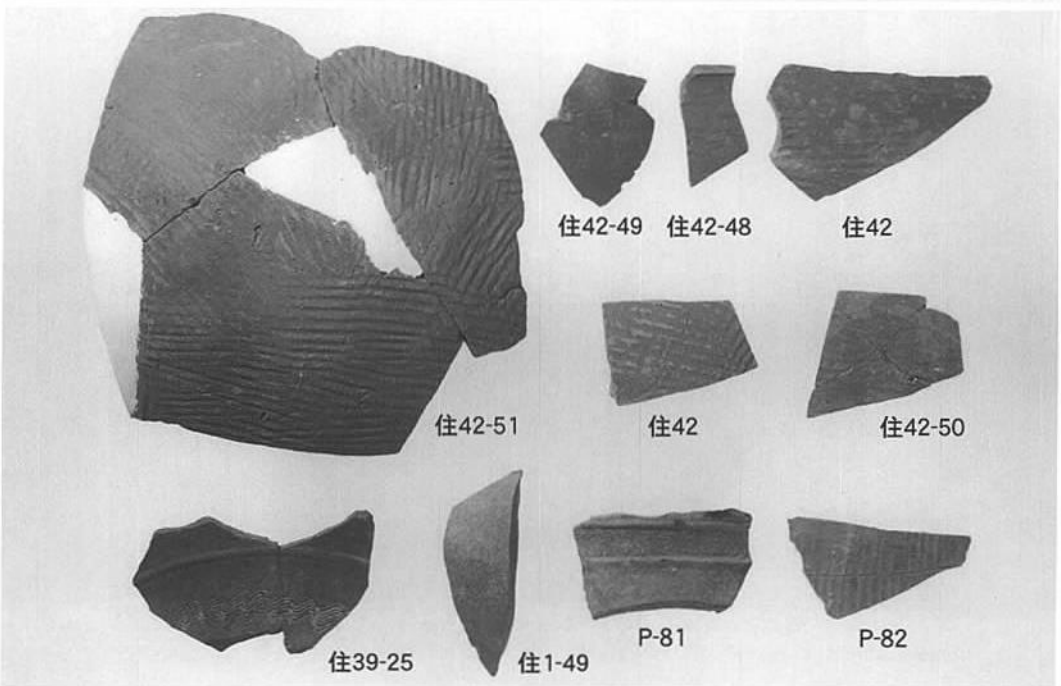




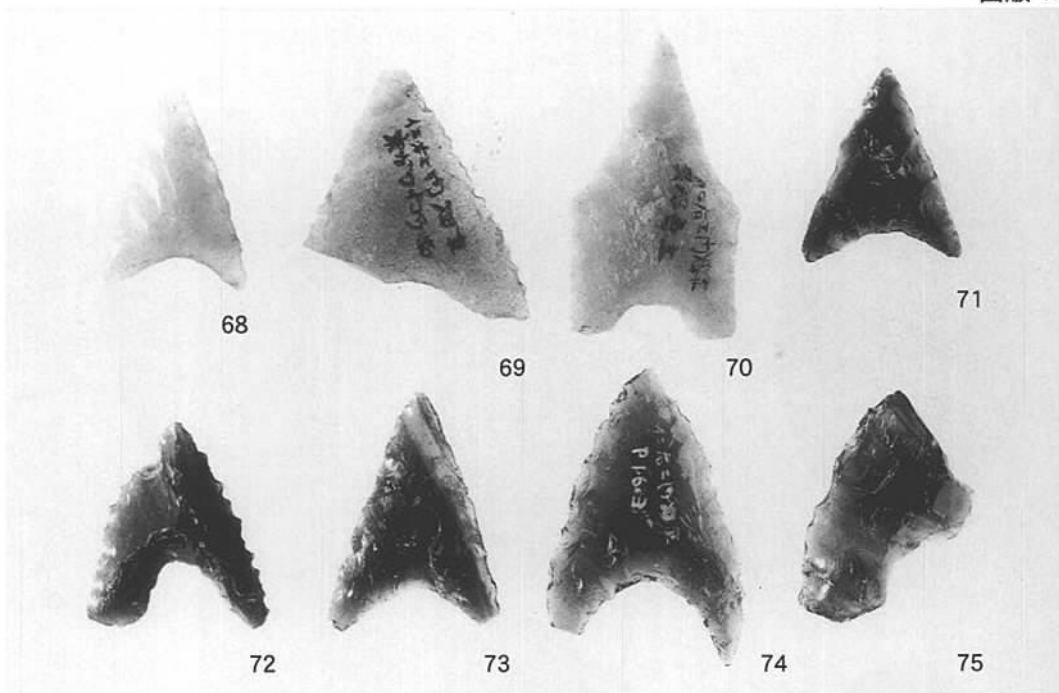
1. 石锤、不明石製品



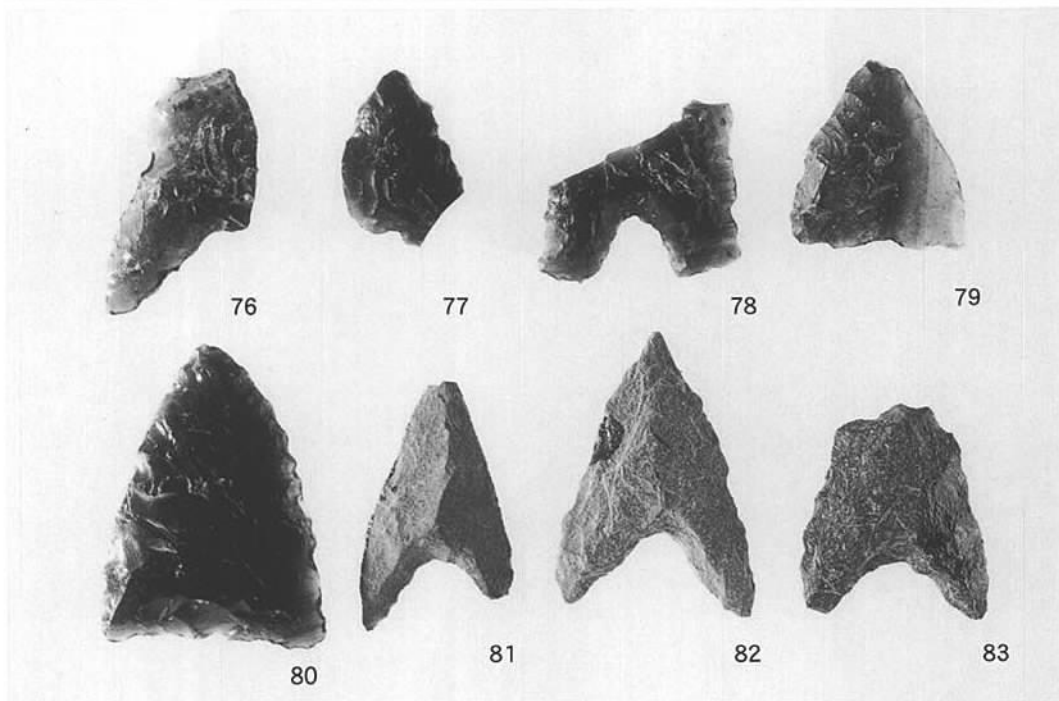
2. 滑石製品



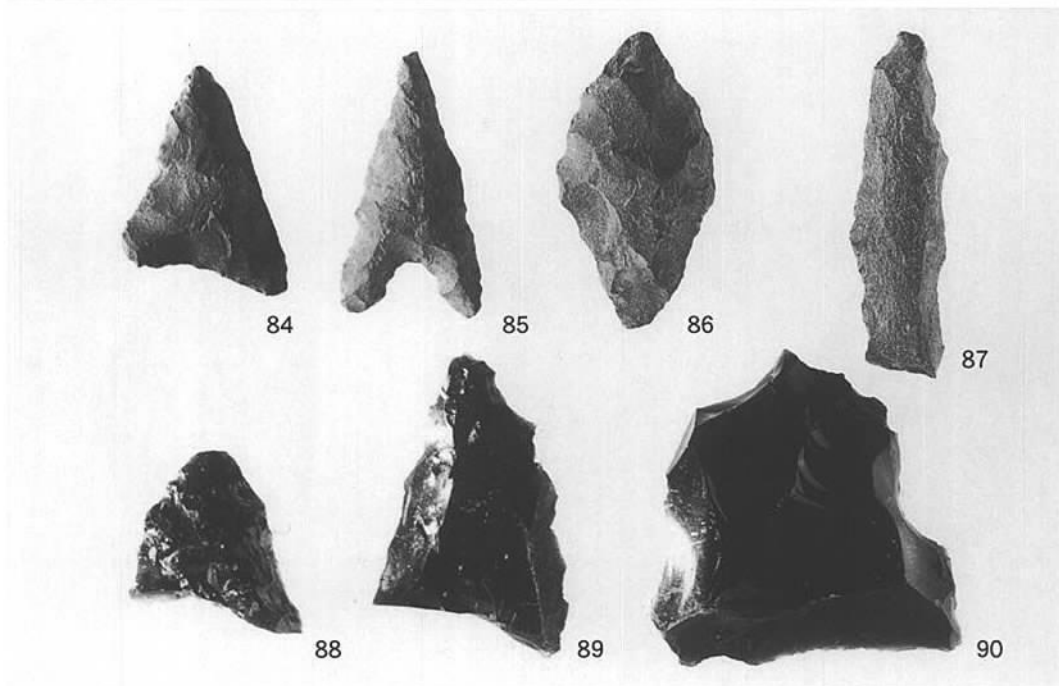
3. 初期須恵器



1. 打製石鏃①



2. 打製石鏃②



3. 打製石鏃③





91



92



94



93



95



96



97



98



99



100



101



102



103



104



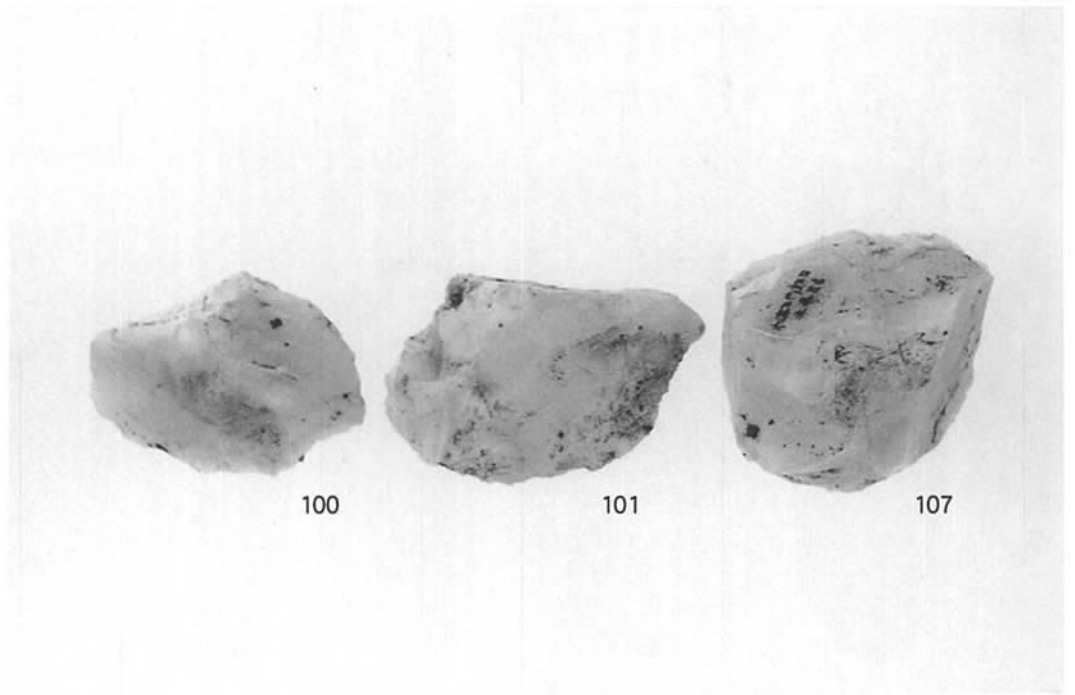
105



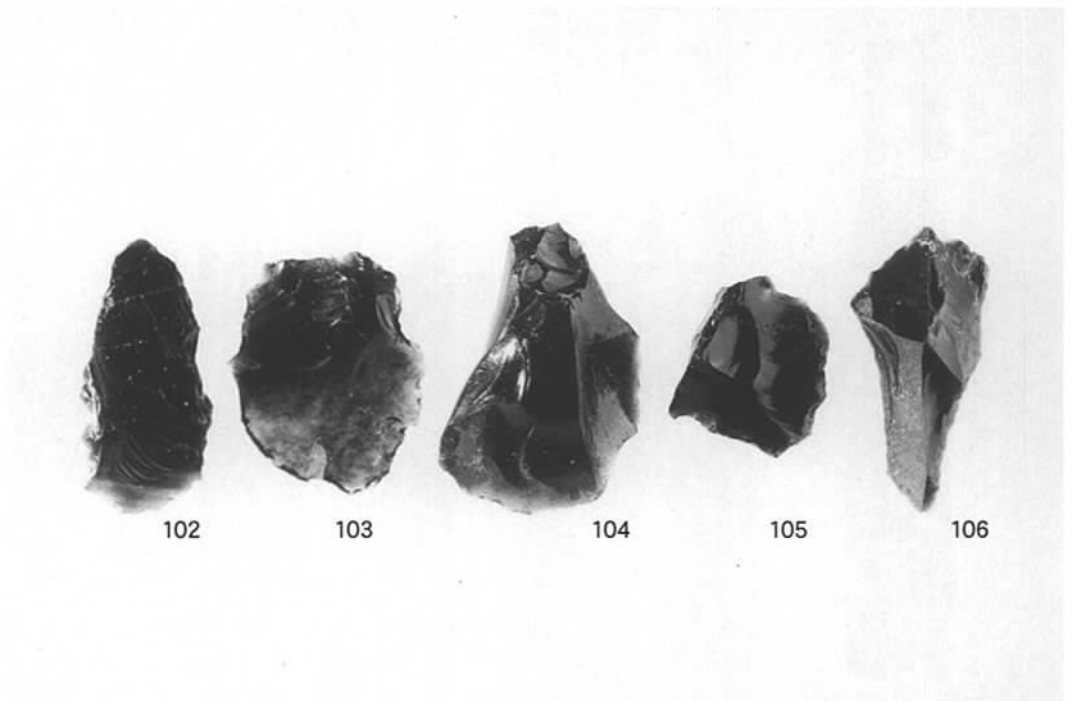
106

1. スクレイパー①

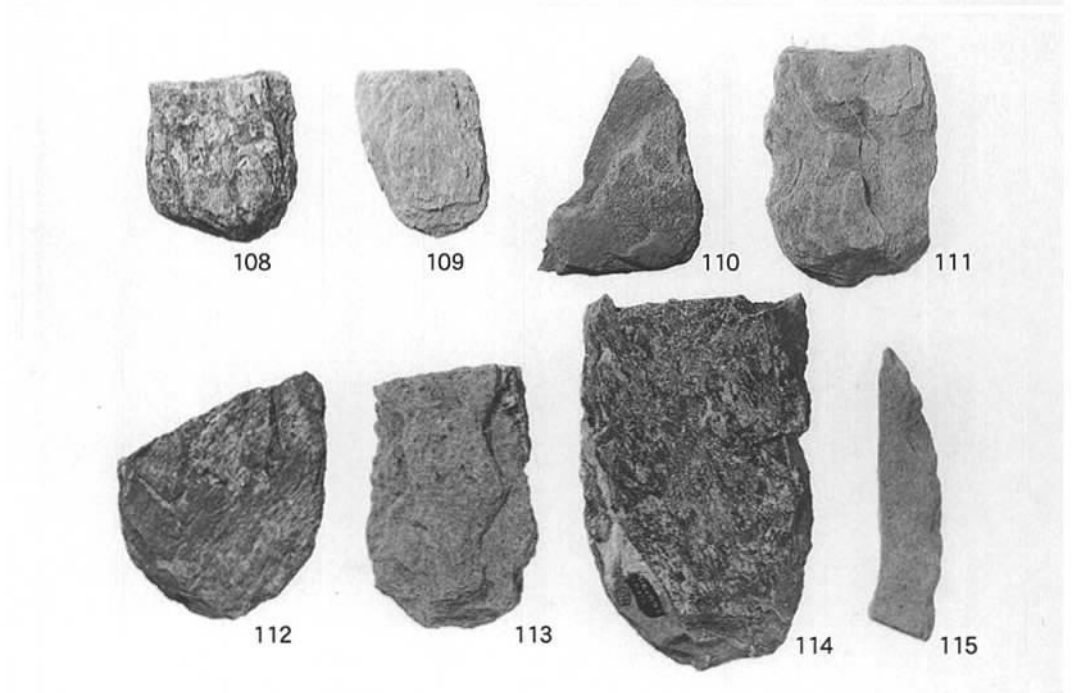
2. スクレイパー②



1. メノウ製スクレイパー、  
石核



2. 使用痕ある剥片



3. 打製石斧①



116



117



118



119



120



121



122



123



124

1. 打製石斧②



125



126



127



128



129



130



131



132



133

2. 磨製石鏃、磨製石劍



134



135



136



137

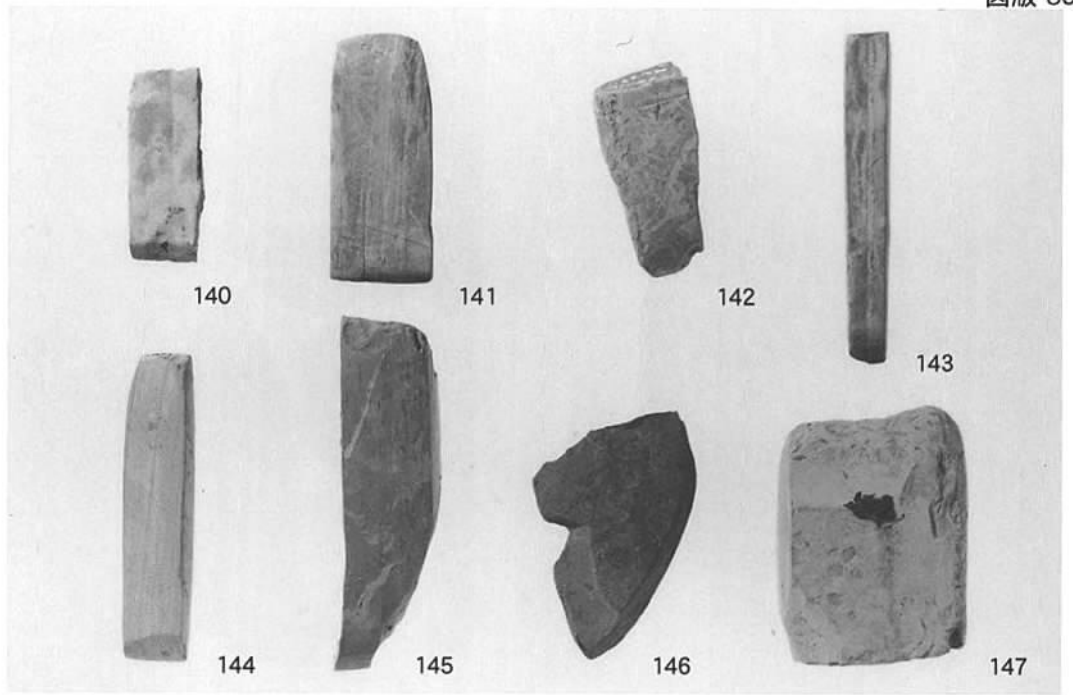


138

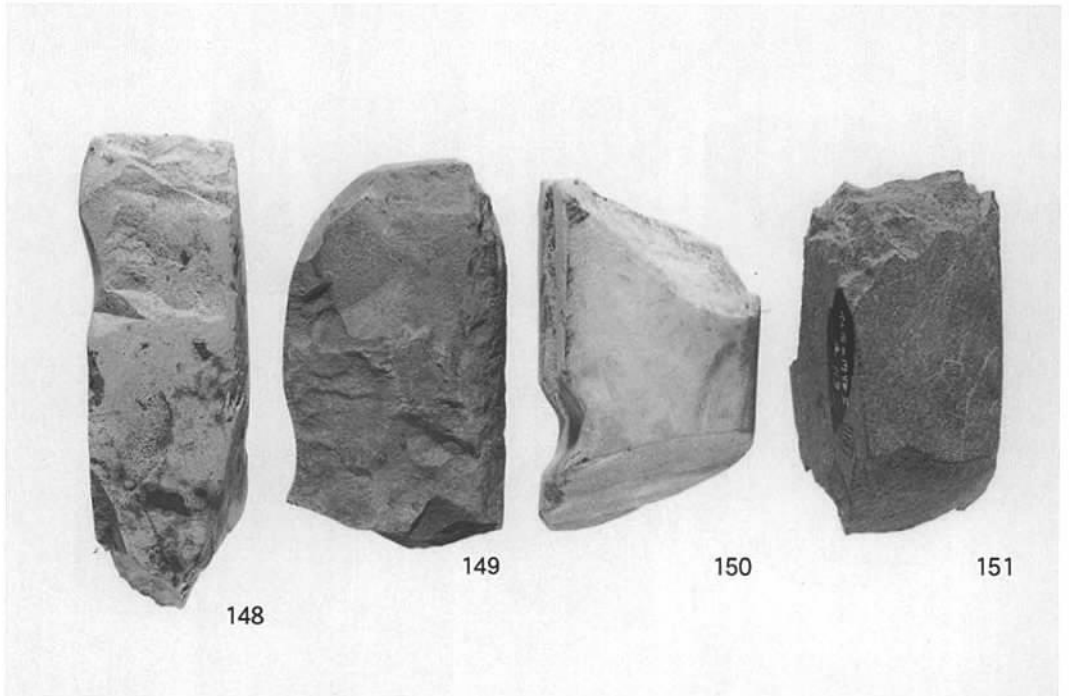


139

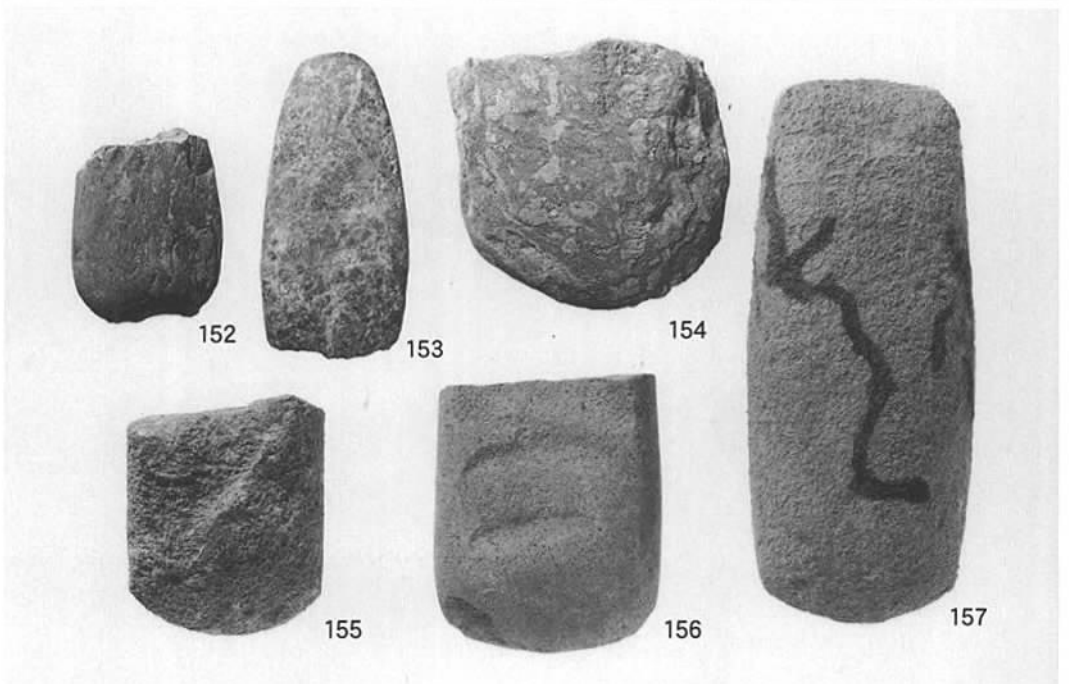
3. 磨製石劍



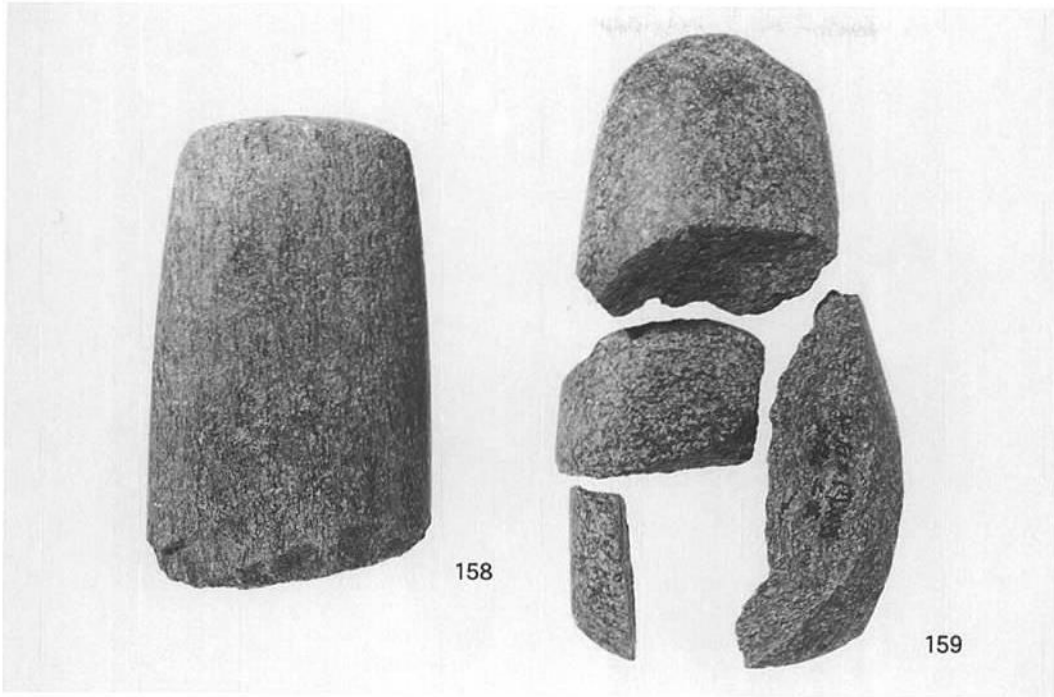
1. 片刃石斧①



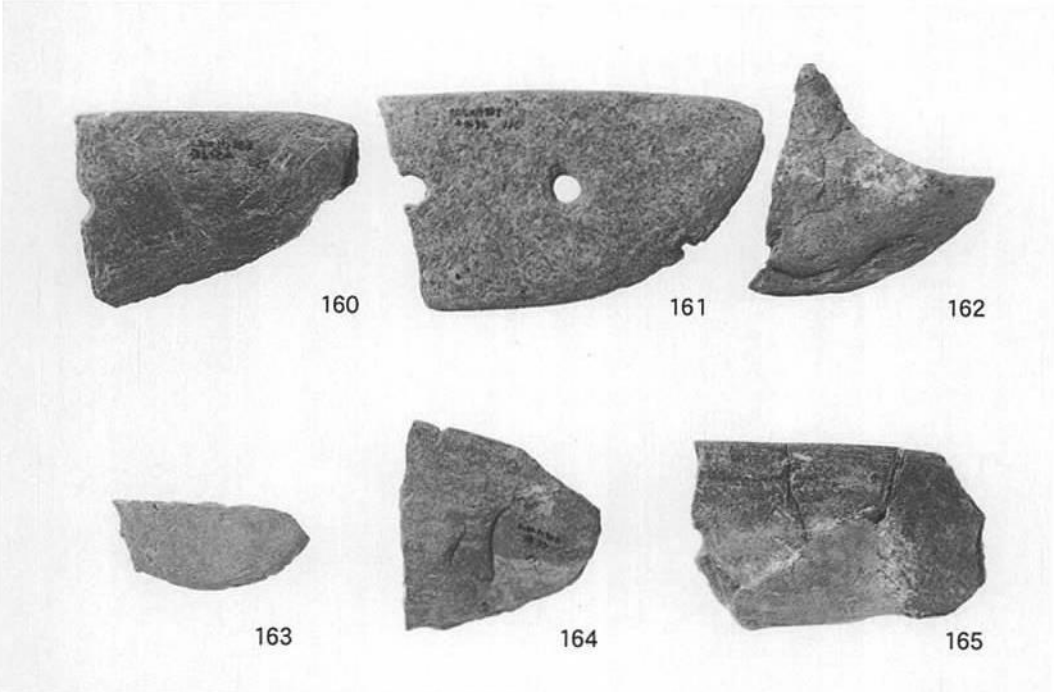
2. 片刃石斧②



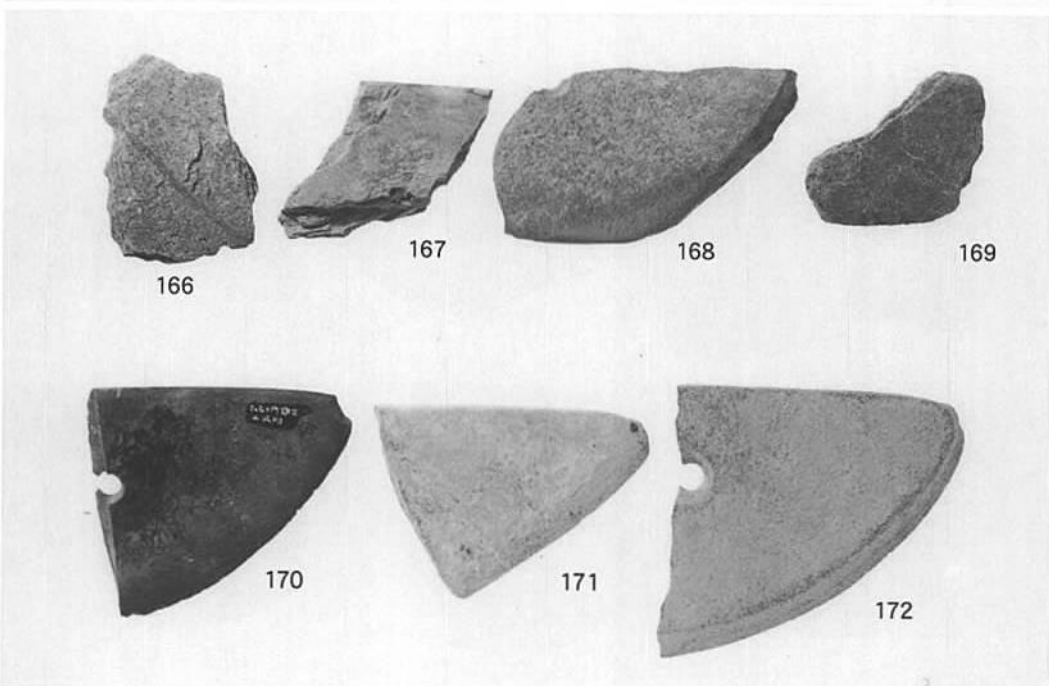
3. 磨製石斧①



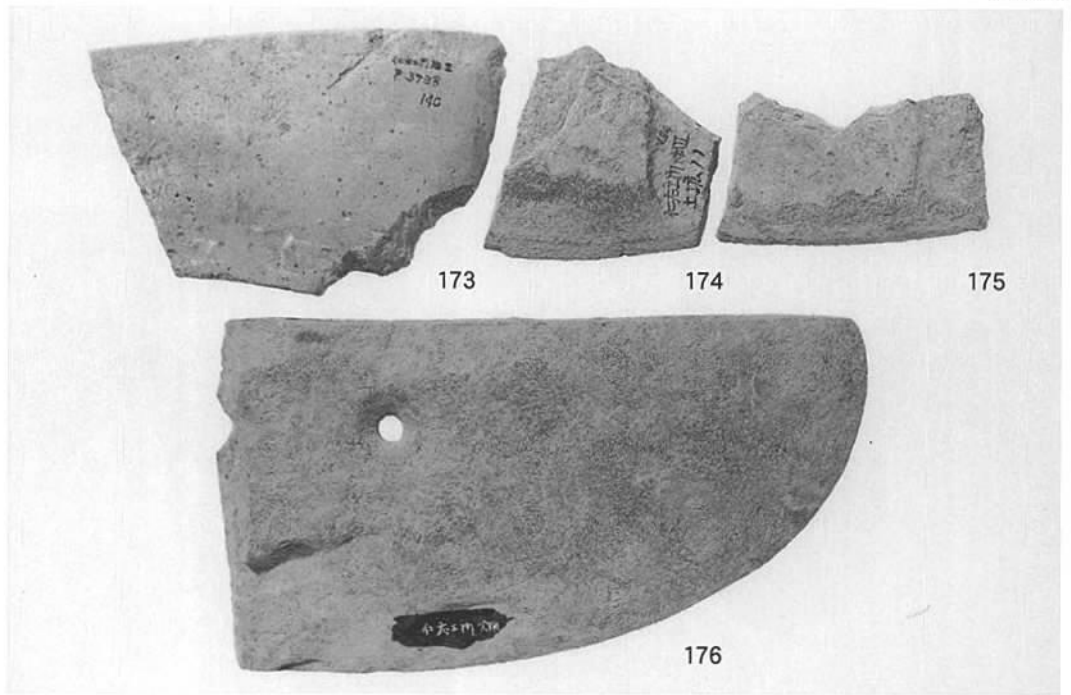
1. 磨製石斧②



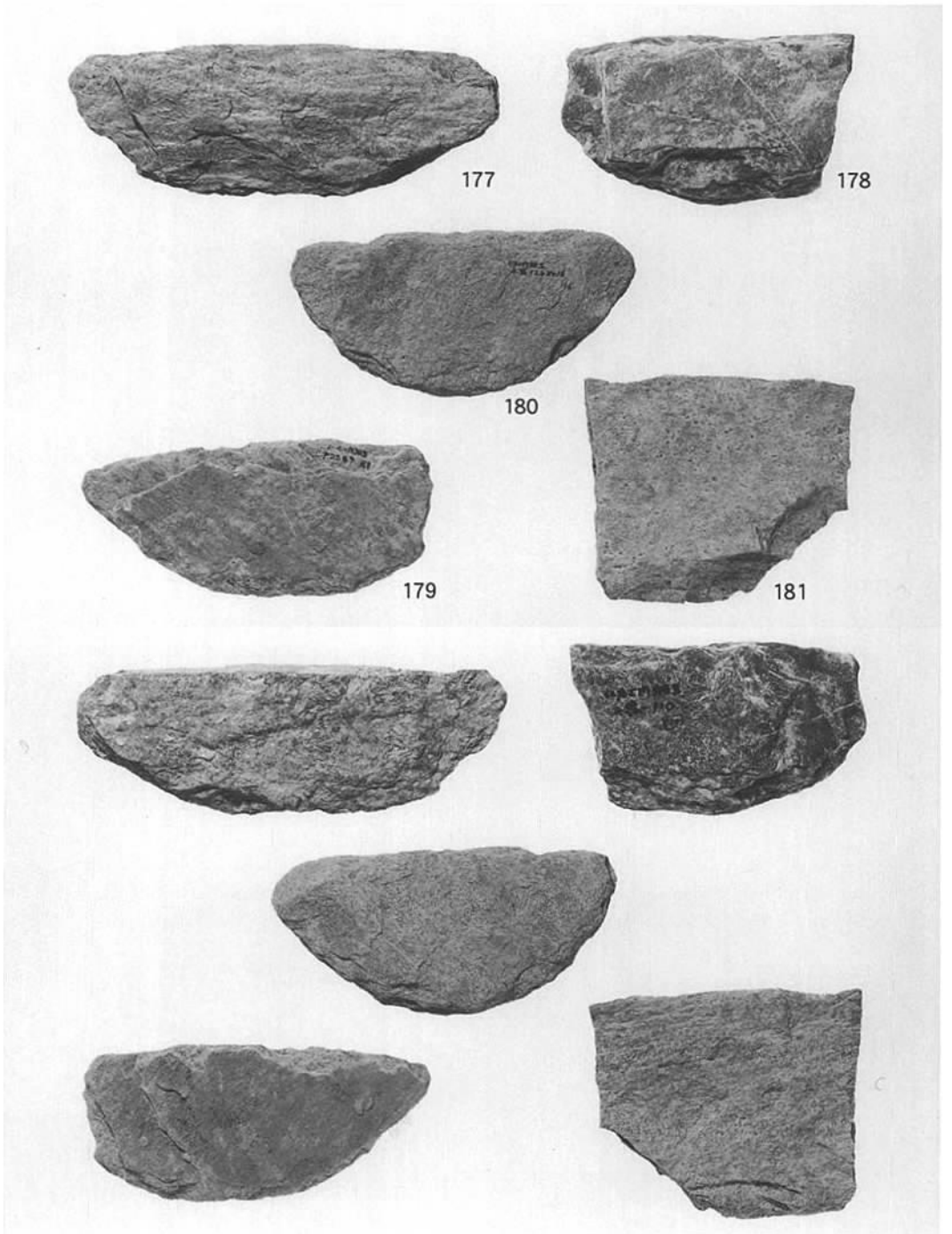
2. 石包丁①



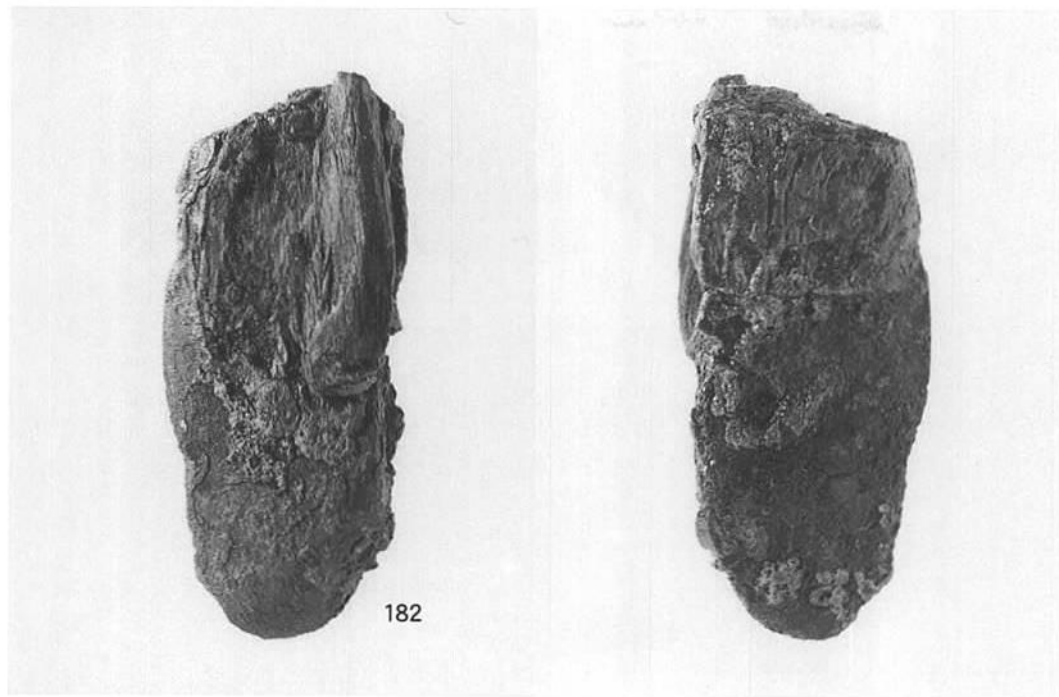
3. 石包丁②



1. 石包丁③

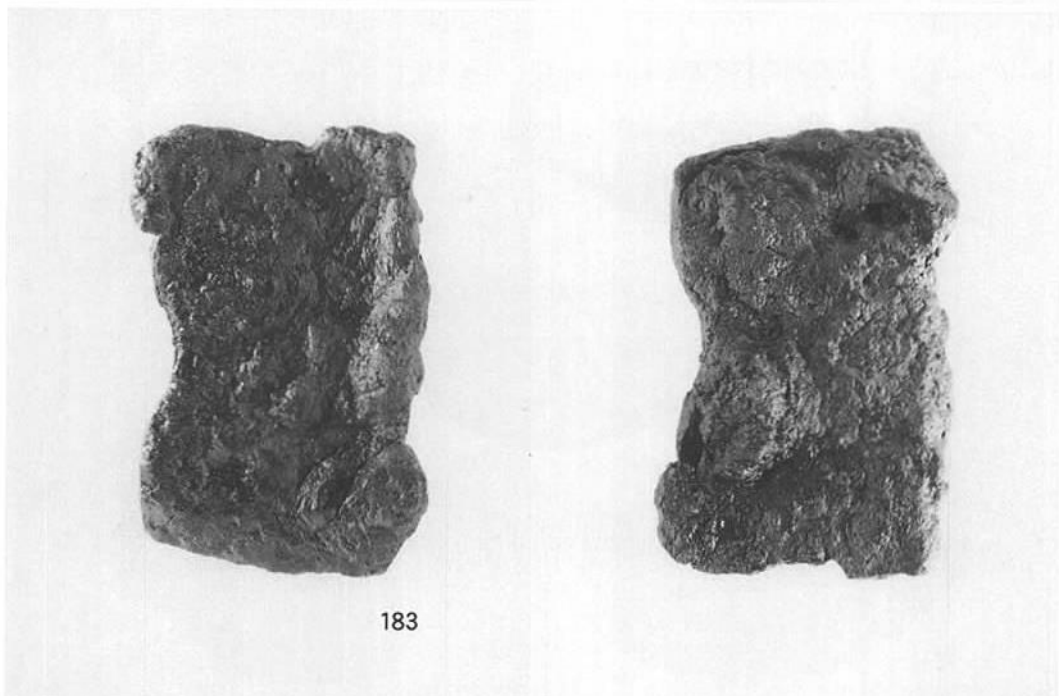


2. 石包丁未製品



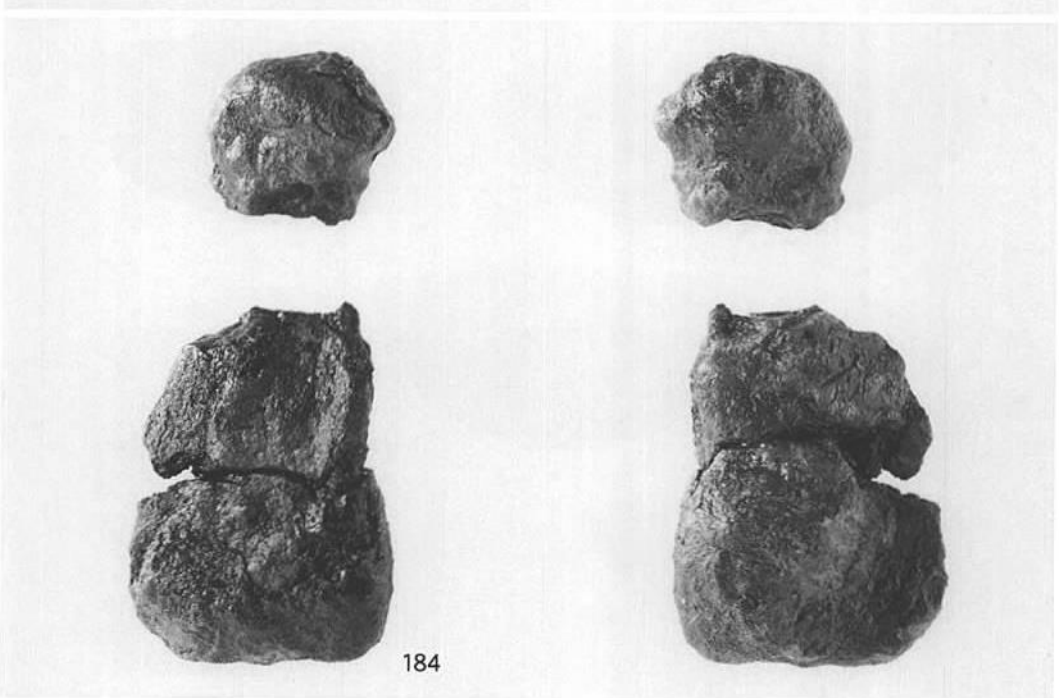
182

1. 鉄斧①



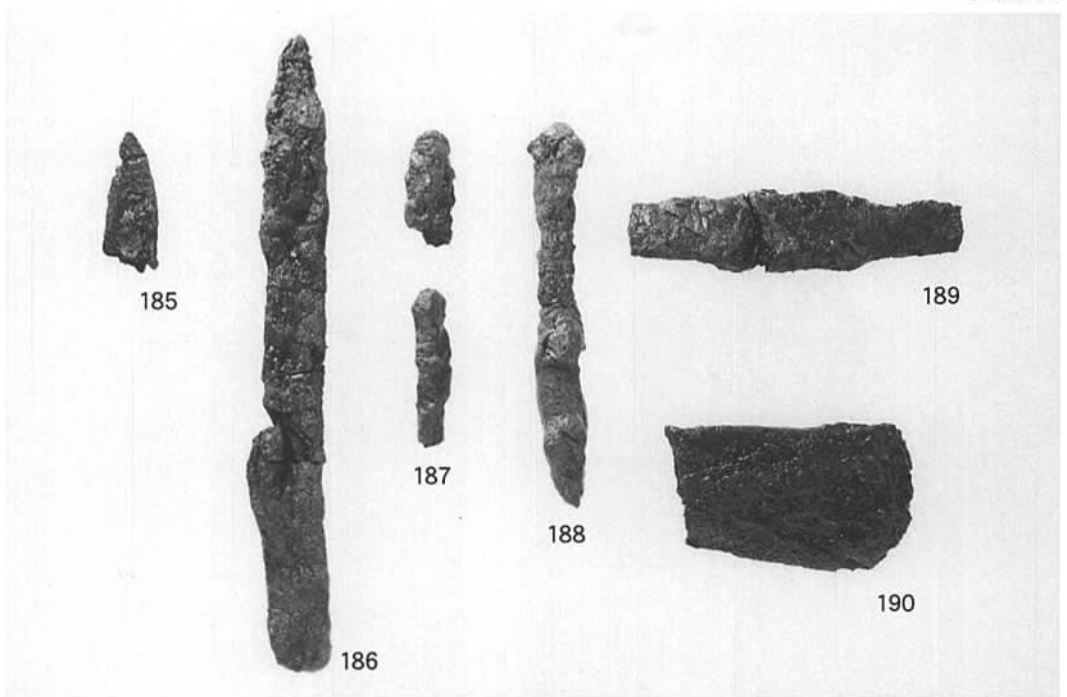
183

2. 鉄斧②

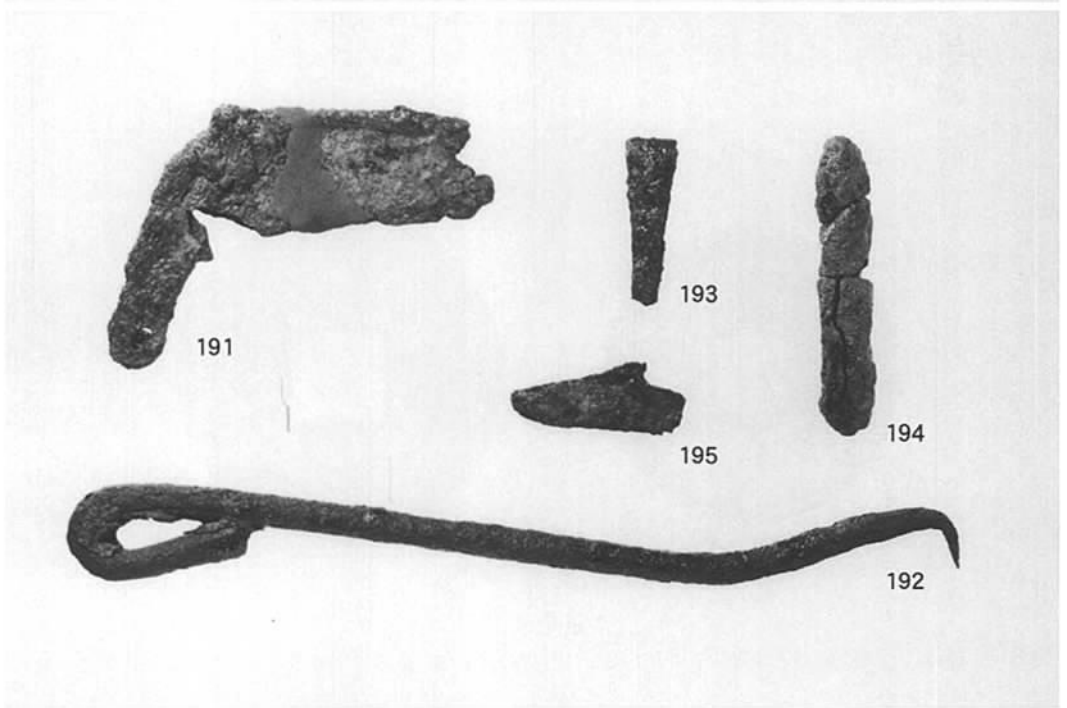


184

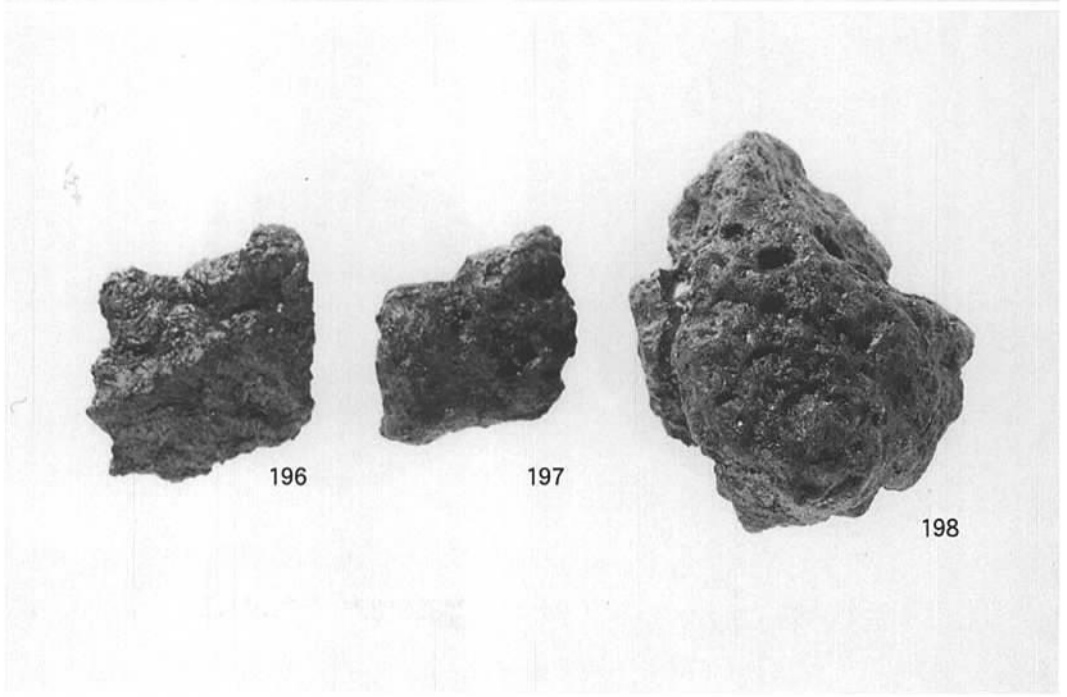
3. 鉄斧③



1. 鉄器①



2. 鉄器②



3. 鉄滓





199



200



201

1. 銅製品、ガラス製小玉



202



203



2. 古銭

# 報告書抄録

ふりがな	にえもんばたけいせき							
書名	仁右衛門畑遺跡Ⅱ							
副書名	福岡県浮羽郡吉井町大字新治所在遺跡の調査							
巻次	Ⅱ（弥生時代編）							
シリーズ名	一般国道210号線浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第14集							
編著者名	吉田東明							
編集機関	福岡県教育委員会							
所在地	〒812-8575 福岡市博多区東公園7番7号							
発行年月日	西暦2001年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
にえもんばたけいせき 仁右衛門畑遺跡	福岡県浮羽郡吉井町 大字新治字仁右衛門畑 字灰高	40481	630095	33° 20' 41"	130° 45' 19"	1995.4.10 ? 1996.3.10 ? 1996.4.11 ? 1996.6.3 1997.2.10 ? 1997.3.25 ? 1997.4.23 ? 1997.5.28	8,115m <sup>2</sup>	道路建設（一般 国道210号浮羽バ イパス建設）
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
仁右衛門畑遺跡	集落 墓	弥生時代	竪穴住居跡 土坑 溝 甕棺墓 ピット	弥生土器 石器 鉄器				

<b>福岡県行政資料</b>	
分類番号 J H	所属コード 2133051
登録年度 12	登録番号 9

一般国道 210号線	浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第14集
<b>仁右衛門畑遺跡Ⅱ</b>	
平成13年3月30日	
発行	福岡県教育委員会 福岡市博多区東公園7番7号
印刷	福博総合印刷株式会社 福岡市博多区堅粕3丁目16番36号

一般国道  
210号 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第14集

# 仁右衛門畑遺跡Ⅱ

福岡県浮羽郡吉井町大字新治所在遺跡の調査

—弥生時代編—

付 図



付圖 仁右南門城遺跡遺構配置圖(1/200)